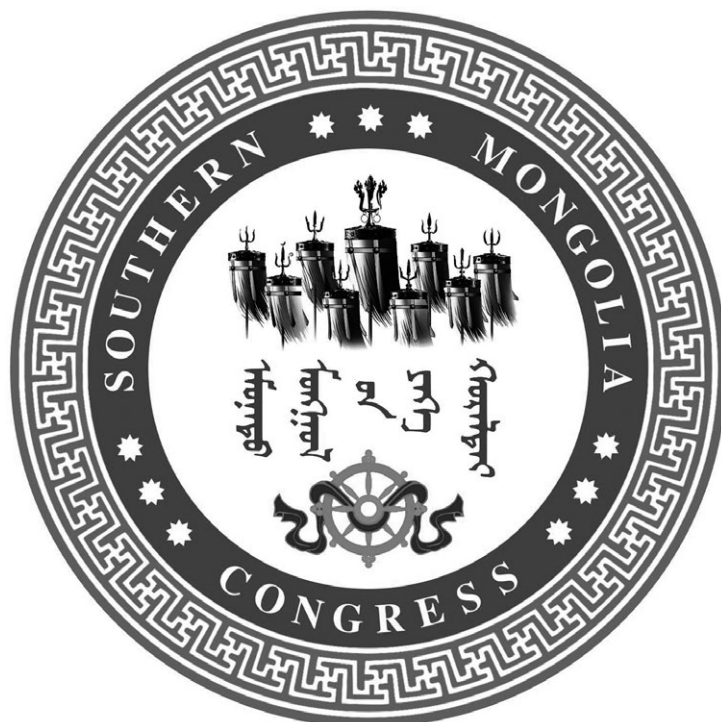
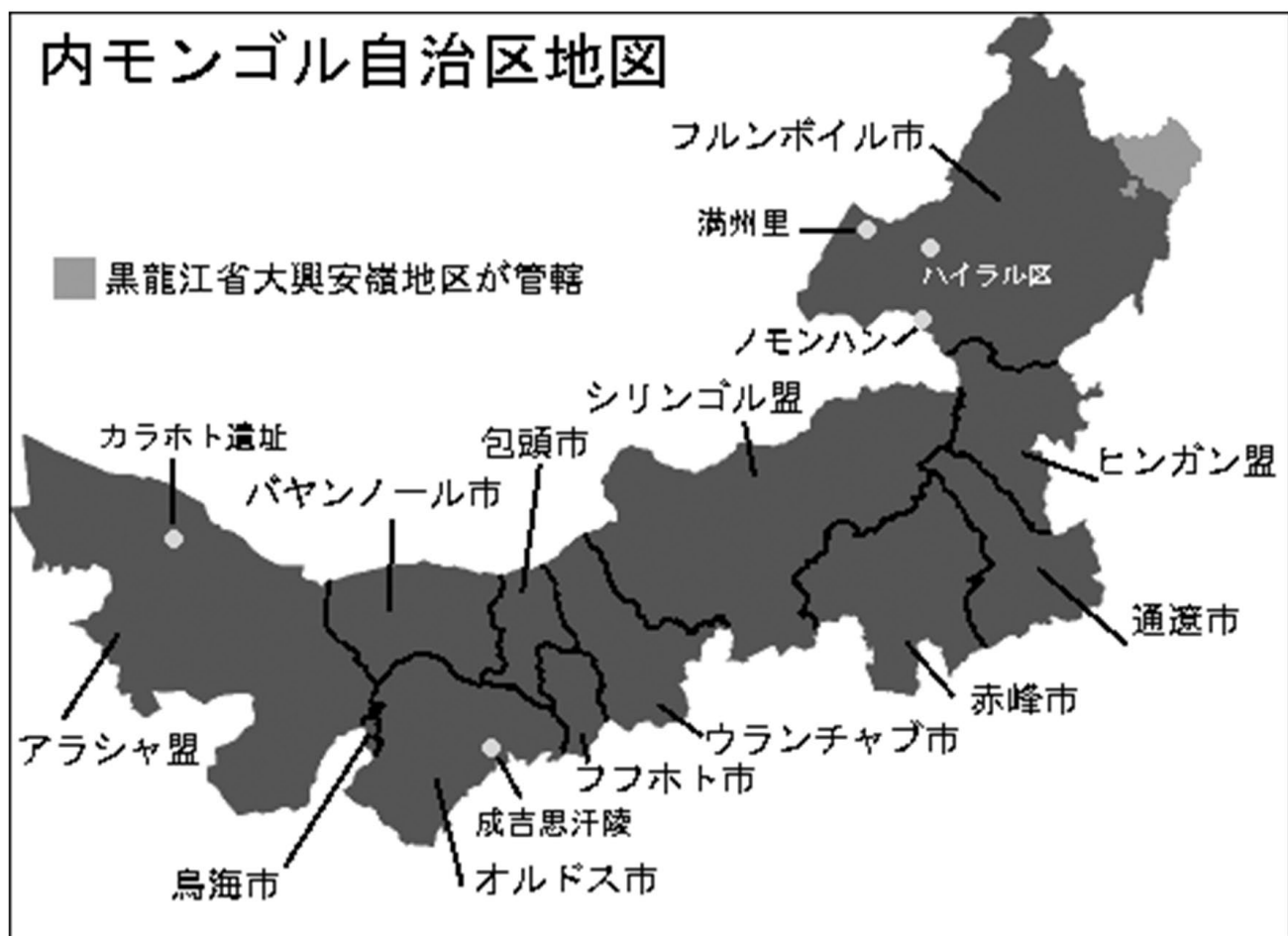


# 文化大革命時期における南モンゴル（内モンゴル自治区）における ジェノサイドの記録（ユネスコ「世界の記憶」登録申請資料案）



- 
- 1- 序文
  - 2- ユネスコ世界の記憶  
文化大革命時期における南モンゴル（内モンゴル自治区）  
におけるジェノサイドの記録
  - 6- 文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して  
実施した大量なジェノサイドに関する実証資料
  - 21- UNESCO: Memory of the World  
Record of the Genocide in Southern Mongolia (Inner Mongolia) during the  
Cultural Revolution
  - 26- A Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against  
Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution
  - 47- モンゴル語によるユネスコ申請資料
  - 69- クリルタイ結成宣言
-

# 内モンゴル自治区地図



# 序文

2016年、クリルタイ（世界南モンゴル会議）結成時に、私たちは、活動目標の一つとして、中華人民共和国の文化大革命時代における、南モンゴル（内モンゴル自治区）におけるモンゴル人に対するジェノサイドを、ユネスコ「世界の記憶」に、人類の負の遺産として登録することを提起いたしました。

あれから約5年が経過いたしました。ここに、「世界の記憶」に申請するための文書及び資料を、日本語、英語、モンゴル語で制作した資料集を発行いたします。これまで、数多くの支援者の皆様から、寄付金を初め多くのご支援をいただきました。そのことに深く感謝いたします。

そして、2021年4月15日、ユネスコ執行委員会は、「世界の記憶」の登録を、加盟国で構成する執行委の承認制とする新制度を決めました。また、他国の申請案件に異議があれば申し立てできる仕組みも導入され、解決まで審査は保留されることになりました。また、今後は、これまでのように民間団体がユネスコに直接、登録を申請できる仕組みを改め、各国政府を通じて申請は行われることになりました。

この制度改革自体は、ユネスコを中国など一部の国が政治的に利用することを廃する意味では前進と思われ。ただ、同時に、現在のところ民間の国際連帯組織であるクリルタイが、ユネスコにこのジェノサイドを登録する権利はなくなりました。また、申請内容に異論があれば、解決まで審査は保留されるとなれば、現在の中国政府の妨害により、この記録が審査を通過することは残念ながら困難と思われ。

クリルタイは、ひとまずこの資料作成を以て、一旦、「世界の記憶」に登録する運動は中断し、次の展開を考えていくつもりです。しかし、この資料自体は、人類の負の遺産の記録としてその価値を失わないものであり、今後もモンゴルジェノサイドの記録として活用していく所存です。

繰り返しますが、この資料作成にご尽力くださった皆様に、改めて深い感謝を申し上げます。

2021年11月 南モンゴルクリルタイ

# ユネスコ世界の記憶

## 文化大革命時期における南モンゴル（内モンゴル自治区）におけるジェノサイドの記録

### 1.0 Summary (max 200 words)

中華人民共和国における文化大革命時期に、南モンゴル(内モンゴル自治区)において行われた、モンゴル人に対するジェノサイド政策とその被害を、主として中華人民共和国側の資料に基づき記録したものである。ナチスのユダヤ人虐殺同様、二度と繰り返してはならない人類の負の遺産として記録されるべき歴史的資料である。

### 2.0 Nominator

#### 2.1 Name of nominator (person or organization)

申請団体名 複数可

南モンゴルクリルタイ（世界南モンゴル会議）

#### 2.2 Relationship to the nominated documentary heritage

申請アーカイブと団体との関係

同一組織

#### 2.3 Contact person(s) (to provide information on nomination)

連絡担当者

三浦小太郎 KOTARO MIURA

#### 2.4 Contact details

Name 連絡担当者 / Address 連絡先

KOTARO MIURA

東京都八王子市片倉町1077-15

Telephone 0426 83 0565

Facsimile 0426 83 0566

Email miurakotarou@hotmail.com

### 3.0 Identity and description of the documentary heritage

申請アーカイブの説明

文化大革命時期における南モンゴル（内モンゴル自治区）におけるジェノサイドの記録

文化大革命時代（1966年から1976年）における新聞記事、中国共産党資料、1968年に結成された内モンゴル自治区革命委員会による文献資料、写真資料、文化大革命終結後現在まで発表されている報告書並びに学術研究、静岡県立大

学教授楊海英氏著作並びに編集資料集。

### 3.4 History/provenance 歴史

1966年5月16日から、中国共産党酒席毛沢東の指令により文化大革命が勃発した。その一年後の1967年末から1970年夏にかけて、中国領とされた内モンゴル自治区では多くのモンゴル人たちが、何らの証拠もなく、モンゴル人の分離独立を目指す「内モンゴル人民革命党员」とみなされ、迫害の対象となったのである。

この「内モンゴル人民革命党员を肅清する」事件は、モンゴル人のみを対象とした大量虐殺でありジェノサイドだった。言い換えれば、モンゴル人だから、という唯一の理由で殺害されたのである。

中国政府の公式見解（郝維民 1991）によると、文革期の内モンゴル自治区ではモンゴル人は少なくとも346,000人が逮捕され、27,900人ことになる。この公式見解の他に、モンゴル人は少なくとも50万人が拷問に掛けられ、が殺害され、120,000人に身体障害が残ったとされる。文革期に同自治区のモンゴル人人口は150万人弱だったことから計算すれば、少なくとも5人に1人が逮捕され拷問を受けた死者は5万人に上るという見解（高樹華・程鉄軍 2007）と、50万人以上のモンゴル人が拷問・虐待され、その内30万強の人々が命を失ったという推測もある（G. Shirabjamsu 2007）。これ以外に48万以上の人々が迫害され、それ以外に強制移住によって発生した死亡者数も1,000人以上にのぼるという記録もある（阿拉騰徳力海 1999:85）。以上で示した死者数はいずれにしても暴行を受けてその場で死亡した人たちで、暴行を受けて後で家に帰って死亡した人数は含まれていない。

### 3.5 Bibliography 参考文献

1. 楊海英 著者「墓標なき草原——内モンゴルにいける文化大革命・虐殺の記録」（上、下）岩波書店、2009年、東京。
2. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料（2）-内モンゴル人民革命党肅清事件-』風響社、2010年。
3. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料（3）-打倒ウランフー（烏蘭夫）-』風響社、2011年。
4. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料（4）-毒草とされた民族自決の理論-』風響社、

2012年。

5. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (5) - 被害者報告書 (1)』風響社、2013年。
6. ボヤント 著「内モンゴルから見た中国現代史」、集広舎、2015年。
7. ボルジギン・フスレ 著「内モンゴルにおける文化大革命直前の政治状況についての一考察—内モンゴル大学における『民族分裂主義分子』批判運動を中心に—」、昭和女子大学、学園・総合教育センター特集 №811 (24)～(37) (2008・5) 東京。
8. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党勢力の内モンゴルへの浸透—『四三会議』にいたるまでのプロセスについての再検討—」、昭和女子大学、学園・総合教育センター特集 №787 (2006・5) 東京。
9. ボルジギン・フスレ 著「内モンゴルにおける土地政策の変遷について (1946年～49年)—『土地改革』の展開を中心に—」、昭和女子大学、学園 №791 (24)～(43) (2006・9) 東京。
10. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党の対内モンゴル政策 (1926年～36年) の考察」、昭和女子大学、学園 №797 (20)～(31) (2007・3) 東京。
11. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党の内モンゴルに対する宗教政策(1946年～48年)」、昭和女子大学、学園・№793 (56)～(66) (2006・11) 東京。
12. アラ騰徳力海 編著『内蒙古挖肃灾难实录』禁书 (出版社がなし)。
13. 曹永年 主編『内蒙古通史』内モンゴル大学出版社、2009年、Huhehot。
14. 郝維民 編『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社、Huhehot、1991年。
15. 郝維民 編『内蒙古革命史』人民出版社、北京、2009年。
16. 高樹華、程鉄軍 合著『内蒙文革風雷——一位造反派領袖的口述史』明鏡出版社、2007年、香港。
17. 郝維民 主編『内蒙古近代簡史』内蒙古大学出版社、1992年、Huhehot。

### 3.6 専門家名並びに連絡先

Name 専門家名 Qualifications Contact details 連絡先

1、楊海英 静岡県立大学

#### 4.1 アーカイブ所持者、機関について

アーカイブ所持者：南モンゴルクリルタイ事務所 (住所)

アーカイブ保管責任機関 南モンゴルクリルタイ

#### 4.5 著作権保持期間

楊海英先生および著作出版社の著作権

## 5.0 この申請の重要性

### 5.1 Authenticity (信憑性)

本申請資料は、文化大革命時代の中国共産党側の資料や報道記事からの引用が主流をなしており、その多くは当時の公的文書であり信憑性は極めて高い。

### 5.2 World significance (世界における申請の重要性)

一九四八年一月九日、国連総会は「ジェノサイドの防止及び処罰に関する条約」(略してジェノサイド条約)を採択した。これは勿論、ナチスによるユダヤ人ジェノサイドを看過してしまった国際社会の半生と、二度とこのような悲劇が起こらないために定められたものである。「ジェノサイド条約」の第二条の規定は以下の通りである。

この条約において集団殺害とは、国民的、人種的、民族的又は宗教的な集団の全部又は一部を破壊する意図をもって行われる次の行為をいう。

a) 集団の構成員を殺すこと

b) 当該集団の構成員の肉体又は精神に重大な危害を加えること

c) 集団の全部又は一部の肉体的破壊をもたらすために意図された生活条件を集団に故意に課すること

d) 集団内における出生を妨げることを意図する措置を課すること

e) 集団の児童を他の集団に強制的に移すこと

中国共産党が発動したモンゴル人ジェノサイドの実態は、以上で示した国連による「ジェノサイド条約」の規定とすべて合致している。1969年5月、内モンゴル自治区東部の三盟と西部の三旗がそれぞれ隣接する漢人とムスリムの省(自治区)に分け与えられた。モンゴル人に対する分割統治政策の導入である。モンゴル人の領土が再び自治区に返還されるのには、1979年まで待たなければならなかった。

このようなジェノサイドが再び行われてしまったことへの反省と、今後の防止対策をよりの確なものとするために、人類の負の遺産として、この申請は国際的な意味があることと確信する。

### 5.3 Comparative criteria: アーカイブの特色 重要性

#### 1 Time 時代

文化大革命時代。1966年から76年の時期を指す。

#### 2 Place 場所

内モンゴル自治区全域

#### 3 People 人

文化大革命当時、内モンゴル自治区に在住していたモンゴル人全体を指す。

#### 4 Subject and theme テーマ

内モンゴル自治区全土において行われたジェノサイドとその記録、証言。これがモンゴル人を対象とした民族絶滅政策であったことを記録する。

#### 5 Form and style 形式

各地域におけるモンゴル人の被害状況を提示する。

##### (1) シリングル盟の事例

一九七〇年代初期のシリングル盟には約一四万五〇〇〇人のモンゴル人と、四三万三〇〇〇人の漢人がいた。シリングル盟軍区司令官の趙徳栄 (Zhao Derong) は「俺はモンゴル人を見るだけで気分が悪くなる、シリングル盟のモンゴル人をすべて粛清しても全国から見れば一滴みしかない」「内モンゴルの軍隊内のモンゴル人は上から下まで悪い奴ばかりだ、今回の運動にてすべてのモンゴル人を思い切って粛清しよう」と発言し、盟の軍隊の中でも343人が粛清の対象とされ、拷問や暴力を受けた。そのうち210人がモンゴル人だった。

彼はまた、「モンゴル人たちを百パーセント内モンゴル人民革命党員として粛清しても間違いではない。やつらが死んでもびっくりすることは何もない。大したことではない。モンゴル人たちが一人ずつ死んでいけば、我々は大変助かる」などの発言をし、モンゴル人に対する粛清を促した。趙司令官の文革運動指揮により暴行等に耐え切れず死亡した者は1,863人にのぼった。暴行の種類は多様にわたり、何十種類にのぼった。以上は、モンゴル人虐殺が内モンゴル人民党に属するか否かは無関係に行われた民族ジェノサイドであることを証明している。

この地域における残虐行為、性的侮辱については添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイドに関する実証資料」に付す。

##### (2) イケ・ジョー (Ikh-joo) 盟の事例

イケ・ジョー盟では合計15万人の人々が「内モンゴル人民革命党員」とされた。当時、盟全体の人口は約74万人で、そのうちの約21%を占める。モンゴル族はほぼ全員、「内モンゴル人民革命党員」とされた。

殺害された人は1,260人で、5,016人が傷害を負われ、2,322人に身体的な障害が残った。そして、完全に生活能力を失った人は739人に達する。殺された幹部のうち、11人が旗政府の旗長で、課長級は150人、生産大隊や小隊の長は500人にのぼる。そのうち、ハンギン旗の死者

は118人で、ウーシン旗は149人である。

この地域における残虐行為と性的侮辱、拷問については添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイドに関する実証資料」に付す。

##### (3) ウラーンチャブ (Ulaanchab) 盟の事例

ウラーンチャブ盟には1970年代初期に約5万7,000人のモンゴル人と270万人の漢人大衆が住んでいた。

ウラーンチャブ盟の犠牲者は死者が1,686人で、負傷者は8,628人で、身体に障害が残った者は4,650人に達する。そのうち、チャハル右翼後旗では200人のモンゴル人が殺害された。この旗のウラーンハダ公社サイハンタラ生産大隊では、「解放軍毛澤東思想宣伝隊」や漢人の「貧下中農毛澤東思想宣伝隊」の指揮下で、一八日間で一八人が殺され、三三人が重傷を負った。平均して、毎日一人のモンゴル人が殺害されていた。このような残虐な殺戮を働いた「解放軍毛澤東思想宣伝隊」や「貧下中農毛澤東思想宣伝隊」のメンバーたちは例外なく内モンゴルの外からやってきた漢人たちである。また、漢族の知識青年や目的もなく放浪していた漢人たち(盲流)も積極的に加わっていた。

この地域における残虐行為や性的侮辱、拷問については添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイドに関する実証資料」に付す。

##### (4) バヤンノール盟の事例

バヤンノール盟では文革後期の1970年代初期に約3万9,000人のモンゴル人と118万人の漢人がいた。同盟では8,415人が「内モンゴル人民革命党員」とされ、363人が殺害された。重傷者は3,608人である。モンゴル人から生まれたばかりの赤ん坊も「反革命的な内モンゴル人民革命党員」とされた。

この地域における残虐行為や性的侮辱、拷問については添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイドに関する実証資料」に付す。

##### (5) ジェリム盟の事例

ジェリム盟では計4万8,500人が「内モンゴル人民革命党員」とされ、3,900人が殺害された。1万4,000人が重傷を負わされた。

この地域における残虐行為や性的侮辱、拷問については添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイドに関する実証資料」に付す。

## (6) フルンボイル盟

同盟では 47,500 人が迫害を受け、14,329 人が拘禁され、2,307 人が虐殺された。

この地域における残虐行為や性的侮辱、拷問については添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイトに関する実証資料」に付す

## (7) ヒンガン盟

ホルチン右翼前旗では 10,000 人以上の人々が迫害され、500 人以上が殺害された。その際、「ストーブで焼き殺す」、「電気でショック死させる」、「熱湯を全身にかける」、「肛門に空気を入れる」などの暴力手段が実施された。

また、モンゴル人女性を集団でレイプし、乳房を焼くなどの性的な虐待も横行した。「反革命分子」や「民族分裂者」とされた者の身体には「内モンゴル人民革命党」の略称である「内人党」という三文字が線香で焼かれた。この地域における残虐行為や性的侮辱、拷問については、添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイトに関する実証資料」に付す。

## (8) ジョーウダ盟の状況

ジョーウダ盟では、ほとんどすべてのモンゴル人たちが「内モンゴル人民革命黨員」とされていた。モンゴル人に対する悪質なデマ、虐殺行為、性的侮辱と拷問については、添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイトに関する実証資料」に付す。

## (9) アラシャ地域の事例

内モンゴル自治区最西端のアラシャ地域のモンゴル人たちは当時、一部が甘粛省に、もう一部は寧夏回族自治区に編入されていた。中国政府はモンゴル人の住むところをばらばらに分割して、その勢力を弱めようとしていた政策の結果である。

アラシャ地域にはモンゴルの古い部族の一つであるトルグート・モンゴル部が住んでいた。そのため、文化大革命中はモンゴル人たちが「トルグート党」を作って、「祖国を分裂させようとしている」と断罪された。いわゆる「トルグート党も内モンゴル人民革命党の一変種」とされた。トルグート・モンゴル人は全部で約 2,000 人の人口だったが、約 200 人が殺戮の対象になった。

この地域における残虐行為や性的侮辱、拷問については、添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイトに関する実証資料」に付す。

## (10) フフホト市と包頭市の事例

内モンゴル軍区の騎兵第五師団には約 200 名のモンゴル人将校がいたが、1971 年になると、ほとんど全員が粛清されていた。

内モンゴル自治区公安庁の庁長ビルクバートルが粛清され、副庁長の雲世英 (Yun Shiying) なども失脚させられた。自治区公安庁の政治部のテンヘは、一九六八年二月に逮捕され、長期間にわたって拷問にかけられた。彼から他のモンゴル人の情報を引き出そうとしていた。テンヘは漢人たちのその要求を断ったため、結局、1970 年 5 月 21 日に殺害された。

この地域における残虐行為、性的侮辱、拷問などについては添付資料「文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイトに関する実証資料」に付す。

## 6 Social/ spiritual/ community significance: 社会にとっての重要性

中国政府は文化大革命が中国国内において大きな被害をもたらしたことを認め、その原因を「林彪、江青ら『4人組』の反革命集団の責任である」と結論付けているが、同時に中国共産党中央宣伝部は、「出版管理規定を重ねて言明し、厳格に執行する通知」を 2004 年に発表し、「いまだに論争のある問題についての公開出版や発表には慎重な態度を取り、社会的な反響を真剣に考慮し「民族団結に害を及ぼす内容のあるものを出してはならぬ」と定めている。これは、中国文化大革命においてモンゴルに対し行われた漢民族によるジェノサイドの実態を解明することを妨げており、このような記録を中国国内で自由に閲覧、発行することには困難を伴う。その意味においても、国際組織であるユネスコ世界の記憶にこの記録が登録されることは国際社会における理解と共に中国国民に対しても社会的に意義のあることである。

## 6.0 Contextual information

### 6.1 Rarity 希少性

現在の時点で、文化大革命における内モンゴルにおけるジェノサイドのまとまった記録はユネスコ世界の記憶にはほかに登録されていない。これが世界でも初めての登録申請であり、同時に、国際社会全体への発表である。

### 6.2 Integrity 一貫性、統一性

時期を文化大革命時期に、地域を内モンゴル自治区に限定し、かつ具体的な資料に基づくことで、この申請資料は一貫性を有していると判断する。

# 文化大革命時期において、中国共産党がモンゴル人に対して実施した大量なジェノサイドに関する実証資料

1966年5月から1976年9月の間で、中国共産党中央委員会及び中華人民共和国中央政府は、南モンゴル人に対して実行したジェノサイドに関する実証資料。このジェノサイドは共産主義政権、中国共産党を代表するその国家及び政府が被統治者になる民族に対して公然に実施した行動であり、その具体的、歴史的根拠は以下の通りである。

## 1、政権の主導権を握っていた毛沢東、周恩来、江青、康生らが自ら指導したジェノサイドである。彼らの具体的な指示は以下の通りである。

ア、1966年の夏から1976年までの間に、中国において「無産階級文化大革命」（以下では、特別な説明を除いて「文革」と略す）運動が起こった。この「偉大な運動」を「自ら発動し、自ら指導した」のは、「偉大な領袖」である毛沢東であったが、プロレタリア独裁のもとで、資本主義の道を歩んでいるとされた人々に対する暴力と虐殺により、何千万人も死者が出るなどの混乱を経て、当時の共産党中央は、その一切の罪の責任を林彪及び江清ら「四人組」に帰して終わった。中国全体において、内モンゴル自治区における文革運動は、そのほかの地域と比べて独特な形をもつ。その最大の特徴は「民族分裂」を行ったとされるモンゴル人への粛清であった。当時、自治区の最高指導者であったウランフーが、「内モンゴル自治区を偉大な祖国から切り離して、内外モンゴルを合併し、独立王国を創ろうとしている」、とされた。

内モンゴル自治区における文革大革命のきっかけは1966年5月4日より開催された中国共産党中央政治局拡大会議と、同月21日から7月25日までに開かれた華北局会議、いわゆる「前門飯店会議」である。同会議で、ときの中国共産党中央政治局委員候補、國務院副総理、国家民族委員会主任、中共内モンゴル自治区委員会書記など多数の重要なリーダーたちがその基調を決めた。

イ、内モンゴル自治区革命委員会は1968年7月20日に正式に「内モンゴル自治区革命委員会文件」の「内蒙革発(68)351号」と「内蒙革発(68)352号」の形で、「關於对『内蒙古人民革命党』的处理意見」と「關於对『内蒙古人民革命青年团』的处理意見」を採択した。

## 2、漢人が主導する共産主義政権からモンゴル人に実施し

たジェノサイドである。その具体的な根拠は以下の通りである。

「新しい内モンゴル人民革命党をえぐりだす運動」、即ち「新内人党案件」である。1968年2月4日に、康生が騰海清に「内モンゴル人民革命党はまだ地下活動を続けている。(粛清の際に)最初は広く捕まえてもかまわないから、心配はない」と指示していた{郝維民 1991:309}。しかし、世の人はみんな知っているように、康生は「中国人民の偉大な領袖毛沢東の側近」であって、およそ林彪とは無関係である。江青夫人も万事、夫君の勅旨で働き回っていたに過ぎない。

「文革」について、中国社会科学院の政治学研究所の元所長の嚴家其氏は、「1966年から1976年にかけて、中国では空前の『無産階級文化大革命』が発生した。今回の政治運動は、例のない人権を踏みじりに、民主や法制を無視した運動であり、文明を踏みにじった災難である。中華民族の歴史の中で、前例のない災禍である<sup>1</sup>」と語った。しかし、中国の他の省・市と比べると、内モンゴル自治区の場合は、「民族問題」や「民族分裂問題」などが存在して、内モンゴルの「文革」の主要な内容であった。<sup>2</sup>すなわち、中国政府は、漢人からつくられた政府であり、その政府が自分の人々（漢人、いわゆる人民）に対して、どの政策を執行するか、どのような政治的運動が行なわれるかと言うことは、漢人と漢人の間の問題であり、モンゴル人やチベット人にとって、あまり関わる問題ではない。しかし、その他の省・市と比べると、内モンゴル地域の場合、「文革」は他民族からモンゴル人に対して行なわれた政治的虐殺であると考えられる。その故に、モンゴル人や他の国々の人々は、「文革」の真相を了解する権利があると思う。とくに、内モンゴル東部地域の旗レベルにおける文化大革命に関する研究は、未だに進んでいないのである。本章で、内モンゴルにおける文革に関する歴史的背景と先行研究を説明し、後旗における文革の始まりとプロセスを論じた上、最後には、筆者が現地調査にて、当事者に対してのインタビューを叙述する形で取り挙げた。それによって、中共が、内モンゴル東部地域で行った文革のやり方、方法、目的、真相などを明らかにして、それがモンゴル人に齎した災難を解明する。

「えぐり出し粛清」運動は騰海清将軍が指導をとり、軍隊がその主力軍になって、内モンゴル自治区全体で行われ

1 嚴家其 高舉 著『『文化大革命』十年史』、潮流出版社、1989年、香港、7頁。

2 吳迪 著『『内人党』大血案始末』、宋永毅 主編『文革大屠殺』より。開放雜誌社、2002年、香港、60頁。



た。当時、滕海清將軍の秘書であった李徳臣が言った、「思い切ってやることを基礎とする」、「羊の群れに入るまで掘ろう」という有名な言葉が語るように、内モンゴル自治区の隅々まで行われた。

## 内モンゴルの文化大革命における人的・経済的被害状況に関する報告

### 一、学術研究が示すモンゴル人の被害状況<sup>3</sup>

中国政府の公式見解（郝維民 1991）によると、文革期の内モンゴル自治区ではモンゴル人は少なくとも 346,000 人が逮捕され、27,900 人ことになる。この公式見解の他に、モンゴル人は少なくとも 50 万人が拷問に掛けられ、が殺害され、120,000 人に身体障害が残ったとされる。文革期に同自治区のモンゴル人人口は 150 万人弱だったことから計算すれば、少なくとも 5 人に 1 人が逮捕され拷問を受けた死者は 5 万人に上るという見解（高樹華・程鉄軍 2007）と、50 万人以上のモンゴル人が拷問・虐待され、その内 30 万強の人々が命を失ったという推測もある（G. Shirabjamsu 2007）。これ以外に 48 万以上の人々が迫害され、それ以外に強制移住によって発生した死者数も 1,000 人以上にのぼるという記録もある（阿拉騰徳力海 1999:85）。以上で示した死者数はいずれにしても暴行を受けてその場で死亡した人々で、暴行を受けて後で家に帰って死亡した人数は含まれていない。

### 二、軍隊が参与した組織的な殺害：内モンゴル各地の被害状況

#### 1、シリング盟の事例

一九七〇年代初期のシリング盟には約一四万五〇〇〇人のモンゴル人と、四三万三〇〇〇人の漢人がいた。シリング盟軍区司令官の趙徳栄（Zhao Derong）が言った。「俺はモンゴル人を見るだけで気分が悪くなる、シリング盟のモンゴル人をすべて粛清しても全国から見れば一摘みしかない」。彼は 1968 年 5 月にまた、「内モンゴルの軍隊内のモンゴル人は上から下まで悪い奴ばかりだ、今回の運動にてすべてのモンゴル人を思い切って粛清しよう」と発言し、盟の軍隊の中でも 343 人が粛清の対象とされ、拷問や暴力を受けた。そのうち 210 人がモンゴル人だった。彼はまた、「モンゴル人たちを百パーセント内モンゴル人民革命党員として粛清しても間違いではない。やつらが死んでもびっくりすることは何もない。大したことはない。

モンゴル人たちが一人ずつ死んでいけば、我々は大変助かる」などの発言をし、モンゴル人に対する粛清を促した。趙司令官の文革運動指揮により暴行等に耐え切れず死亡した者は 1,863 人にのぼった。暴行の種類は多様にわたり、何十種類にのぼった。

#### (1) 残虐行為

スニト右旗チャガン・ホショー大隊には二六戸のモンゴル人が住んでいた。そのうちの二〇戸が外来の漢人たちによって「搾取階級の牧主」の身分にされた。「牧主」とは漢人地域の「地主」に相当する概念である。「搾取階級」に認定されたモンゴル人たちはその放牧地から追い出され、代わりに漢人たちが彼らの故郷に住み着いた。モンゴル人たちは着の身着のまま洞窟のなかで五、六年間も暮らすしかなかった。

シリング盟の実権を握っていた「人民解放軍軍事管理委員会」は、一九六九年五月二日に毛澤東が「内モンゴルにおける〈内モンゴル人民革命党員をえぐり出し、粛清する運動〉（挖肅）はやや拡大してしまった」との指示を出した後も、迫害を止めようとしなかった。例えば、鑲黄旗の農牧部長トプチンがリンチに耐えられなくなって他の数十人を「内モンゴル人民革命党員」だと認め、自分もその一員であると自白させられた。五月二日以降も、人民解放軍の漢人軍人たちは彼が自らの「証言」を撤回するのを拒みつづけた。引き続きトプチンを「模範的な犯人」として扱った。トプチンは自責の念から自殺を選んだ。

同じく鑲黄旗の公安局と検察局、それに裁判所に計三〇名のモンゴル人幹部が勤めていたが、例外なく粛清された。罪名は「チンギス・ハーンの子孫で、ウラーンフの猛将」だった。人民解放軍の兵士たちの暴力を受けて、この旗のモンゴル人の死傷者の数は一二〇人に達した。正蘭旗ポーシャタイ小学校は一九一六年に成立し、内モンゴルでもっとも早い時期にできた学校の一つだ。三百五〇人のモンゴル人の寄宿生がいて、広大な草原に千頭もの家畜を放し、付属の牛乳加工工場やソーダ工場もある、裕福な学校だった。文化大革命中はこの学校が「民族分裂の巣窟」とされ、設備もことごとく破壊され、略奪された。数十名のモンゴル人教師たちも「内モンゴル人民革命党員」とされた。そのうち、書記のプルプは腕が折られ、耳がちぎられて殺害された。

スニト右旗は、モンゴル族の高度の自治を目指してさまざまな努力を続けてきた徳王（テムチュクドノロブ、一九〇〇～一九六六）の故郷である。毛澤東に派遣された滕海清（Teng Haiqing）將軍は自ら人民解放軍を率いて旗を訪れ、「挖肅の任務」を明示した。滕海清はまた旗の民

3 自治区内における被害状況は同自治区の文化大革命に関する従来の学術研究などに基づく記録である。

兵組織を統括する武装部にも肅清への協力を命じて、次のような訓示を出した。

スニト右旗では祖国を裏切って修正主義のモンゴル国に投降しようとしたやつがたくさんいるはずだ。彼らは全員ウラーンフの家来だ。階級闘争というのは、彼らと闘争することだ。スニト右旗の状況はきわめて複雑だ。しかし、四、五〇パーセントのモンゴル人は良いやつだろう。

賚海清將軍の指示を受けて、スニト右旗ではさまざまな「内モンゴル人民革命党」の「変形組織」や「下部組織」が「えぐり出された」。題して「統一党」、「沙漠党」、「黒虎庁」、「白虎庁」など、合わせて三〇以上もある。「内モンゴル人民革命党員」とされたモンゴル人は8,000人で、この旗に住むモンゴル族全成人人口の五五パーセントに達する。そのうち、109人が残忍な方法で殺害された。

「挖肅」の基準は唯一つ、モンゴル人か否かだけである。スニト右旗のサイハンウルジ公社、プトゥムジ公社、ノガンノール公社では、モンゴル人の幹部たちは例外なく肅清され、代わりに漢人たちが幹部に任命された。ノガンノールに駐屯する李という人民解放軍の将校は次のように演説した。

かつてウラーンフはお前らモンゴル人たちを重用した。今回のような文化大革命がなければ、われわれ漢人たちはみんな殺されているだろう。お前らモンゴル人たちは偉大な中国共産党のものを食って、着て、それでまた共産党に対して悪いことをしておる。今や偉大な領袖毛澤東の時代だ。ウラーンフの時代ではないぞ。

賚海清將軍の部隊を率いてスニト右旗に進駐していた解放軍の副政治委員は漢人の陳氏で、副参謀長は邱氏、副指導員は高氏だった。彼らは次のような指示を出した。

「スニト右旗の大地を三尺掘ってでも、統一党を見つけ出そう」。

また、プトゥムジ公社に進駐していた劉という漢人の小隊長は言った。

「モンゴル人たちが全員死んでも大した問題はない。我が国の南方にはたくさん人間がいる。モンゴル人たちの生皮を剥ごう」。

ノガンシリ生産大隊では、一四歳以上のモンゴル人に対し、全員「内モンゴル人民革命党員」として登録するよう強制した。六七歳になるダムディンソー老も怖くなって生産大隊の本部を訪れて登録しようとした。彼女は中国語が話せないで、生産大隊の本部へ向かう途中にずっと「統一党」、「統一党」と繰り返し暗記していた。ところが、いざ本部に着くと、怖くなって忘れてしまい、もう一度帰って覚悟してから登録したことがある。

東ウジムチン旗エヘボリク牧場では、モンゴル人幹部が全員肅清された。代わりに北京からやってきた漢族の知識青年たちが権力を握った。彼らは次のように公言していた。

「おれたちは、モンゴル人をやっつけるために来たのだ」。

「モンゴル人たちが漢人を殺そうとしている。戦争になったら、モンゴル人たちは北へ、漢人たちは南へ行こう」。

「モンゴル人遊牧民の八〇、九〇パーセントが内モンゴル人民革命党員だ。モンゴル人は信用できない」。

東ウジムチン旗塩池公社の供社の主任ドンルプがある日、行方不明となり、政府はただちに彼を指名手配した。ある人は「ドンルプはモンゴル人民共和国の兵士を連れて国境地帯を巡回している」と言いふらしていた。そして、その家族も「偉大な祖国を裏切った者の親族」とされて、群衆による「人民独裁」の暴力を受けた。一九七二年、塩を掘っていた人たちが塩池のなかから遺体を見つけた。塩漬けになっていたためか、ドンルプの遺体は腐敗していなかった。ドンルプは「修正主義国家」へ逃亡したのではなく、殺されてから塩湖に捨てられたのである。

西ウジムチン旗バチ公社の書記チョイジジャムソは実直な性格で、いくら殴られても、自分は「内モンゴル人民革命党員」ではない、と断りつづけた。漢人大衆は彼を梁から吊るして、火で炙り、ナイフで体を傷つけた。食べ物も水も与えずに閉じ込められていた。そして、最後には漢人の知識青年李秀栄が鉄器で彼の頭を猛撃し、脳漿が部屋中に散って亡くなった。チョイジジャムソの夫人ヤンジマーが盟政府所在地のシリンホトへ上告に行くが、盟政府は受理しなかった。漢人の李秀栄は更にヤンジマーの後を追ってきて、もしこれからも上告するならば、ヤンジマーの子どもたちを殺す、と脅かした。

西ウジムチン旗ゴリハン牧場のあるモンゴル人は頭部に釘を七本打たれた後に、井戸のなかに投げ込まれた。

スニト左旗のある退役軍人のモンゴル人が「内モンゴル人民革命党員」とされて、繰り返しリンチされた。かつて革命軍隊にいた頃に怪我した古い傷からことごとく血が出るようになった。漢人大衆は「これはお前に対する二度目の褒章だ」と言って暴力を続けていた。

スニト左旗バヤンボラク公社の社長トゥメトが漢人たちに殺害された後、その夫人は夫の遺体をずっと埋葬せずに保存しつづけた。

## (2) レイプなど性的な侮辱

文革中にモンゴル人たちが拷問を受けている間、多くの女性たちがレイプされた。たとえば、スニト左旗(Zuun-sunid)では漢人の「知識青年」たちがモンゴル人女性を「人民大衆による独裁」(群衆専政)下におき、目隠しをしてから繰り返して強姦した。その結果、何人もの女性が妊娠させられた。正蘭旗(Shiluun-huhk)ではアディアという二〇代のモンゴル人女性がレイプされ、その上、長期間リンチされつづけた。

スニト右旗バヤンノール公社に住むある遊牧民は、

一九六九年六月二十七日に一人で政府にやってきて陳情した。彼によると、解放前には国民党の匪賊に家族六人のうちの三人を殺害されたという。そのため、彼は何かあっても毛澤東主席についていこうと決心していた。ところが、漢人たちは彼を裸にしてリンチし、そして一八、九歳の娘たちに見せながら、「毛主席に謝罪しろ」と強要した。

同じスニト右旗バヤンジュリへ公社バヤンタラ大隊の遊牧民ハルラー一家四人全員が「内モンゴル人民革命党員」とされた。漢人たちは彼らを裸にして、息子とその母親、義父と嫁が性行為をするよう強制した。侮辱に耐えられずに、義父は井戸に身投げして自殺し、嫁は首吊り自殺し、息子は刀で自害した。そして、残された母親も狂った。

東ウジムチン旗ボラク公社では、革命的な漢人大衆が老齢のツェベクジャブ夫婦とその息子夫婦を逮捕し、群衆の前で息子とその母親、義父とその嫁とが性行為をするよう強制した。一家が抗議したところ、漢人大衆はその母親を地面に抑えて、息子を体の上に乗せた。そして、義父と嫁をも同じ方法で侮辱した。漢人たちはそのような蛮行をやりながら、「恥ずかしいのか？お前らモンゴル人は昔からこんなものだろう」、と言いながら笑っていた。ツェベクジャブの夫人は家に帰ってまもなく自殺した。

## 2、イケ・ジョー (Ikh-joo) 盟の事例

イケ・ジョー盟では合計 15 万人の人々が「内モンゴル人民革命党員」とされた。当時、盟全体の人口は約 74 万人で、そのうちの約 21% を占める。モンゴル族はほぼ全員、「内モンゴル人民革命党員」とされた。

殺害された人は 1,260 人で、5,016 人が傷害を負われ、2,322 人に身体的な障害が残った。そして、完全に生活能力を失った人は 739 人に達する。殺された幹部のうち、11 人が旗政府の旗長で、課長級は 150 人、生産大隊や小隊の長は 500 人にのぼる。そのうち、ハンギン旗の死者は 118 人で、ウーシン旗は 149 人である。

### (1) 政府も認めざるを得ない虐殺の実態

ここで、「中国共産党イケ・ジョー盟委員会政策実施委員会(落實政策弁公室)」が一九七八年八月五日に出した『簡報』内の報告を見てみよう。

京字×××部隊の一個連隊がイケ・ジョー盟ウーシン旗のトゥク(圖克)公社に駐屯している間に、多数のモンゴル人が殺害された。

トゥク公社の人口は二九六一人で、そのうち九二九人が「内モンゴル人民革命党員」として「えぐり出された」。この数字は、全成人人口の七パーセントを占める。そして、二七〇人が「犯人」扱われ、四九人が殺害された。重度の障害が残った者は二七〇人になる。漢人を除いて、共産党員、共産主義青年団員、民兵になっていたモンゴル人全員が「犯人」とされた。

モンゴル人の草原は「大モンゴル帝国の馬の放牧地」だと断罪された。灌漑に使う井戸も「モンゴル人がクーデターのために用意した井戸だ」と批判された。

モンゴル人を迫害するのに、わざわざ隣の陝西省から漢人たちを動員してきた。盲流と呼ばれて、目的もなく各地を放浪していた漢人のフェルト職人が「内モンゴル人民革命党員をえぐり出す積極分子」として登用された。

人民解放軍の兵士たちはモンゴル人を迫害するのに五〇種以上の刑罰を用いた。具体的には以下のような残虐行為が横行していた。

一、棍棒を燃やして真赤にしてから女性の陰部や腹部を焼いた。被害にあった女性は陰部が破壊されて男性か女性かの区別もつかなくなった。腹部が破られてなかの腸も見えるように大きな怪我を負わせた。

二、牛皮で作った鞭の先に鉄線を付けて人を殴る。打たれる度に皮膚が破れ、血が噴き出すが、少しも治療をさせない。そのように打たれた人は結局放置されて亡くなった。打たれて壁中に散った血の匂いは長く消えなかった。また、怪我した人間の傷口に塩を撒いたり、熱湯をかけたりして、殺害した事例もある。

三、太い鉄線で人間の頭部を巻いて、ペンチで徐々にきつくしていき、頭部を破裂させた事例もある。

四、「反革命的な犯人」とされるモンゴル人を燃えるストーブのすぐ傍に押さえて、長時間にわたって焼いた。真赤に焼いた鉄のショベルを人間の頭の上において焼き殺した実例がある。

五、両手を後ろ手に縛ってから梁の上から吊るして脱臼させた。また、吊るし上げた紐をナイフで切って、地面に叩き落されて死亡させた例がある。

六、モンゴル人女性を丸裸にして立たせ、牛の毛で作った太い縄を跨がせてから両側から繰り返し引っ張りあった。その結果、女性の陰部はひどく破壊された。

七、人民解放軍の兵士たちはモンゴル人の男を殺害して、その妻を繰り返しレイプした。モンゴル人少女を強姦した事例もある。

八、モンゴル人の財産を略奪した。ある漢人兵士はモンゴル人の貴重な腕時計を奪った。モンゴル人が盟政府所在地の東勝まで追いかけてゆき、返すように求めたが、まったく無視された。

もちろん、この連隊に良心的な兵士もいた。そのうちの二人はモンゴル人たちが迫害されているのに疑問を示したことで、ただちに除隊の処分を受けた。

以上は中国共産党政府がその発行を一時的に認めていた資料に掲載された報告である。この他の事例を見てみよう。

### (2) 残虐行為

イケ・ジョー盟エジン・ホロー旗のソブルハン公社の書記パータイは舌を切られた。東勝県の副武装部長の陳福廷

は四七種の刑罰を受け、一六回も刀で刺された。

既に触れたウーシン旗トゥク公社の事例だが、トゥク公社トゥグルダイ生産大隊の漢人陳文奎、馬藍芳夫妻はモンゴル人たちを自宅へ連れてきて連日昼夜にわたって拷問にかけた。この漢人夫婦は五〇種以上ものリンチ法を考え出していた。漢人夫婦が直接殺したモンゴル人は三人で、その外にも三〇数名に重傷を負わせている。

漢人たちはまたウーシン旗トゥク公社トゥグルダイ生産大隊の大隊長のバトセレン夫婦に暴力を加え、夫人のお腹の中にいる胎児も「内モンゴル人民革命党員だ」と認めるよう強制した。

トゥク公社メイリン・スメ大隊の書記ダンセンは、口の中に馬のハミを付けられた上、漢人たちに乗られた。そして、最後にダンセンは刀で殺された。

シディというモンゴル人の家族は、八三歳の祖父と生まれてまだ四三日間しか経っていない赤ん坊まで、一家六人全員が「内モンゴル人民革命党員」だとされた。シディの夫人も長期間にわたってリンチされた。そして、赤ん坊も死んでしまった。

トゥク公社の副書記セムチュク一家は、九歳になる女の子だけが生き残り、他の家族四人がすべて殺害された。漢人大衆と人民解放軍の兵士たちは「モンゴル人が死んでいけば、食料も節約できる。内モンゴル人民革命党員が死んでいけば、我々漢人の心配もなくなる」、と話合っていた。

### (3) 性的な虐待

イケ・ジョー盟の女性幹部の白秀珍（モンゴル人）は繰り返しレイプされた挙句に、鉄棒を陰部に入れられ、体内がひどく破壊された。そして、彼女の遺体は井戸のなかに捨てられて、「自殺」とされた。

モンゴル人のトゥメンジャラガルはさまざまな暴力を受けた後、その嫁の股をくぐるよう命じられた。

ウーシン旗トゥク公社の副書記で、若い女性のチョロモンは丸裸にされてから、連続五昼夜にわたってリンチされつづけた。同じくウーシン旗トゥク公社の幹部ドンルプは一二種の暴力を受けて吐血した。それでも、ドンルプにロバやブタなどの性行為を強制した。そして、ロバやブタの真似をさせ、「モンゴル人たちは畜生だ」と罵倒していた。

## 3、ウラーンチャブ(Ulaanchab)盟の実例

ウラーンチャブ盟には1970年代初期に約5万7,000人のモンゴル人と270万人の漢人大衆が住んでいた。

ウラーンチャブ盟の犠牲者は死者が1,686人で、負傷者は8,628人で、身体に障害が残った者は4,650人に達する。そのうち、チャハル右翼後旗では200人のモンゴル人が殺害された。この旗のウラーンハダ公社サイハンタラ生産大隊では、「解放軍毛澤東思想宣伝隊」や漢人の「貧下中農毛澤東思想宣伝隊」の指揮下で、一八日間で一八人が殺

され、三三人が重傷を負った。平均して、毎日一人のモンゴル人が殺害されていた。このような残虐な殺戮を働いた「解放軍毛澤東思想宣伝隊」や「貧下中農毛澤東思想宣伝隊」のメンバーたちは例外なく内モンゴルの外からやってきた漢人たちである。また、漢族の知識青年や目的もなく放浪していた漢人たち（盲流）も積極的に加わっていた。

### (1) 残虐行為

ウラーンチャブ盟盟政府計画委員会のビリクトは、漢人たちにペンチで歯をむりやりに抜かれた上、鼻と舌も切除された。ビリクトは結局敗血症で亡くなった。

チャハル右翼前旗煤公社バヤン生産大隊には合計37戸、146人のモンゴル人が住んでいた。そのうちの88人が「内モンゴル人民革命党員」とされ、17人が殺害された。同旗のサイハンウス公社の34戸155人の住民のうち、二十歳以上のモンゴル人は全員が「民族分裂主義者」とされ、10人が殺害された。

四子王旗チョクト公社の治安保衛主任のモンゴル人を殺害した後、漢人たちは彼の遺体を隠して、「モンゴル人民共和国へ逃亡した」と発表し、その家族をも捕まえてきてリンチを加えた。しばらく経ってから、殺害されたモンゴル人の遺体が雪のなかから見つかったが、野犬に食われていた。

同じ四子王旗の郵便局に勤めていたモンゴル人のボルジョは「民族分裂主義者集団の内モンゴル人民革命党員」とされて逮捕された。家屋の梁から吊るされた彼の体には更に三五キロもある石がぶら下げられた。そして、体に強い電流が通されて精神的に異常となった。一九七〇年二月、彼に繰り返し暴力を振るっていた漢人の劉玉柏、尤学忠がフフホトの病院に連れて行くと称して連れ出したが、行方不明となったとして帰ってきた。

ボルジョの母親が息子を一目見ようとして遙々内モンゴル東部のクレー旗からやってきたところ、またもや漢人たちに批判闘争大会に連れて行かれ、暴力を振るわれた。

四子王旗では、親が逮捕されたために、残された幼い子どもがストーブの火を起こそうとして火事となって焼死してしまった例がある。また、若者が逮捕されたために、体の不自由な老人が凍死した実例もある。

### (2) 性的な虐待

ウラーンチャブ盟共産党学校の教育長ルーイは、生殖器に紐を付けられて、無理やりに引っ張られて、完全にちぎられた。

集寧市熔接棒工場の書記で、女性の韓淑英は裸にされてから陰部の毛をペンチでむしりとられた。

四子王旗バヤンオボー公社では、公社書記のノルブジャムソが郵便局に勤める漢人の潘秀玉によって刀で背中を大きく切られた。そして、傷口には大量の塩を入れられ、更に体中を鉄のアイロンで痛めつけられた。ノルブジャムソ

が殺害された後、その夫人のドルジソーは漢人たちに何回もレイプされた。そして、熱く焼いた鉄棒を陰部に入れられて、殺害された。二人の間に生まれた五ヶ月未満の赤ん坊も面倒を見る人がいなく、凍死した。

同じ四子王旗バヤンオボー公社では、公社の秘書をやっていた若いモンゴル人夫婦は刀で体中を傷つけられてから、傷口に塩を撒かれた。夫の死後には夫人が漢人たちにレイプされ、陰部が火で焼かれた。夫人の死後、残された赤ん坊はまだ母親の死を知らずに、その乳房を吸っていた。

卓資県では 13,000 人もの人々が「内モンゴル人民革命党员」とされ、95 人が殺害された。残忍な虐待方法は 170 種以上にのぼり、多くのモンゴル人女性たちがレイプされた。馬連壩大隊の書記の夫人は 40 人に繰り返し強姦された。劉光審大隊でも若いモンゴル人女性がレイプされた。

涼城県人民代表大会の主任ナムスライが漢人たちに殺害されてから、その夫人も井戸に身投げして自殺した。残された 16 歳の娘はドータグラという。一九六九年五月以降に、彼女もモンゴル人たちが作った「寡婦陳情団」に加わってフフホト市へ上告に来ていた。しかし、漢人たちは「寡婦団のなかに娘がいる」、と言って彼女の人権を侵害していた。

### (3) 強制移住

強制移住はだいたい夜に人民解放軍の兵士たちが突然やってきて命令を出して、モンゴル人全員をトラックに乗せて人民公社の本部に無理やり連れて行かれる、という方法を取っていた。そして、人民公社の本部で初めて強制移住が伝えられて、すぐに実施に移されていた。簡単な生活用品以外は何も持っていけなかった。家畜や家屋、そして家財道具類などはすべて放棄せざるを得なかった。ウラーンチャブ盟だけでも、モンゴル人たちの財産の損失額は 42 万元に達する。チャハル右翼後旗でもモンゴル人民共和国に近いところに住んでいたモンゴル人 75 戸が内地へ強制移住させられた。その代わりに農耕地帯の漢人たちが彼らの草原に入って住み着いた。

四子王旗のバヤンオボー公社ダライ生産大隊には合計 23 戸のモンゴル人がいた。そのうちの 21 戸が 1969 年 9 月に強制移住させられた。彼らが去った後には、57 戸の漢人たちが入植した。

## 4、バヤンノール盟の事例

バヤンノール盟では文革後期の 1970 年代初期に約 3 万 9,000 人のモンゴル人と 118 万人の漢人がいた。同盟では 8,415 人が「内モンゴル人民革命党员」とされ、363 人が殺害された。重傷者は 3,608 人である。モンゴル人から生まれたばかりの赤ん坊も「反革命的な内モンゴル人民革命党员」とされた。

## (1) 残虐行為

国境に近いウラト中後連合旗でサンゲンダライ公社のモンゴル人ダムバ夫婦が殺害された後、四人の子どもが残された。そのうちの一人が溺死し、一人が凍死し、もう一人も精神的に異常をきたして亡くなった。最後に残ったただ一人の子どもは親戚の者が面倒を見ることになった。同旗バイン公社イケ・ボラク生産大隊では、六〇戸の人が住んでいたが、そのうちの漢人一五戸を除いて、すべて「信用できないモンゴル人」とされ、厳しい軍事管理下におかれていた。

同じ旗の呉清雲は舌を切られた。呉は東北の遼寧省出身のモンゴル人だった。

盟政府統一戦線部の部長ソドブは生きてまま頭部に釘を打ち込まれた。脳神経に達していたため、手術も出来ずに葉で延命していた。

## (2) 性的虐待

チョク（潮格）旗のあるモンゴル人はリンチされている間にその夫人と娘が漢人たちにレイプされた。そのモンゴル人もやがて死亡した。同じ旗のウリジ公社のデレゲルバトは一〇数ヶ月間にわたって幽閉され、繰り返しリンチされた。その間に家の財産は略奪され、夫人と娘は漢人の章愛良に繰り返しレイプされた。夫人はまもなく亡くなった。

## 5、ジェリム盟の事例

ジェリム盟では計 4 万 8,500 人が「内モンゴル人民革命党员」とされ、3,900 人が殺害された。1 万 4,000 人が重傷を負わされた。

ジェリム盟に駐屯する人民解放軍の趙玉温 (Zhao Yuwen) 司令官は次のように共産党大会で演説していた。

「ジェリム盟の敵は多い。モンゴル人だけで七〇万人もいる。ジェリム盟は社会情勢が複雑だ。ウラーンフの勢力が強い。ジェリム盟はスパイ、裏切り者たちのベースキャンプだ」。

趙玉温司令官はまた漢人地域から大量の漢人農民を集めて、「チンギス・ハーンは馬鹿で、岳飛こそ本当の英雄だ。宋代の岳飛のように韃子（ダース）たちをやっつけよう」と話した。「韃子」とは漢人たちが使うモンゴル人に対する蔑称である。

趙玉温司令官はジェリム盟に「烏・石・雲反党叛国集団」がいるとして、多くの人々を拷問にかけた。いわゆる「烏・石・雲反党叛国集団」の「烏」は烏蘭夫すなわちウラーンフのことで、「石」は石光華で、「雲」は雲曙碧の略である。雲曙碧はウラーンフの娘で、石光華はその夫である。趙司令官は言った。「ジェリム盟はもっとも反動的なところで、ここは偉大な祖国と共産党に反対するモンゴル人たちの前哨基地だ」。

趙司令官たちはジェリム盟の 14 人からなる政府委員会

のうちの11人を逮捕し、そのうちの2人が殺害された。石光華と雲曙碧夫婦、それから書記のサインバルらを長期にわたって監禁し、あらゆる方法で虐待しつづけた。

### (1) 残虐行為

人民解放軍の趙玉温司令官の動員もあって、モンゴル人社会に甚大な被害がもたらされた。ジェリム盟軍事管理委員会の漢人李国珍と杜誠らは鞭を持って「学習班」に強制収容されたモンゴル人たちに暴力を振るった。そして、「革命は飯を食ったりして宴会を開いたりするものではない。敵を打倒するものだ」と暴言を吐いていた。盟政府の裁判所や検察、公安に勤めていたモンゴル人八一人のうち、五七名が「祖国と人民に対して罪を犯した内モンゴル人民革命党员」とされた。

「内モンゴル人民革命党员」とされたモンゴル人たちは、「ストーブで焼く」、「体に電気を通す」、「生きたままの人間の生皮を剥ぐ」、「顔に字を焼き付ける」、「頭部に釘を打ち込む」、「冬に裸にしてから外で凍らせる」などの虐待を受けていた。

ホルチン左翼中旗では、科長級以上のモンゴル人幹部201人のうちの190人が「内モンゴル人民革命党员」とされた。旗の運輸センターのモンゴル人26名のうち、23人が「内モンゴル人民革命党员」とされた。モンタ公社の韓珍というモンゴル人がたくさん木を植えたことから、「ウラーフが祖国に対して反乱を起こした時に使う駒つなぎを用意した」との罪が冠された。彼が自宅に保存していた食糧も「ウラーフの反乱軍に準備した軍用の食料だ」と断罪された。

既に文化大革命以前に死去していた者まで、「内モンゴル人民革命党员」とされた。たとえば、ホルチン左翼中旗では、以前に亡くなったモンゴル人ポーショーシングの墓が漢人たちに破壊され、その遺体が引き出されて侮辱された。

ホルチン左翼中旗の巨流河牧場では趙玉温司令官が自ら指揮を取り、1,700名いた職員のなかから170名を「内モンゴル人民革命党员」と断罪し、そのうちの31人が殺害された。

『ジェリム報』という新聞社では三人のモンゴル人が殺された。

ジェリム軍区にいたモンゴル人将校たちも粛清された。政治委員のアグダム、副司令官のフフハダ、参謀長のバダラングイなど29人が殺害された。

### (2) 性的な虐待

人民解放軍の趙玉温司令らは以下のように女性たちを虐待した。彼らが強姦したモンゴル人女性たちのなかには、一〇代の少女も含まれていた。レイプ後に殺害された女性の遺体に赤ん坊が抱きついて、離れようとしなかったこと

が目撃されている。「集団レイプ」、「陰部を鉄で焼く」、「陰部を空気入れて膨らませる」などの暴行が施行された。

### (3) 母語の使用禁止

人民解放軍の趙玉温司令官はモンゴル人たちに対し、「お前はロバの言葉を話してはならない」と指示していた。ロバとは漢人たちが使う悪罵である。

趙玉温司令はある日また、「ジェリム盟では五万人のモンゴル人たちをえぐり出したが、まだ足りない」と指示した。彼の命令で、ジェリム盟における虐殺は数年間続いた。

## 6. フルンボイル盟

同盟では47,500人が迫害を受け、14,329人が拘禁され、2,307人が虐殺された。

### (1) 残虐行為

フルンボイル盟の商店のなかには、次のような看板があった。

「こら！お前は内人党だ。さっさと登録しなさい。内人党员のお前よ、登録せ！登録せ！！登録せ!!!」。

また、バスの入り口にも「内人党员は即刻登録せよ」と書いてあった。マンチュური（満洲里）の理髪店内では、鏡に「お前は内人党员だろう！」と書いてあった。このように、あらゆる方法でモンゴル人たちに心理的・精神的なダメージを与えていた。

モリンドワー旗の漢人指導者は、「二週間頑張って、ダウール人たちを全滅させよう」と指示していた。ダウールはモンゴル族と特別な関係にある民族だ。旗の政府委員会を構成していた22名の委員のうち、12名のダウール人が全員、「祖国を分裂させようとした統一党」の党员とされた。また、旗内17の公社に190名のダウール族幹部がいたが、85名が「統一党」のメンバーとされた。もちろん、「統一党」も完全にデッチ上げられたものである。漢人たちは、「お前ら韃子はモンゴル修正主義者の国に投降し、牛乳を飲んで我々漢人を殺そうとしているだろう」と言いふらしていた。

盟のなかのエルグナ河流域には3,000人ほどのロシア族が住んでいた。彼らと漢族やほかの民族との通婚も進んでいた。しかし、彼らのうちの90%以上が「祖国を裏切る反革命集団」にカウントされた。「鼻が大きい」、「混血児」などと言って虐めただけでなく、かれらの母語ロシア語が禁止され、民族衣装の着用も禁じられた。

大興安嶺の山中に人口約1,015名の小さな民族、オロチョン族が住んでいた。彼らもモンゴルと特別な関係にあったため、全人口の二割に近い192名が「内モンゴル人民革命党员」とされた。漢人たちは彼らを車に縛りつけて殴りながら、「お前らは畜生だ、これはお前らの最期だ」と言って侮辱していた。また、「一人の韃子を殺せば好漢で、

一〇人殺したら英雄だ」と言ってお互いを励まし合っていた。

ハイラル市の近郊にあるエベンキ族自治旗はエベンキ族の集中居住地である。エベンキ人たちは歴史的にモンゴル人と親しく、みんなモンゴル語を話す。この旗では100%のエベンキ人の幹部たちがありもしない「統一党」員とされた。書記のトゥメンバヤル、旗長のウニンマンダラーをはじめ、20人の幹部たちが殺害された。

## (2) 母語の使用禁止

フルンボイル盟モリンダワー旗に駐屯する解放軍の兵士は、「ロバの言葉、畜生の言葉を話してはならない」と言って、モンゴル人やダウール人たちが母国語で話すことを禁止していた。

## 7、ヒンガン盟

ホルチン右翼前旗では10,000人以上の人々が迫害され、500人以上が殺害された。その際、「ストーブで焼き殺す」、「電気でショック死させる」、「熱湯を全身にかける」、「肛門に空気を入れる」などの暴力手段が実施された。

また、モンゴル人女性を集団でレイプし、乳房を焼くなどの性的な虐待も横行した。「反革命分子」や「民族分裂者」とされた者の身体には「内モンゴル人民革命党」の略称である「内人党」という三文字が線香で焼かれた。次のような悲惨な出来事もあった。

旗内のホリン（好仁）公社のある小学校教師が「人民解放軍毛澤東思想宣伝隊」に殺害された。その教師の父親が激怒して息子の頭と血のついた衣類を持参して人民解放軍の幹部たちに見せたところ、無視された。漢人兵士たちから見れば、モンゴル人を虐殺することは、「人民の敵を一掃する作戦」に過ぎなかった。そこには同情も憐憫も何もなかった。

モンゴル人たちを殺害するだけでは終わらなかった。殺害されたモンゴル人たちの墓の上には、「ウラーンフの頑迷な追随者」という白い幡が立てられた。これは、漢人社会特有の、亡くなった人を侮蔑する方法である。

好仁 (Hao Ren)、烏蘭毛都 (Ulaan-mod) 人民公社では48人が殺害された。光明 (Guang Ming) 生産大隊の30世代の人口から70人のモンゴル人が「内人党」員とされ弾圧された。

ホルチン右翼中旗には66の共産党の支部があったが、そのうちの44の支部が「内モンゴル人民革命党支部」とされた。同旗では1,647人が弾圧され、その内1,331人が共産党員だった。

ジャライド旗の「労働模範」とされた62才のMergenseの家族11人うち9人が「内モンゴル人民革命党員」とされ、二ヶ月間にわたって、蹂躪された。もっともひどかったのは、連続五昼夜も拷問し、一〇種以上のリンチ方法が使わ

れた。Mergense 本人が暴行を受けて身体に障害残った。

## 8、ジョーウダ盟の状況

ジョーウダ盟では、ほとんどすべてのモンゴル人たちが「内モンゴル人民革命党員」とされていた。1969年春に中国共産党第九回全国大会が開かれた時に、この盟からモンゴル人代表を選ぼうとしたところ、「反革命分子」や「分裂主義者」以外のモンゴル人がいなかった事実は、当時の悲惨な状況を物語っている。

### (1) 残虐行為

バーリン右旗バヤンハーン公社には約3,000人のモンゴル人が居住していた。そのうち、364名が「内モンゴル人民革命党員」とされた。漢人たちは「内モンゴル人民革命党員はモンゴル人だけからなっている。彼らは我々漢人の首を切ろうとしている」、と言いふらし、デマを広げて虐殺を断行していた。

同じくバーリン右旗エヘ・ノール公社の書記ラブジャイは、頭部に釘を四本も打たれて、その上で一二日間も批判闘争された。

### (2) 性的な犯罪

バーリン右旗バヤンウーラ公社の獣医センターのホチトは生きてままだに埋められた。そして、彼の18歳になる娘は漢人たちに輪姦された。バヤンハーン公社の女性スチングワは妊娠六ヶ月だったが、批判闘争されて双子を流産してしまった。また、モンゴル人女性たちに「私は牝ロバです」と自称するよう命じた。内モンゴル人民革命党員として逮捕した女性たちを全員裸にしてリンチしていた。

### (3) 母語の使用禁止

バーリン右旗バヤンハーン公社の漢人たちは、「モンゴル語を話す者は頑固な民族分裂主義者だ」とか、「モンゴル語ではなく、中国語を話しなさい」と言って、モンゴル人が母語で話す権利を奪っていた。

## 9、アラシャ地域の事例

内モンゴル自治区最西端のアラシャ地域のモンゴル人たちは当時、一部が甘肅省に、もう一部は寧夏回族自治区に編入されていた。中国政府はモンゴル人の住むところをばらばらに分割して、その勢力を弱めようとしていた政策の結果である。

アラシャ地域にはモンゴルの古い部族の一つであるトルグート・モンゴル部が住んでいた。そのため、文化大革命中はモンゴル人たちが「トルグート党」を作って、「祖国を分裂させようとしている」と断罪された。いわゆる「トルグート党も内モンゴル人民革命党の一変種」とされた。トルグート・モンゴル人は全部で約2,000人の人口だったが、約200人が殺戮の対象になった。

### (1) 残虐行為

アラシャ地域のエジナ旗は、内モンゴルの一番西に位置する。エジナ旗の旗長エレデニゲレル、旗政府弁公室の主任蔵徳明、人民裁判所の所長サインボイン、婦女連合会の会長セレンオドなどが「トルグート党のボス」とされ、逮捕された。そのうちの旗長エレデニゲレルは七年間も刑務所に閉じ込められ、一時は死刑にされる予定だった。

## (2) 強制移住

一九七三年、甘肅省政府はエジナ旗のモンゴル人たちを内地へ強制移住させた。このなかには旗長のエルデニゲレルの一家も含まれている。

## 10、フフホト市と包頭市の事例

### (1) 残虐行為

内モンゴル軍区の騎兵第五師団には約 200 名のモンゴル人将校がいたが、1971 年になると、ほとんど全員が粛清されていた。

内モンゴル自治区公安庁の庁長ビルクバートルが粛清され、副庁長の雲世英 (Yun Shiying) なども失脚させられた。自治区公安庁の政治部のテンへは、一九六八年二月に逮捕され、長期間にわたって拷問にかけられた。彼から他のモンゴル人の情報を引き出そうとしていた。テンへは漢人たちのその要求を断ったため、結局、1970 年 5 月 21 日に殺害された。

ハーフンガは、モンゴル族の真の自立を目指す政党、内モンゴル人民革命党の創始者の一人である。中華人民共和国成立後は内モンゴル自治区政府の副主席になっていた。彼は「内モンゴル人民革命党のボス」として、長期間にわたってリンチされ、1970 年 11 月 29 日に亡くなった。同じく、内モンゴル人民革命党の指導者のテムールバガナも 1969 年 1 月に暴力が原因で亡くなった。生前は自治区政府の最高裁判所の所長になっていた。

自治区民政庁の庁長ウリトも、1940 年代からモンゴル族の自立のために努力してきた人物だった。彼は 1968 年 12 月 12 日に逮捕され、12 月 19 日に殺害された。

自治区政府の副秘書長のガルブセングは 1968 年 12 月 18 日に蔵海賢 (Zang Haixian)、呉春舫 (Wu Chunfang) らによって拉致され、長期間にわたってリンチされた後、1969 年 1 月 5 日に殺害された。それでも、文化大革命終了後、呉春舫はウーハイ (烏海) 市の組織部長に抜擢された。モンゴル人たちはそれを不服として国家主席の華国鋒に報告したところ、まったく無視された。

フフホト市に隣接するトゥメド左旗において「内モンゴル人民革命党」関係者 11,433 人が被害を受け、331 人が殺害され、1,852 人に身体障害が残った。

トゥメド右旗では 5,329 人が被害を受け、241 人が死亡し、655 人に障害が残った。

フフホト市鉄道局 (鉄路局) には 446 人のモンゴル人

職員がいたが、そのうちの 444 人が「内モンゴル人民革命党員」とされ、13 人が殺され、347 人が重傷を負った。5 人の女性がリンチされて流産し、また、4 人の子どもが殺害された。

フフホト市鉄道局サイハンタラ区間 (機務段) に勤務するソドは夫人ともに逮捕された。漢人たちはその夫人の体内にいた四ヶ月になる胎児を細い鉄線でえぐり出し、「どうせ、内モンゴル人民革命党員が生まれてくるので、早いうちに始末しておこう」と言っていた。

フフホト市に本部を置く「内モンゴル地質調査隊」の李国道は「モンゴル人を一網打尽にしよう」、とのスローガンを打ち出して、暴力を推し進めた。調査隊にいた僅か八人のモンゴル人がすべて粛清された。そのうちの一人、宝貴賢というモンゴル人はチンギス・ハーンの直系子孫であった。漢人たちは彼をリンチしながら、「お前らチンギス・ハーンの子孫たちよ、ウラーンフの走狗たちよ、全員、あの世のチンギス・ハーンに遇わせてやる」との暴言を吐いた。また、辺福成というモンゴル人は、肋骨を七本も折られ、胸椎も骨折した。最後には睾丸も壊された。それでも、漢人たちは、「お前ら内モンゴル人民革命党員は銃殺にすべきだ。これはプロレタリアートによる独裁だ」と言いながら暴力を繰り返していた。

包頭市のダルハンムーミンガン旗シャルムレン・ジョー公社には約 1,800 人のモンゴル人が生活していた。そのうち 49 人が殺害され、50 人以上が重傷を負わされた。同じダルハンムーミンガン旗のマンドラー公社はモンゴル人民共和国との国境地帯にあった。マンドラー公社では 15 人が殺された。そのうちの 6 人は首吊り自殺に追い込まれたのである。死者のうちの 4 人はチベット佛教の僧侶である。殺された 15 人の名はダントル、ニマ、ハラジム、ナソングジャラガル、ソブジェ (女)、オンドル、バラカ、バダマ、ソヨルト、ナルブ、アグーン、ゲンデン、ショリクジャムソ、チャンフン、バブーである。

15 人のうちのソヨルトはたったの三歳だった。母親のナブチマーが漢人たちにレイプされそうになって逃げたが、残された男の子ソヨルトは凍傷を負い、餓死した。この公社では更に 63 戸のモンゴル人が内地への強制移住を命じられ、代わりに漢人農民が入植した。国境地帯のモンゴル人が「修正主義国家のモンゴル人民共和国」やソ連に逃亡するのを防ごうとした政策だ。また、いざ「修正主義国家」の軍隊が攻めてきたら、モンゴル人よりも漢人たちを住まわせた方が防衛上も有利だ、との政策からの措置だった。マンドラー公社の粛清運動は漢人の郭書記の指導で推進された。文化大革命が終わった後、郭書記は共産党に守られて、武川県の水利局局長に栄転した。

ダルハンムーミンガン旗バヤンオポー公社の第四生産大隊では、両親が逮捕されたために、残された七歳のモンゴ



ル人の子どもが凍死してしまった実例がある。

## (2) 性的犯罪

フフホト市近郊のトクト県中灘公社ハラバイシン生産大隊の漢人王三小は1968年9月7日に「内モンゴル人民革命党員をえぐり出して肅清する委員会」の責任者となった。彼は一二歳になるモンゴル人（ダルハンムーミンガン旗所属）少女のロールマをレイプした。まもなく、別の15歳になる少女オユントンガラクをレイプした。

文化大革命中に、シャルムレン・ジョー公社1,800人のモンゴル人のうち、49人が殺害され、50人以上の人々に重度の障害が残った。この公社に来ていた漢人女性知識青年は、生理の血を洗って、モンゴル人に飲ませた。

ダルハンムーミンガン旗のバヤンオボー公社第三生産小隊の女性リンチンドルジは、漢人たちにつるはしで陰部を破壊されて死んだ。同じ公社の漢人楊秋遠らは、モンゴル人たちを拘留して、真裸にする。男性たちの生殖器に紐をつけて女性たちに引っ張らせながら、「北京にある金色の太陽」という歌をうたわされた。文化大革命が終了したと宣言された後に、楊秋遠は人民解放軍の軍人たちに守られて法の処罰から逃れた。

ダルハンムーミンガン旗バヤンホワー公社バヤンチャガン大隊の漢人藍米栓は、モンゴル人を殺してその妻を奪い、妊娠させた。夫を失った女性も精神的に錯乱した。

集寧市に住む女性韓淑英は陰毛を漢人たちにベンチでむしり取られた。

包頭市固陽県磴口生産大隊では、1,860名のモンゴル人が「内モンゴル人民革命党員」とされ、83名が殺害された。漢人たちは男性たちと女性たちと一緒に拘留してから、男性の顔には女性の性器の絵を描き、女性の顔には男性器を書いた。これを「男女内党員の結合」と呼んで侮辱した。また、女性の生理の血がついた下着をモンゴル人男性の頭にかぶせたりした。

## (3) 母語の使用禁止

フフホト市鉄道局集寧区間の漢人たちは口々に、「モンゴル人を機関車の操縦士に任命してはならない。列車を修正主義国家のモンゴル人民共和国へ持っていったら、どうする」と言って、就職の面で差別していた。

フフホト市鉄道局では、モンゴル人職員同士がモンゴル語で話し合ったりすると、「あの汚い言葉を使うな」と罵倒された。また、幹部の抜擢や職員の採用などの面でも、わざと中国語のレベルを難しくして、モンゴル人を取ろうとしなかった。

内モンゴル自治区教育庁に27名のモンゴル人、ダウール人の幹部がいた。彼らのうち、僅か一人を残して、全員が逮捕され、拷問にかけられた。そして、「訳の分からない言葉を話してはならない」と、虐待された。

## (4) 強制移住

ダルハンムーミンガン旗では、1970年に軍事管理が導入された。国境に近いところに住むモンゴル人360戸に対して強制移住の命令が下された。一晩で144戸のモンゴル人を内地へ移住させた。捨てられた牛やヒツジなどは誰も放牧せずに放置された。後日、約400名の知識青年が入って放牧にあたった。また、武川県からの漢人たちを入れる予定があったが、実現しなかった。モンゴル人たちのなかには漢人と結婚した人もいたが、それでもモンゴル人は内地へ移住させられ、漢人のみが現地に残された。

ダルハンムーミンガン旗マンドラー公社では、63戸218人が強制移住を命じられ、代わりに他所からの漢人農民たちが彼らの故郷に定住した。その際、ナブチマーという女性はレイプされそうになって逃げたが、残された3才の子どもソヨルトは餓死した。

## 内モンゴル人民革命党：

内モンゴル人民革命党は1925年10月に張家口において、モンゴル人民共和国とコミンテルンの支持のもとで成立した、モンゴル民族の自決と独立を実現させようとした政党である。党の創設に積極的に関わり、指導的な立場にあったのは内モンゴル東部出身のバヤンタイ（別名セレンドロブ、白雲梯）とメルセイ（郭道フ）たちであった。ほかに内モンゴルの各地からの反漢人入植の大衆運動（Duguileng）のリーダーたちや、北平（現在の北京）にあったモンゴル・チベット専門学校の生徒だった雲澤こと後のオランフーも成立大会に参加していた。同党は成立後にコミンテルンの政策に沿って優秀なモンゴル人青年らを積極的にソ連やモンゴル人民共和国に派遣すると同時に独自の武装勢力の結成を進めた。

日本が満州国こと東北地域を占領した後、内モンゴル東部に分布していた内モンゴル人民革命党の多くはコミンテルンの指示に従って地下に潜り、満州国の役人などに変身していた。1945年8月に日本の敗退と共に同党は復活を宣伝し、民族全体の意思を代表してモンゴル人民共和国との統一と合併を目指し壮大な署名運動などを展開した。しかし、「ヤルタ協定」で「内モンゴルは現状維持」、つまり中華民国領内にとどまる運命となった以降は、内モンゴル人民革命党は漢人の中国共産党との交流を模索した。モンゴル人の自決運動が次第に中国共産党によって骨抜きにされ、「中国革命の一部」だと改変されていく過程で、1947年5月に内モンゴル自治政府の成立に伴い、解散の道を歩まざるを得なかった。{(フスレ) 2002: 57-75; 2003: 34-55; A twood 2002; 吉田 2001: 93-126; 2002: 31-54; 阿拉藤徳力海 1999: 256-263; アルタンデレヘイ 2008: 4-9} 解散からおおよそ20年の歳月が過ぎた1967年から、中国政府は再び文化大革命を利用して、内モンゴル人民革命党

が過去に推進した「民族分裂的な活動」と「対日協力」の歴史に対する再計算を断行した。同党のメンバーとされたモンゴル人たちは長期間にわたって過酷な暴力を受け、肅清を経験した。

#### 漢人代表者：

内モンゴル人民革命党員をえぐり出して肅清する主力は中国政府が派遣した工人毛沢東思想宣伝隊（略して工宣隊）や人民解放軍毛沢東思想宣伝隊（略して軍宣隊）だった、と郝維民は指摘している。漢族の工宣隊と軍宣隊の隊員たちは「素朴な階級感情を抱いていた」から、暴力を思う存分に発揮したことで、自治区は「テロルの雰囲気」に覆われていた、と書いている {郝維民 1991：311}。

### 3、政権の代弁者らが自ら指示したジェノサイド行為は以下の通りである。

各盟（地域）においての行為：フフホト市、トゥメット旗、ジリム盟、イケゾー盟、ゾォーオダ盟、シリンドル盟

時期：1968年12月から翌年の4月までの期間が内モンゴル人民革命党肅清のピーク時だ、と郝維民は述べている。内モンゴル人民革命党肅清運動はまたその前から推薦されていた。

偽りの案件をつくらせてジェノサイドした例：郝維民は、「二〇六事件」の真相を論じた、即ち中国政府は1963年2月6日に「発見」し、その発見日にちなんで命名した「二〇六事件」を利用していたという。検閲で「見つかった」自治区南部の集寧市からモンゴル人民共和国宛に出された手紙には1961年11月26日に22名の代表からなる「内モンゴル人民革命党第一回党代会」が開かれ、続いて1962年2月3日には更に43名の代表たちが第二回党代会を開いたという。「地下に潜伏した」内モンゴル人民革命党の党員は2,346名に達しているという。少し遡るが、「二〇六事件」は発見後に中国の公安当局が全力で解決しようと努力したにも関わらず、手紙を書いた人物を見つけ出すこと

は出来なかった。結局、公安機関も当初は「個別の人間による悪質な離間の計に過ぎない」との認識で一致していたという。しかし、この「離間の計」は1968年7月20日に内モンゴル自治区委員会が「内モンゴル人民革命党に関する処理意見」という政府処分案を出した後に、再び肅清と虐殺の口実として利用された {郝維民：1991：310—311}。「二〇六事件」に巻き込まれたモンゴル人たちや、政府役人の立場で同事件を調べた人たちなどは、事件は政府による自作自演だと認識している {楊 2009 b：110—112}。

### 4、ジェノサイド以後に、歴史的責任から逃げるため、その罪悪をモンゴルに覆わせた。その根拠は以下の通りである。

中国共産党は、文化大革命が終息してまもなく、国内において全面的な整頓を行った。1981年6月中共「十一届六中全会」で採択された『建国以後、党においての若干の歴史問題に関する決議（關於建国以来党的若干历史問題的決議）』において、文革は「指導者が誤って発動し、反革命集団に利用された」<sup>4</sup>運動であると発表した。文化大革命運動が中国国内において大きな被害をもたらしたのは、「林彪<sup>5</sup>、江青<sup>6</sup>の反革命集団である」と決着をつけた。中央宣伝部は、「出版管理規定を重ねて言明し、厳格に執行する通知」<sup>7</sup>（关于重申严格执行有关出版规定的通知）を2004年に発表し、「いまだに論争のある問題についての公開出版や発表には慎重な態度を取り、社会的な反響を真剣に考慮する」としている。また、「民族団結に害を及ぼす内容のあるものを出してはならぬ」と定めている。これは、文化大革命運動は、一方的に「民族団結」に害を及ぼしたことを認めているにも拘らず、それについて書いてはいけない、ということであろう。したがって、中国国内における文化大革命の研究もその政策に合わせなければならないということを示していることである。文革の本質に迫ろうとするならばいうまでもなく、中国共産党の政治体制に触れ

4 原文は、「文化大革命」は指導者が誤って発動し、反革命集団に利用され、党・国家と各民族人民に深刻な災難をもたらした内乱である、と書いている。

5 文革時期に、失脚した劉少奇に代わって、毛沢東の後継者に指名されたが、毛沢東の暗殺未遂事件およびクーデター未遂事件を起こした。後に、亡命中飛行機墜落によって死亡。「9.13事件」ともいう。

6 毛沢東夫人。文革中、中央文革小組の副組長として権力を振るった。

7 この通知に、文化大革命研究で言及すべき範囲を規定した1986年の「文化大革命史に関する専門書と論文を慎重に扱うよう、中央宣伝部の通知」と1988年の「中央宣伝部、新聞出版署の“文化大革命”図書出版問題に関する若干規定」の二つの公文書の内容も含まれている。

ることになるため、文化大革命に関する研究はタブーが多いのである。特に、内モンゴル自治区<sup>8</sup>などの少数民族地域において、文革には「民族問題」が絡んでいるため、それに関する研究や書籍の出版は危険さえ伴うことが現実である。

中国政府の許容範囲内に、中国の大都市部で行われた文革に関する研究書はいくつか出版が許されている。また、最近、文革に関する書籍は日本を含む、アメリカや台湾、香港、それにマカオなどの国や地域で多く出版されている。中国国内で出版された代表的な研究は、王年一「大動乱的年代—文化大革命十年史」(1988、2005)、席宣と金春明の著作「文化大革命簡史」(1996)などが影響力のある研究であって、日本語にも翻訳されている。また、香港で出版された嚴家其と高阜作の「文化大革命十年史(上、下冊)」(1986)がある。これらの内容が含んでいる範囲としては、ほとんどが北京、上海や広州などの大都市部における文化大革命運動を中心に記述され、内モンゴル自治区やチベットなどの少数民族地域で発動された文革について言及はごくわずかである。少数民族地域も「昔から中国固有の領土である」、と中国政府だけではなく一般の漢人民衆もそう確信している。それにも拘らず、文化大革命のような、少数民族に対する殺戮や鎮圧については、一般の漢人民衆は冷淡かつ無関心で、政府側は隠蔽しようとしている。これが、少数民族地域で行われた文革を対象にした研究や書籍の出版は困難である主な原因ではなかろうか。殺戮を隠蔽し続けようとする行為は、殺戮を働いた動機と本質的に同じである。

日本において中国文化大革命の研究は、文革運動が行われていた時期と同時平行であった。最初、日本の研究者たちの中では、文革について絶賛と批判の二つの論争が現れたが、文革の実態が明らかになるにつれて、批判派が主流になった。近年の代表的な研究は、中島嶺雄「北京烈烈」(1981年、上・下)、矢吹晋「文化大革命」(1989年)、丸山昇「文化大革命に至る道」(2001年)などがある。

現在にも文革に関する研究を禁止して言論や学術の自由を奪い、真相を知らせないようにしている。

中国国内において、内モンゴル自治区における文革は触れ

ることが許されないタブー

であるゆえに、研究や出版物は厳しい検閲を受ける。1994年、北京大学法律学部教授の袁紅氷氏は、内モンゴル自治区で発動された文革を題材にして書いた小説「自由在落日中」を出版する前に秘密裏に逮捕された。1989年の「天安門事件」において学生たちを支持する立場をとったことに関連付けて、「社会主義制度を転覆しよう」とした「罪」で投獄された。袁氏は、内モンゴル自治区出身の漢人で、ちょうど中学校から大学卒業まで文化大革命の全期を経験した。

内モンゴル自治区における文革についての最初の書物は、トゥメン(図們)、祝東力の著作「康生と“内人党”冤罪」(1995、1996)である、最初は中国語で出版されたが、モンゴル語での訳版も二種あって、モンゴル人だけではなく漢人民衆の間でも広く読まれるようになった。著者のトゥメン將軍は、内モンゴルのハラチン部(現遼寧省)出身のモンゴル人で、中国人民解放軍に入り、文革期に大佐に、1988年に將軍昇進した人物で、法学者でもある。トゥメン將軍は、被害者や肅清運動を指揮した高級幹部など300人あまりにインタビューし、また、自分の日記を含め、文革当時の「文件・档案」<sup>10</sup>といった政府機関が出した公文書に基づき、同書を公にしたのである。この本が無事に出版できたことには二つの大きな理由がある。まず、そのタイトルを見ても分かるように、内モンゴル自治区で行われた「内モンゴル人民革命党虐殺事件」の「誤り」は毛澤東と共産党中央ではなく、すべてが「林彪・江青反革命集団」のメンバーとされた康生によるものであると特定している。次に、モンゴル人虐殺事件が物語る文革の目的は、毛澤東を頂点とする中国共産党が「民族の消滅」を実現させて「民族問題」を解決しようとしたことに触れていないからである。しかし、以上示した二つの点は批判が多いが、楊海英の指摘するように、「現代中国に生きる彼らは中国共産党が設定した桎梏を超えてはならないのである。批判されている点を彼らはすでに著作のなかで示唆しており、読者もそれを明察しているはずである」(楊海英 2009)。続いて、1999年に地下出版の形で出されたアラタンデレヘイ(阿拉騰德力海)の著作「内モンゴルにおける『内モンゴル人民革命党員をめぐり出し肅清する』事件の災難実

8 中国の行政上は内モンゴル自治区であるが、モンゴル人は「南モンゴル」と呼ぶのが一般的である。

9 袁紅氷氏は内モンゴル出身の漢族で、中学校時代の同級生であったモンゴル人の両親が、「反革命分子」として漢人に残忍な手法で殺されたことを目の当たりにしていた。彼は、19才の時から同書の執筆を始めたという。中国共産党のモンゴル人に対して行われた虐殺と非人道的な犯罪を世の中に知らせることは、彼の使命であると言っている。1980年代から中国内部の文革をテーマにした小説は、「傷痕文学」として多く出版され、人々の注目を集めている。最近、内モンゴルにおける文革をテーマにした、ダルハン一『煉獄』、日本語にも翻訳されたリグデン一『地球宣言—大草原の偉大なる寓話』などが出されている。

10 文件は政府機関が出した公文書のことで、档案は住民の身上調書である。

11 中国共産党中央の情報機関の責任者で、当時毛澤東の信頼を得ていた。

録」(内モンゴル自治区における文革研究において重要な参考文献になっている。アラタンデレヘイ氏は文革中に「内モンゴル人民革命党員」として打倒されたモンゴル人幹部の一人で、文革後に内モンゴルで被害者の陳情を管理する政府機関「上訪処」の所長を務めていた。被害を訴えてくるモンゴル人の「上訴の書状」と政府の公文書など第一次資料に基づき、内モンゴル自治区のほぼ全域における典型的な事例をあげながら、モンゴル民族が遭遇した殺戮の歴史を再現したのである。氏の同書の執筆に関する話によると、文革が発動された最初のころから、意図的に資料などを収集して保存していたという。<sup>12</sup>同書は、1981年に発生した「モンゴル人学生運動」まで詳しく分析し、中国政府の少数民族に対する政策は現在も文革時期と何も変わっていないと批判している。同書は、内モンゴル自治区で発動された文革は、上層部権力者の煽動によって立ち上がった漢民族大衆の、モンゴル人に対する虐殺によって、モンゴル人の自治権は完全に失われた、と強調する。また、虐殺を指揮した騰海清をはじめとする共産党の漢人幹部たちは一人も法の裁きを受けていないだけでなく、逆に政府によって保護され、再び政府機関の重要ポストに就いた。共産党政府は文革後もモンゴル人に対して差別的な政策をとり続けたことが、1981年のモンゴル人学生運動に繋がったと指摘している。「大量の漢族農民の内モンゴルへの流入によってモンゴル人の生存空間がなくなり、モンゴル文字が廃止されつつ、その文化は破壊されて、モンゴル民族は存亡の危機に立たされている」[アラ騰徳力海 1999]と喝破する。これらの問題を論述したことは、中国共産党の許容範囲を完全に超えているため、出版は許されなかったのである。それでも、内モンゴル地域ではモンゴル人の読者たちはお互いに紹介しあって広く読まれている。最近、インターネット上でもアクセスできるようになっている。静岡大学の教授の楊海英は、アラタンデレヘイ(アラ騰徳力海)氏の著作「内モンゴルにおける内モンゴル人民革命党員をめぐり出し粛清する事件の災難実録」について、「今のところ、モンゴル人大量虐殺研究の最高レベルの結晶だ」

と評価している(楊海英、2010)。

高樹華、程鉄軍の著作「内蒙文革風雷(一位造反派領袖的口述史)」は、2007年香港で出版された。二人の著者はともに、文革当時の内モンゴル師範学院の「造反派紅衛兵」<sup>13</sup>のリーダーであった。1973から1976年まで、高樹華はトゥメト左旗の副書記に就任する。一方の程鉄軍は1967から1971年の間に、内モンゴル自治区の新聞社「内モンゴル日報」(内蒙古日報)の記者を務めていた。同書は、程鉄軍が高樹華委託によりその遺稿を整理し、解説を加えたものである。毛沢東は青年「紅衛兵」たちを利用して政敵を粛清した後、今度は暴力を執行した責任のすべてを「紅衛兵」たちに転嫁して粛清を行ったと指摘し、最後の被害者は自分を含む無数の青年である、という視点をとっている。高樹華は「内モンゴル人民革命党粛清事件」に対して疑問を持ち、当時の暴力的なやり方に対して支持をしなかったが、反対をする勇氣はなかった(高樹華 程鉄軍、2007)と告白している。彼は、文革は毛沢東を頂点とする中国共産党の官僚独裁的体制から生まれたものであり、毛澤東の権謀術に中華民族全体が翻弄された(高樹華程鉄軍、2007)、と分析している。彼の考えはあくまでも、モンゴル人も中華民族の一員であり、モンゴル民族の遭遇した災禍は、その中華民族の一部であるという認識をもっている。啓之(吳迪またはWoody)という中国在野のシベ族研究者がいる。中国政府の厳しい制約のなか、内モンゴル自治区の文革について研究を続ける彼は、文革運動が内モンゴル地域でピークに達していた1968年から1971年までの間に、本論の拠点であるトゥメト左旗に「知識青年」<sup>14</sup>として下放され、文革運動を経験している。彼の研究は言うまでもなく中国国内では発表や出版はできないが、アメリカ在中の研究者宋永毅とともに行った研究「文革大屠殺」著作が、「毛沢東の文革大屠殺」とのタイトルで日本語にも翻訳されている(宋永毅 松田州二 2006)。この著作の中に収録されている彼の『『内人党』大屠殺の顛末—モンゴル族を襲った空前の災禍』という一文に、内モンゴル自治区で行われた文革の特徴はその「民族問題」にある(吳迪 2006)と指摘し、モンゴル人虐殺事件の根

12 1981年に、共産党中央が大量の漢人農民を内モンゴルに移民させる「28号」公文書を出した。これに反対して内モンゴル全域で起こった学生運動。文化大革命中にモンゴル人虐殺を指揮した騰海清將軍が法の裁きを受けず逆に重用されたことへの反抗も其の主な内容であった。

13 紅衛兵とは、毛沢東の呼びかけに応じて立ち上がり、「資本主義を歩む実権派」や「妖怪変化」とされる幹部を打倒する担い手である都市部の青少年学生たち。その中に、「実権派」とされた幹部たちを保護する立場をとる学生たちも現れ、造反派と保守派に分かれて分裂し、混乱するが、いずれも紅衛兵と自称する。

14 トゥメド左旗。旗は内モンゴルで、清朝時代からつづく行政単位、中国の他地域における県に相当する。自治区首府のフフホト地域に属し、トゥメド左旗と右旗二つあって、一般的にトゥメド旗とよぶようになっている。本論の拠点地であるが、後、詳細に述べる。

15 文化大革命運動中、毛澤東の政敵を倒すための担い手として利用された青年たちは後に、都市部において失業者となった。この深刻な問題と彼らが政治的脅威になることを防ぐために、都市部の青年たちを地方の農村地域へ支援を行う名目で下放した。知識青年という美名をつけられているが、実は中学校卒業や高校中退の青年たちがほとんどである。

本的な責任者は、毛澤東を長とする中共中央にある、毛澤東は首謀者で、主たる責任を負わなければならない（呉迪 2006）、としている。内モンゴル自治区で行われた文革の本質的な部分をここまで指摘できたことは、評価すべきであろう。

2010年に、彼の著作「内蒙文革實録——民族分裂と挖肅運動」が香港の出版社によって上梓された。同書は、文革当時の新聞・壁新聞（大字報）やビラ、また、政府機関内部の資料及び自分で行ったインタビューをもとに、当時内モンゴル自治区で行われた文革の顛末を書き上げた。彼は同書のなかで、内モンゴル自治区内で存在する様々な問題のなか、「既存的」矛盾—少数民族と漢民族との間に存在する矛盾（啓之 2010）が文革によってさらに深刻化された、と指摘する。そして、文革は最も極端な思想、最も野蛮な手段で以って様々な反逆思潮を養い、民族民主思潮は少数民族地域において重要な思想動向になった（同書）。それは、1981年のモンゴル人学生運動の形で爆発した、と関連付けている。彼は最後に、ウランフーの講話を借りて「漢族と少数民族が分離できない」という思想（同書）を主張し、モンゴル民族の分離独立を唱えることは危険が伴い、またもや殺戮を引き起こす可能性がある（同書）と恐れている。

以上、中国内外における内モンゴル地域の文化大革命に関する研究を取り上げた。彼らの研究は、内モンゴルで行われた中国文化大革命の実態を明らかにするための重要な実証研究であり、貴重な参考文献でもある。中国共産党の独裁体制があってこそ毛澤東の神格化が許され、文化大革命という中国全土に絶大な被害を及ぼした暴力運動が発動された、ということは彼らの研究のなかから読み取れる。そして、文革の終息後も、中国共産党中央政府は少数民族地域に対する政策を改善せず、文革時期と同じ政策をとり続けているということも窺えるのである。

##### 5、被害者の具体的な数字、殺害された人の数字、被害され障害者になった人の数字などは以下の通りである。

中国政府の控えめな公式見解によると、346,000人が逮捕され、27,900人が殺害され、12万人に障害が残ったという。当時において、140万人の人口を擁していたモンゴル人たちは、この肅清運動を政府主導のジェノサイドだと理解している。{楊 2008：419－453；2009 a：1－5}。

郝維民（ハラヌート・オドンピリク）が編集し、1991年に内モンゴル大学出版社から出版した『内モンゴル自治区史』は「改革開放」政策の実施で「大きな成果が得られた内モンゴル自治区の発展ぶり」を示す目的で編纂されたものである。同書が提供するデータにはモンゴル人被害者の数である。「都市から農村と牧畜地域、そして林業地域も

含め、いたるところで内モンゴル人民革命党とその変種組織が存在するとされ、34.6万人もの幹部と大衆が誣告され、迫害をうけた。死者は16,222人で、そのたの冤罪事件も含めると、合計27,900人に上っている」{郝維民 1991：313－314}。ここでいう「そのたの冤罪事件」は主として内モンゴル人民革命党肅清運動の前に実施された「オランフーの黒いラインをえぐり出し、その毒害を一掃する」（挖乌兰夫黑线、肅乌兰夫毒瘤）キャンペーンを指す。後に1980年代に入ってから、文化大革命のあらゆる罪を着かせられた「林彪・江青反革命集團」が裁かれた際には「合計27,900人」という表現は正式に消え、「死者16,222人」が起訴状に用いられて、政府の公式見解になった。どちらも操作され、大幅に縮小された数字であるが、それでも中国政府は少ないほうが合理的だと判断した。

**文革が発生した背景：**当時の国際的な背景も絡み、中国における文革運動は内モンゴル自治区から始まったのである。1950年代において、国民党の大陸への反撃と帝国主義の侵略に備えて、戦略上は一、二、三の三つの戦線区域を分け、内モンゴル自治区は第三線にあった。しかし、1960年代になって中ソ関係の悪化により、内モンゴル自治区は「修正主義」に反対する前線になったのである。オランフーは自治区の主席、党書記、軍区司令官、華北局第二書記などの要職を一身に集めた権力者であった。共産党中央から見れば、「反修正主義前線」である内モンゴル自治区において、オランフーをはじめとするモンゴル人は、やはり信用できなかった。全国規模の文革運動を行うのに、まずは、モンゴル人の権力者を打倒して、信頼のできる人を置くことによって、辺境を固める必要があった。文革運動は内モンゴル自治区から始まった狙いはここにある。このような理由で、オランフーは、他の各省や内モンゴル自治区の責任者の中で一番早く失脚した。

内モンゴル自治区における文革運動は大筋において二つの段階に分けることができる。すなわち、前期に、1966年後半から1968年初頭になるまでの時期に「ウランフー反党叛国集團」を打倒する運動が行われた。後期に、1967年11月1日に成立した新しい権力機関すなわち「内モンゴル自治区革命委員会」の指導の下で、今度は「ウランフーの反動路線をえぐり出し、その流毒肅清する」というキャンペーンが行われた。1968年の初めから「抉り出し肅清」運動は正式にスタートし、大規模な虐殺は主にこの時期で発生した。

「えぐり出し肅清」運動は滕海清将軍が指導をとり、軍隊がその主力軍になって、内モンゴル自治区全体で行われた。当時、滕海清将軍の秘書であった李徳臣が言った、「思い

切ってやることを基礎とする」、「羊の群れに入るまで掘ろう」という有名な言葉が語るように、内モンゴル自治区の隅々まで行われた。暴力や虐殺を主な手段とした文革運動の結果、当時 150 万人弱だったモンゴル人口のうち、およそ 346, 000 人が「ウラーンフー反党叛国集団」か「内人党员」と見なされ、その内 27, 900 人が殺害された。<sup>16</sup>

## 6、参考になる資料（資料集、学術論文、本など）の並べ

1. 楊海英 著者「墓標なき草原——内モンゴルにいける文化大革命・虐殺の記録」（上、下）岩波書店、2009 年、東京。
2. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (2) - 内モンゴル人民革命党粛清事件 -』風響社、2010 年。
3. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (3) - 打倒ウラーンフー（烏蘭夫）-』風響社、2011 年。
4. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (4) - 毒草とされた民族自決の理論 -』風響社、2012 年。
5. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (5) - 被害者報告書 (1)』風響社、2013 年。
6. ボヤント 著「内モンゴルから見た中国現代史」、集広舎、2015 年。
7. ボルジギン・フスレ 著「内モンゴルにおける文化大革命直前の政治状況についての一考察—内モンゴル大学における『民族分裂主義分子』批判運動を中心に—」、昭和女子大学、学園・総合教育センター特集 № 811 (24) ～ (37) (2008・5) 東京。
8. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党勢力の内モンゴルへの浸透—『四三会議』にいたるまでのプロセスについての再検討—」、昭和女子大学、学園・総合教育センター特集 № 787 (2006・5) 東京。
9. ボルジギン・フスレ 著「内モンゴルにおける土地政策の変遷について (1946 年～49 年) —『土地改革』の展開を中心に—」、昭和女子大学、学園 № 791 (24) ～ (43) (2006・9) 東京。
10. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党の対内モンゴル政策 (1926 年～36 年) の考察」、昭和女子大学、学園 № 797 (20) ～ (31) (2007・3) 東京。
11. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党の内モンゴルに対する宗教政策(1946 年～48 年)」、昭和女子大学、学園・№ 793 (56) ～ (66) (2006・11) 東京。
12. 阿拉騰徳力海 編著『内蒙古挖肃灾难实录』禁书（出版

社がなし）。

13. 曹永年 主編『内蒙古通史』内モンゴル大学出版社、2009 年、Huhehot。
14. 郝維民 編『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社、Huhehot、1991 年。
15. 郝維民 編『内蒙古革命史』人民出版社、北京、2009 年。
16. 高樹華、程鉄軍 合著『内蒙文革風雷——一位造反派領袖的口述史』明鏡出版社、2007 年、香港。
17. 郝維民 主編『内蒙古近代簡史』内蒙古大学出版社、1992 年、Huhehot。

<sup>16</sup> 当時の造反派のリーダーであった高樹華は自分の口述史において、最低 50 万人が拷問に掛けられ、死者は 5 万人に上ると推測している。

# **UNESCO: Memory of the World**

## **Record of the Genocide in Southern Mongolia (Inner Mongolia) during the Cultural Revolution**

### **1.0 Summary (max 200 words)**

Summary: Descriptions of Nominated Documentary Heritage and Reason for Nomination

This is a record, based mainly on documents prepared by the government's side, of the genocidal policy against ethnic Mongols and the damage wrought by such policy in Southern Mongolia (Inner Mongolia) in People's Republic of China during the Cultural Revolution. Like the massacre of Jewish people under Nazi regime, this is a historical record that should be registered as a negative heritage of the humankind, which never should be repeated.

### **2.0 Nominator:**

#### **2.1 Name of nominator (person or organization)**

Southern Mongolian Kurultai (Southern Mongolian World Conference)

#### **2.2 Relationship to the nominated documentary heritage:**

Same Group

#### **2.3 Contact person (s) (to provide information on nomination):**

Kotaro MIURA

#### **2.4 Contact details**

Name: Address:

Kotaro MIURA 1077-15 Katakuramachi, Hachioji City, Tokyo

Telephone: 0426 83 0565 / Fax: 0426 83 0566 /

### **3.0 Identity and description of the documentary heritage**

Record of the Genocide in Southern Mongolia (Inner Mongolia) during the Cultural Revolution

It consists of newspaper articles during the Cultural Revolution (1966 – 1976), materials prepared by the Communist Party of China, literatures and photographs prepared by the Inner Mongolian People's Revolutionary Committee founded in 1968, reports and academic papers published since the end of the Cultural Revolution till today, and literatures authored or compiled by Professor Yang Haiying of University of Shizuoka.

### **3.4 History/provenance**

Under the command of Chairman Mao Zedong of the Communist Party of China, the Cultural Revolution began on May 16, 1966. From one year on (1967) until the summer of 1970, numerous ethnic Mongols living in Inner Mongolia, where China claimed it as its own territory, were targeted without any grounds in the persecution of members of the "Inner Mongolian People's Revolutionary Party," a separatist movement.

The incident to purge members of the Inner Mongolian People's Revolutionary Party was in nature a massacre and a genocide exclusively targeting ethnic Mongols. In other words, the Mongols were massacred on grounds of being ethnic Mongols only.

According to the official observation of the Chinese government (Hao Weimin, 1991), at least 346,000 Mongols were arrested in Inner Mongolia during the revolution, of which 27,900 lost their lives. In addition to this official view, there is a report that at least 500,000 Mongols were tortured, were killed, and 120,000 were left with physical disabilities. Based on the fact that the Mongolian population in the territory was around 1.5 million during the revolution, a study suggests at least one in five Mongols were arrested, of which about 50,000 lost their lives to tortures (Gao Shuhua and Cheng Tiejun, 2007), while another study suggests over 500,000 Mongols were either tortured or abused, of which over 300,000 people lost their lives (G. Shirabjamsu, 2007). Furthermore, there is a record that over 480,000 Mongols were persecuted, and there are over a thousand Mongols who lost their lives due to forced relocation (Altandelekei, 1999:85). The death tolls mentioned above only account for the ones who succumbed to death on the spot of torture but not for those who passed away upon returning home.

### **3.5 Bibliography**

Yang Haiying, "Grassland without Tombs – Cultural Revolution in Inner Mongolia; the Memory of Massacre" (1st & 2nd volumes), Iwanami Shoten Publishers, 2009, Tokyo.

Yang Haiying, editor, "Basic Data on the Mongolian Genocide (2) – Purge of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party," Fukyosha Publishing Inc., 2010.

Yang Haiying, editor, "Basic Data on the Mongolian Genocide (3) – Down with Ulanhu," Fukyosha Publishing Inc., 2011.

Yang Haiying, editor, "Basic Data on the Mongolian Genocide (4) – Theory of Self-determination Named as Poisonous Weed," Fukyosha Publishing Inc., 2012.

Yang Haiying, editor, "Basic Data on the Mongolian Genocide (5) – Victims' Reports (1)," Fukyosha Publishing Inc., 2013.

Buyant, "Contemporary History of China from Inner Mongolia' s Viewpoint," Shukousha, 2015.

Borjigin Husel, "A Discussion on the Political Situation in Inner Mongolia on the Eve of Cultural Revolution – with the Movement against 'Ethnic Separationist Elements' in Inner Mongolia University as the Central Theme," Showa Women' s University, Gakuen Special Edition on Center for General Education № 811 (24) – (37) (May 2008), Tokyo.

Borjigin Husel, "Penetration of Chinese Communist Party in Inner Mongolia – a Review of Process towards '4/3 Conference' ," Showa Women' s University, Gakuen Special Edition on Center for General Education № 787 (May 2006), Tokyo.

Borjigin Husel, "Transition of Land Policy in Inner Mongolia (1946 – 1949) – with the Development of 'Land Reform' as the Central Theme," Showa Women' s University, Gakuen № 791(24) – (43) (Sep 2006), Tokyo.

Borjigin Husel, "Discussions on Chinese Communist Party' s Policy for Inner Mongolia (1926 – 1936)," Showa Women' s University, Gakuen № 797 (20) – (31) (Mar 2007), Tokyo.

Borjigin Husel, "Religious Policies of Chinese Communist Party for Inner Mongolia (1946 – 48)," Showa Women' s University, Gakuen № 793 (56) – (66) (Nov 2006), Tokyo.

Altandelekei, author and editor, "Record of Calamity in Inner Mongolia," unpublished.

Cao Yongnian et al., editor, "General History of Inner Mongolia," Inner Mongolia University Press, 2009, Huhehot.

Hao Weimin, editor, "History of Inner Mongolia," Inner Mongolia University Press, Huhehot, 1991.

Hao Weimin, editor, "History of Inner Mongolia

Revolution," People' s Publishing House, Beijing, 2009.

Gao Shuhua and Cheng Tiejun, "Storm of the Inner Mongolian Revolution – an Oral History of a Rebel Supreme Comrade," Mirror Media Group, 2007, Hong Kong.

Hao Weimin et al., editor, "A Brief History of Inner Mongolia," Inner Mongolia University Press, 1992, Huhehot.

### 3.6 Name of Expert and Contact Details

Name of Expert Qualifications Contact details

Yang Haiying University of Shizuoka

### 4.1 Documentary Heritage Holder & Organization

Documentary Heritage Holder: Office of Southern Mongolian Kurultai (Address)

Organization Responsible for the Storage of Documentary Heritage: Southern Mongolian Kurultai

### 5.1 Authenticity

This Nominated Documentary Heritage is mainly based on materials prepared by people on the side of the Communist Party of China and citations from newspaper articles during the Cultural Revolution. As many of such materials are official documents, its authenticity is highly reliable.

### 5.2 World Significance

On December 9, 1945, the UN General Assembly adopted the "Convention on the Prevention and Punishment of the Crime of Genocide" (commonly known as "the Genocide Convention" ). Needless to say, the convention reflects the remorse of the international community for overlooking the atrocity of Nazi against the Jewish people and its determination not to repeat such tragedy. Article 2 of the Genocide Convention stipulates as follows:

In the present Convention, genocide means any of the following acts committed with intent to destroy, in whole or in part, a national, ethnical, racial or religious group, as such:

Killing members of the group;

Causing serious bodily or mental harm to members of the group;

Deliberately inflicting on the group conditions of life calculated to bring about its physical destruction in



whole or in part;

Imposing measures intended to prevent births within the group;

Forcibly transferring children of the group to another group.

Realities of the genocide of ethnic Mongols initiated by the Communist Party of China perfectly match definitions of a genocide as specified above in the UN Genocide Convention. In May 1969, three leagues in the eastern Inner Mongolia and three banners in the west were separated and distributed to neighboring provinces resided by Han Chinese people and autonomous regions of Muslims. Thus, the divide-and-rule policy against ethnic Mongols were introduced. It took until 1979 when these territories were finally returned to the autonomous region. To demonstrate our remorse for allowing such atrocity to take place once again and to prevent future atrocities with improved preparedness, we are convinced of the international significance of this nomination as a negative heritage of the humankind.

### **5.3 Comparative criteria: Archive' s Characteristics and Significance**

#### **Time**

The era of Cultural Revolution, referring to China between 1966 and 1976.

#### **Place**

Across Inner Mongolia

#### **People**

Ethnic Mongols residing in Inner Mongolia during the Cultural Revolution.

#### **Subject and Theme**

The genocide which rampaged across the entire Inner Mongolia, and its records and testimonies. This is a record of an ethnic cleansing policy targeting ethnic Mongols.

#### **Form and Style**

Here are summaries of atrocities wrought on ethnic Mongols in different regions:

#### **Xilingol League' s Case**

In early 1970s, there were approx. 145,000 Mongols and 433,000 Han Chinese living in Xilingol League. Xilingol League' s district commander Zhao Derong reportedly said, "Just the sight of Mongols makes me sick. Even if we wipe out the entire Mongolian

population from Xilingol League, it is just like a drop in the ocean when the entire nation is concerned," and "Mongols in the Inner Mongolian military are all corrupt from the top to the bottom. Let' s boldly purge all Mongols in this campaign," upon which 343 people in the military in the League were tortured or suffered violence. 210 of the victims were Mongols. Commander Zhao further left comments like, "Even if you purge every one of Mongols as a member of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party, that would prove correct. There is nothing to worry about if they die. It' s not a big deal. If Mongols die one by one, that would help us a lot," to persuade the Mongolian purge. Under Commander Zhao, 1,863 people were killed by violence in the course of the revolutionary movement. A wide range of violent means, reaching several dozen types, were employed.

The above testifies to the genocidal nature of ethnic Mongols committed regardless of whether the victims were members of the Inner Mongolian People' s Revolutionary Party.

Atrocities and sexual abuses committed in this region are detailed in the attached "Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution."

#### **Ikh-joo League' s Case**

In Ikh-joo League, 150,000 people were named as "members of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party." As the total population of the league was 740,000 at the time, it means about 21% of the entire population was accused. Almost all ethnic Mongols were regarded as "members of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party."

A total of 1,260 people were killed, while 5,016 people suffered injury, of which 2,322 are left with physical disabilities. 739 people completely lost the ability to conduct daily tasks. Among the slain officials, 11 people were the heads of the banner governments, while 150 people were section chiefs, and over 500 people were the leaders of production battalions and platoon leaders. Of the victims, 118 were from Hanggin Banner, and 149 were from Uxin Banner.

Atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached "Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide

against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution.”

#### **Ulanqab League’ s Case**

In early 1970s, approx. 57,000 Mongols and 2.7 million Han Chinese lived in Ulanqab League.

In Ulanqab League, 1,686 Mongols lost their lives, and 8,628 suffered wounds. 4,650 were left with disabilities. In Qahar Right Rear Banner, 200 Mongols were killed. At Saihantara Production Battalion of Ulanhada Corporation in the banner, 18 people were killed and 33 people were injured in 18 days under the commands of the “Liberation Army Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop” and “Peasants & Farmers’ Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop” consisting of ethnic Hans. A Mongol was killed every day on average. The members of “Liberation Army Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop” and “Peasants & Farmers’ Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop” responsible for the atrocity were all ethnic Hans from outside Inner Mongolia. Ethnic Han intellectual youths and other Han Chinese wanderers (known as manliu) also actively took part in the act.

Atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached “Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution.”

#### **Bayannur League’ s Case**

As of early 1970s in the late stage of the revolution, approx. 39,000 ethnic Mongols and 1.18 million ethnic Hans lived in Bayannur League. Within the league, 8,415 people were condemned as the “members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party,” and 363 people were murdered for the charge. 3,608 suffered severe injury. Even newborn Mongolian babies were named as the members of “antirevolutionary Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party.”

Atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached “Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution.”

#### **Jirem League’ s Case**

In Jirem League, a total of 48,500 people were condemned as the “members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party,” of which 3,900 were murdered. 14,000 people were severely injured.

Atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached “Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution.”

#### **Hulunbuir League**

In the league, 47,500 people were persecuted, of which 14,329 were imprisoned and 2,307 people were massacred.

Atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached “Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution.”

#### **Hinggan League**

In Horqin Right Front Banner, over ten thousand people were persecuted, of which over 500 people were killed. In the course of lynch, violent means like “burning to death with stove” , “electrocuting” , “pouring boiling water all over the body” , and “inflating the body from anus” were employed.

Sexual abuses like gangraping Mongolian women and burning their breasts were also commonplace. On the bodies of people named as “antirevolutionary elements” or “ethnic separationists,” three letters signifying “Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” were imprinted with burning incense.

Atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached “Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution.”

#### **Ju’ud (Chifeng) League’ s Case**

In Ju’ud League, almost all Mongols were named as the “members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party.” Malicious disinformation, atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached “Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China

during the Cultural Revolution.”

#### **Alasha District’ s Case**

Mongols in Alasha District, the westernmost region of Inner Mongolia, were partly incorporated into Gansu Province and Ningxia Hui Autonomous Region at that time. It was a result of the policy adopted by the Chinese government in their attempt to separate the Mongolian communities in small pieces to curtail their power.

Alasha District was home to Turghud Mongols, one of the ancient Mongolian tribes. Therefore, during the Cultural Revolution, they were accused of trying to “create schism in the homeland” by founding “Turghud Party.” “Turghud Party” was considered as a variant of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party. Turghud Mongols had a population of about 2,000, of which about 200 people were slaughtered.

Atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached “Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution.”

#### **Huhhot and Baotou’ s Case**

There were about 200 Mongolian officers in the 5th Division of the Squadron in the Inner Mongolia Military Region, but almost all of them were purged by 1971.

Director Bilikbator of the Inner Mongolia Public Security Agency was purged, while vice director Yun Shiyong was ousted. Tenhe of the political department of the territory’ s public security agency was arrested in February 1968 and was tortured for a long time. Perpetrators tried to get information on other Mongols from him. Because Tenhe refused the demand by ethnic Han perpetrators, he was killed on May 21, 1970.

Atrocities, sexual abuses, and tortures committed in this region are detailed in the attached “Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution.”

#### **6 Social/Spiritual/Community Significance:**

While the Chinese government acknowledges the tremendous damage the Cultural Revolution wrought

on the nation and concludes that the atrocity should be “attributed to the antirevolutionary ‘Gang of Four’ led by Lin Biao, Jiang Qing, and so on,” the Central Advertisement Department of the Communist Party of China announced “Notice on Reaffirming the Strict Implementation of Relevant Publication Regulations,” in which it states “publication and announcement of still disputed issues must be handled with precautions to seriously take social repercussions into account.” The announcement further stipulates that “contents that may be detrimental to ethnic solidarity must not be published.”

The above restrictions prevent efforts to clarify the realities of genocide initiated by Han Chinese against the Mongols during the Cultural Revolution and make it extremely difficult for such records to be made available to the public and published within China. In that sense, inclusion of the record of genocide in Memory of the World by UNESCO, an international organization, holds social significance beneficial both to the international community and to the citizens of China as well.

#### **6.0 Contextual information**

##### **6.1 Rarity**

As of today, there is no comprehensive record on the genocide in Inner Mongolia during the Cultural Revolution registered in Memory of the World by UNESCO. This is going to be the first such nomination for the registrater and also the first comprehensive announcement to the international society as a whole.

##### **6.2 Integrity**

Because the nominated documentary heritage exclusively deals with the incident taking place in Inner Mongolia during the Cultural Revolution based on specific documentary materials, its integrity should be considered as sound.

## **A Supporting Document Concerning a Massive-scale Genocide against Mongols by the Communist Party of China during the Cultural Revolution**

This is a documentary proof concerning the genocide against Southern Mongolians by the Central Committee of Chinese Communist Party and the central government of China taking place between May 1966 and September 1976. The genocide was officially conducted by the communist regime consisting of the nation and its government representing the Communist Party of China against the ethnic groups it governs. The specific and historical grounds supporting this statement are as follows.

**1. The genocide was conducted under the direct command of Mao Zedong, Zhou Enlai, Jiang Qing, Kang Sheng, and those in power within the regime. Their specific directives are as follows:**

a. From the summer of 1966 until 1976, a movement called the “Proletarian Cultural Revolution” (hereafter “the revolution” except in specific references) swept through China. The “great supreme comrade” who “initiated and led” the “great movement” was Mao Zedong. Along its chaotic course under the proletarian dictatorship, however, the revolution abused and slaughtered several tens of millions of people who were deemed to benefit from capitalism until the then Central Committee attributed all crimes committed under the regime to Lin Biao and the “Gang of Four” led by Jiang Qing . Compared to other areas in China, the revolution in Inner Mongolia was unique in its implementation. The most characteristic of all was the purge against Mongols deemed to have been involved in the “ethnic schism” . Ulaganhu, the then supreme commander of the autonomous region, was alleged to “sever the Inner Mongolia from the great homeland to merge the inner and outer Mongolia to form an independent kingdom.”

The Cultural Revolution in Inner Mongolia was initiated by the Communist Party’ s Central Political Bureau Expansion Conference, which

took place from May 4, 1966, and the North China Conference, or “Qianmen Hotel Conference” held between May 21 and July 25. In these conferences, prominent figures in the regime like candidates of the members of the Communist Party Central Political Bureau, vice-president of the State Council, chief of the State Ethnic Affairs Commission, and the secretary of the Communist Party Inner Mongolia Committee decided the foundation of the movement.

b. On July 20, 1968, the Inner Mongolia Revolutionary Committee produced “Inner Mongolia Revolutionary Committee Documents” in the forms of “Inner Mongolia Revolutionary Directive (68) No. 351” and “Inner Mongolia Revolutionary Directive (68) No. 352” , in which “Opinions concerning Inner Mongolian Revolutionary Party” and “Opinions concerning Inner Mongolian Revolutionary Youth League” were adopted.

**2. The genocide was conducted by the Han Chinese communist regime against Mongols. The following descriptions support this statement.**

The regime initiated the “movement to gouge out the revived Inner Mongolia Revolutionary Party,” or the “New Inner Mongolia Party Project.” On February 4, 1968, Kang Sheng instructed Teng Haiqing to purge “the Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party, who are still active underground. Do not worry about implementing extensive (purging) operations in the beginning” [Hao Weimin, 1991:309]. As it is commonly known, however, Kang Sheng was a “close aide to the great supreme comrade of the people of China, Mao Zedong,” who had no connection whatsoever with Lin Biao. Similarly, Jiang Qing, or Madame Mao, was just following commands of her husband.

In respect of “the revolution” , Yan Jiaqi, the former director of the Institute of Politics, Chinese Academy of Social Sciences, described as follows: “between

1966 and 1976, the ‘Proletarian Cultural Revolution’ took place in China at an unprecedented scale. The political movement was exceptional in the way it trampled on human rights and ignored democracy and the rule of law. Indeed, it was a disaster wrecking civilization. The destruction was unprecedented in the history of Chinese people<sup>1</sup>. Compared to other provinces and cities in China, however, in Inner Mongolia, the “ethnic issue” and “the problem of ethnic schism” were the main challenges of the “revolution” taking place in Inner Mongolia<sup>2</sup>. In other words, the Chinese government is made up of the Han Chinese, therefore how the government imposes policies on its people (i.e. Han Chinese) or drives political movements on them is an issue of the ethnic Hans but has not much to do with Mongols or Tibetans. However, unlike other provinces and towns, “the revolution” in Inner Mongolia should be deemed as a political slaughter committed by an ethnic group against Mongols. For this reason, Mongols and people in other countries should be entitled to a deeper understanding of “the revolution.” This is particularly important considering that researches on the Cultural Revolution taking place in the eastern Inner Mongolia at a banner level have not made any significant advancement. In this chapter, the author introduces historical background with respect to the revolution in Inner Mongolia and previous studies in the area, describes how the revolution unfolded in the banners, and concludes with descriptive records of the author’s onsite field interviews of the people involved. Through this process, this paper delineates the method and the purpose of, and the truths behind, the revolution driven by the Chinese Communist Party in the eastern Inner Mongolia in its attempt to clarify the predicaments the Mongols went through.

The “gouge out and purge” movement was waged across the entire Inner Mongolia primarily by the armed forces at the behest of General Teng Haiqing. As described by Teng Haiqing’s secretary Li Dechen at the time, the movement reached every corner of

Inner Mongolia “under the principle of decisiveness” and “like digging into the inner circle of the flock of sheep” .

## **Reports on the Personal and Economic Damages Wrought by the Cultural Revolution in Inner Mongolia**

### **I. Status of Damage Suffered by Mongols Suggested in Academic Researches**

According to the official observation of the Chinese government (Hao Weimin, 1991), at least 346,000 Mongols were arrested in Inner Mongolia during the revolution, of which 27,900 lost their lives. In addition to this official view, there is a report that at least 500,000 Mongols were tortured, were killed, and 120,000 were left with physical disabilities. Based on the fact that the Mongolian population in the territory was around 1.5 million during the revolution, a study suggests at least one in five Mongols were arrested, of which about 50,000 lost their lives (Gao Shuhua and Cheng Tiejun, 2007), while another study suggests over 500,000 Mongols were either tortured or abused, of which over 300,000 people lost their lives (G. Shirabjamsu, 2007). Furthermore, there is a record that over 480,000 Mongols were persecuted, and there are over a thousand Mongols who lost their lives due to forced relocation (Altandelehei, 1999:85). The death tolls mentioned above only account for the ones who succumbed to death on the spot of torture but not for those who passed away upon returning home.

### **II. Systematic Killing Led by Military: Damages Suffered by Different Regions in Inner Mongolia<sup>3</sup>**

#### **1. Shilingol League’s Case**

In early 1970s, there were approx. 145,000 Mongols and 433,000 Han Chinese living in Shilingol League. Shilingol League’s district commander Zhao Derong reportedly said, “Just the sight of Mongols makes me sick. Even if we wipe out the entire Mongolian

1 Yan Jiaqi and Gao Gao (高舉 (Gao Gao)), “A Decade of History of Cultural Revolution,” Trend Publishers (潮流出版社), 1989, Hong Kong, p.7.

2 Wudi, “The Whole Story of the Massacre of ‘Inner Mongolian Party,’” from Song Yongyi et al., editor, “The Revolutionary Massacre,” Open Magazine, 2002, Hong Kong, p.60.

3 Records on the statuses of damage within the autonomous region are based on existing academic researches concerning the Cultural Revolution.

population from Shilingol League, it is just like a drop in the ocean when the entire nation is concerned.” In May 1968, he further stated, “Mongols in the Inner Mongolian military are all corrupt from the top to the bottom. Let’ s boldly purge all Mongols in this campaign,” upon which 343 people in the military in the League were tortured or suffered violence. 210 of the victims were Mongols. Commander Zhao further left comments like, “Even if you purge every one of Mongols as a member of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party, that would prove correct. There is nothing to worry about if they die. It’ s not a big deal. If Mongols die one by one, that would help us a lot,” to persuade the Mongolian purge. Under Commander Zhao, 1,863 people were killed by violence in the course of the revolutionary movement. A wide range of violent means, reaching several dozen types, were employed.

#### (1) Atrocity

In Chagan Qoshuu Barigada (Barigada= 大隊), Sunid Right Banner, there were 26 Mongolian households, but 20 of them were named the “ranch owners of the exploiting class” by Han Chinese settlers. “Ranch owners” is a term equivalent to the “land owners” in regions resided by Han Chinese population. The Mongols labeled as the “exploiting class” were chased away from the pasture and were replaced by Han Chinese, who took over their homeland. The removed Mongols were forced to live in caves for five to six years without even a change of clothes.

“People’ s Liberation Army Committee on Armed Forces,” the controlling body of Shilingol League, continued persecution even after Mao Zedong admitted that the “movement (to gouge out members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party) in Inner Mongolia has gone a little too far” in his directive on May 22, 1969. For example, Tobchin , an agricultural director of Hubegetu Shir-a Banner was forced to confess that he, as well as several dozen others, is the “member of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” after torture. Even after May 22, ethnic Han soldiers of People’ s Liberation Army refused the Mongols’ plea to retract their “testimonies” . They continued to treat Tobchin as a “model criminal” until he chose to commit suicide out of remorse.

Similarly, a total of thirty Mongolian officials working in the Public Safety Bureau, Prosecutors Office, and the court of Hubegetu Shir-a Banner were all purged without exception. They were charged for being “the descendants of Genghis Khan and the fierce generals of Ulaganhu.” The Death toll of Mongols from the assault by soldiers of the People’ s Liberation Army reached 120 in the banner. Shilugun Kuh Banner Boshoodai Elementary School was founded in 1916 as one of the oldest schools in Inner Mongolia. It was an affluent school with 350 Mongolian boarding students and a vast pasture occupied by a thousand livestock. There were even a milk processing plant and a soda processing plant in the schoolyard. During the Cultural Revolution, the school was named the “hotbed of ethnic schism” and were completely destroyed and ripped off of its facilities. The several dozen Mongolian teachers working at the school were labeled as the “members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party.” One of the school staff, secretary Purbu ( プルブ ), had his arms broken and ears ripped off before being killed.

Sunid Right Banner is the home of Prince De (Demchugdongrub, 1900 – 1966), who worked on many fronts to realize a high level of autonomy by Mongols. General Teng Haiqing, leading the People’ s Liberation Army to the banner by himself at the order of Mao Zedong, explicitly instructed to “execute the purge” . Teng Haiqing also ordered the Armed Department controlling militias in the banner to cooperate with them in the purge, sending out the following directive:

“There must be plenty of traitors in Sunid Right Banner who tried to betray the homeland and surrender to the revisionist Mongolia. They are all servants of Ulaganhu. To wage the class war is to wage the war against them. The situation in Sunid Right Banner is extremely complicated, but 40 – 50% of the Mongols are good guys.”

At the instruction of General Teng Haiqing, various “variant organizations” and “suborganizations” of the “Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” in Sunid Right Banner were “gouged out.” Over 30 such subgroups, such as “Unification Party” , “Desert Party,” “Black Tiger Agency,” “White Tiger Agency,” and so on, were named. 8,000 Mongols, or 55% of the entire Mongolian population living in the banner,

were named as the “members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party,” of whom 109 people were brutally killed.

The criterion of the “purge” was just one; being an ethnic Mongol. In Saihan-uluji (サイハンウルジ) Corporation , Butumji (ブトゥムジ) Corporation, and Nogugan-nagur (ノガンノール) Corporation in Sunid Right Banner, Mongolian officials were purged without exception and replaced by ethnic Han officials. A military officer of People’ s Liberation Army named Li, who was stationed in Nogugan-nagur , made the following speech:

“Ulaganhu once treated you Mongols as valuable. If there was no Cultural Revolution like this, you would have killed all of us – the Han Chinese. You Mongols are given food and clothes by the great Communist Party of China but are yet trying to harm the Communist Party. Today, the great supreme comrade Mao Zedong rules you. It’ s no longer the era of Ulaganhu.”

Vice political commissioner Zhen, vice chief of staff Qiu, and vice instructor Gao, who were stationed in Sunid Right Banner as the officers of the Liberation Army led by General Teng Haiqing, were Han Chinese. They issued the following instruction:

“Expose Unification Party members even if we have to dig as deep as one meter into the soil of Sonid Right Banner.”

Furthermore, platoon leader Liu, an ethnic Han who occupied Butumji Corporation, said:

“It’ s not a big deal even if all Mongols are dead. We have plenty of people living in the south. Flay the Mongols alive.”

In Nogugan-shili (ノガンシリ) P-rodution Battalion, all Mongols aged 14 or over were forced to register themselves as the “members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party.” Old Damdinsoo (ダムディンソー), who turned 67, tried to register at the headquarters of the production battalion out of fear. Because she could not speak Chinese, she tried to remember the word, “Unification Party,” by repeating

it in Chinese on the way to the headquarters. When she finally reached the headquarters, she panicked and forgot the word. She went back home to remember the word once again and revisited the headquarters for registration.

At Ehebulag Ranch in West Ujumuchin Banner, all Mongolian officials were purged. Intellectual youths from Beijing took over their posts. They officially made the following statements:

“We came here to smash Mongols.”

“Mongols are trying to kill Han Chinese. If a war erupts, Mongols should go north, and the Hans should go south.”

“80% to 90% of Mongolian nomads are members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party. We cannot trust them.”

One day, chief Dongrub of Eji-Nagur (salt lake) Corporation in West Ujumuchin Banner went missing, and the government immediately ordered his arrest. Some were actively spreading a rumor that “Dongrub is patrolling the border with soldiers of Mongolian People’ s Republic.” His family also became the target of mob violence as the “family of the traitor of the great homeland.” In 1972, workers digging salt found a body buried in the Eji-Nagur. Because it was kept in salt, the body of Dongrub did not decay. It turned out that Dongrub did not defect to the “revisionist nation” but was killed and thrown into the salt lake.

Secretary Choijijamsu of Bachi Corporation in West Ujumuchin Banner was an honest man who refused to confess that he is a “member of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” even after being beaten up. The Han Chinese mob hanged him from a beam, roasted his skin, and slashed his body with knives. He was locked up in a room without food until Li Xiurong, a Han intellectual youth, bashed his head with an iron object, splashing the brain all over the room. Yanjima, wife of Choijijamsu , tried to file an appeal in Shilinhot, the capital of the league, but the league government rejected the appeal. Li Xiurong followed Yangjim-a and threatened to kill her children if she continues to appeal.

A Mongolian man in Goruqan Ranch, West Ujumuchin Banner, got seven nails driven to his head before being thrown in a well.

A Mongolian veteran in Sunid Left Banner was repeatedly assaulted for allegedly being a “member of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party” . His old wounds, received during his service in the revolutionary army, started to bleed all over. The Han Chinese mob continued the violence, saying “This is the second award you receive for your service.”

When president Tumud of Bayanbulag Corporation in Sunid Left Banner was killed by a Han Chinese mob, the wife kept his body instead of burying him.

## **(2) Rapes and Other Sexual Assaults**

While Mongolian men were tortured during the revolution, many women were raped. For example, ethnic Han “intellectual youths” in Sunid Left Banner (Zegun-sunid) put Mongolian women under the “people’s control” (mass autocracy) and repeatedly raped them while blindfolding them. As a result, many became pregnant. In Shilugun-Khuh Banner (Shilugun-huhe), a Mongolian woman in her twenties called Adiy-a (アデア) was raped and then beaten for a long time.

A nomad living in Bayan-nagur Corporation, Sunid Right Banner, visited the government office alone on June 27, 1969 and filed a petition. According to him, three out of his six family members were murdered by marauders of Kuomintang before the liberation. Therefore, he faithfully supported Chairman Mao Zedong no matter how. However, ethnic Hans ripped him naked and assaulted him in front of his daughters aged around 18 – 19, forcing him to “apologize to Chairman Mao.”

In the same Sunid Right Banner, a nomad family of four called the Haragul from Bayan-tala Battalion, Bayan-jiruhe Corporation, were named as “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party.” A Han Chinese mob ripped them naked and forced the mother and the son, and the father-in-law and the daughter-in-law, to have sex. Devastated by the humiliation, the father-in-law threw himself in a well, the daughter-in-law hanged herself, and the son stubbed himself to death. The bereaved mother lost her mind.

At Bulag Corporation in West Ujumushin Banner, revolutionary Han Chinese mobs arrested an old couple called Tsebegjab along with their son and his wife and forced the mother and the son, and the

father-in-law and the son’s wife, to have sex. When the family protested, the mob pinned down the mother on the ground and put the son on her. They did the same to the father-in-law and the son’s wife. Throughout these barbaric acts, the Han Chinese mob laughed at them, saying “Are you ashamed? You Mongols have been like this since before, right?” Mrs. Tsebegjab committed suicide before long.

## **2. Yehe-Joo League’s Case**

In Yehe-Joo League, 150,000 people were named as “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party.” As the total population of the league was 740,000 at the time, it means about 21% of the entire population was accused. Almost all ethnic Mongols were regarded as “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party.”

A total of 1,260 people were killed, while 5,016 people suffered injury, of which 2,322 are left with physical disabilities. 739 people completely lost the ability to conduct daily tasks. Among the officials, 11 people were the heads of the banner governments, while 150 people were section chiefs, and over 500 people were the leaders of production battalions and platoon leaders. Of the victims, 118 were from Hanggin Banner, and 149 were from Uushin Banner.

(1) Realities of the massacre even the government admits:

Here, let us look at a report introduced in the “Briefing” issued by the “Chinese Communist Party Yehe-Joo League Commission Policy Implementation Committee” :

While a regiment under Jing ziXXX Unit was stationed at Tuke Corporation in Uushin Banner, Yehe-Joo League, a number of Mongols were murdered.

Tuke Corporation had a population of 2,961, of which 929 were “gouged out” as “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party.” The number accounts for 71% of the adult population in the area. Among them, 270 were treated as “criminals” , and 49 were killed. 270 were left with severe disabilities. All Mongols serving as the members of the Communist Party, members of the communist youth leagues, and militias were criminalized unless they were ethnic Hans.

Pasturelands belonging to Mongols were condemned as the “pasture of horses for the Great Mongol



Empire.” Wells dug for irrigation were also criticized as “wells prepared by Mongols for coup.”

Just to persecute Mongols, ethnic Hans were brought from the neighboring Shaanxi Province. Felt craftsmen, who were ethnic Hans called “Mangliu (盲流 ; blind wanderer)” because they traveled around the nation without fixed destinations, were mobilized as “aggressive elements hired to gouge out members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party.”

Soldiers of People’ s Liberation Army used more than fifty types of punishments to persecute Mongols. Atrocities, exemplified as below, were commonplace:

1. Bludgeons were burned until turning red and pressed on women’ s genitals and bellies. Assaulted women had their genitals destroyed until it no longer looked like womanly. Bellies were severely wounded until the intestines became visible.
2. People were beaten by a whip made of cowhide and attached with barbed wire at the tip. Their skin tore and blood gushed out every time they were beaten, but no one attended to their injuries. Those who were beaten were left abandoned until they died. The smell of the blood splashed on the walls lingered long after the event. There were also cases where the perpetrators rubbed salt into the wounds or poured boiling water until they died.
3. In another case, the perpetrators tied the victim’ s head with thick iron wire and tightened the wire with pliers until the head cracked and burst.
4. A Mongol condemned as an “antirevolutionary criminal” was pressed against a burning stove for many hours. In another case, the perpetrators pressed a red-hot iron shovel on a person’ s head to burn him to death.
5. Perpetrators tied the victim’ s hands behind his body and hanged him from a beam to dislocate the shoulders. In some cases, they cut the rope hanging the victim with a knife to let the victim fall to his death.
6. Perpetrators forced a Mongolian woman stand naked and straddle on a thick rope made of cow hair, then pulled the rope repeatedly until her genitals was severely scraped.
7. Soldiers of the People’ s Liberation Army killed a Mongol man and repeatedly raped the wife. In another case, a Mongol girl was raped.

8. Perpetrators looted Mongols’ assets. An ethnic Han soldier robbed a precious wrist watch from a Mongol. The victim followed the soldier to Dongsheng, the capital of the league, and asked him to return the watch, but the soldier just ignored the plea.

While there were naturally more conscientious soldiers in the regiment, two such soldiers were immediately discharged from the service when they raised doubt about the persecution.

These incidents were reported in documents that was temporarily permitted for issuance by the government of the Chinese Communist Party. Cases introduced below are other examples.

## (2) Atrocities

Batai , a secretary of Soburqan Corporation in Ejen-Qorug-a Banner, Yehe-Joo League, had his tongue chopped off by the perpetrators. Zhen Futing, the Vice Director of the Armed Department, Dongsheng County, received 47 different kinds of punishments and was stabbed 16 times.

In another case at the previously mentioned Tug Corporation in Uushin Banner, Zhen Wenkui and Ma Lanfang, a Han Chinese couple at Tuguldai Production Battalion of Tug Corporation brought Mongols to their home and tortured them days and nights. The couple came up with more than fifty types of torturing methods. Three Mongols lost their lives to the couple’ s violence, and over thirty victims suffered severe wounds.

Han Chinese perpetrators also employed violence on Mr. and Mrs. Batusereng , the captain of Tuguldai Production Battalion in Tug Corporation, Uushin Banner, and forced them to admit that the unborn fetus of Mrs. Batusereng was a “member of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” .

Danzan , a secretary of Meirin-Sum-e Battalion in Tug Corporation, was attached with a horse bit, and Han Chinese perpetrators rode him around. In the end, Danzan was slaughtered by knife.

A Mongolian family of six, called the Shidi , were all named as the “members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” , including the grandfather aged 83 and a 43-day old baby. Female members of the Shidi were also tortured for many days. In the end,

the baby also died.

In the family of vice secretary Semchug of Tug Corporation, a nine-year-old girl was the only survivor of the family of five. An ethnic Han mob and soldiers of the People's Liberation Army argued, "Cull the Mongols, so that we can save food. Concerns of Han Chinese will be solved if members of Inner Mongolian People's Revolutionary Party are eradicated."

### (3) Sexual Abuses

Bai Xiuzhen (Mongolian woman), an official in Yehe-Joo League, was repeatedly raped and was gored in her genitals with an iron bar, which severely wounded her from within. Finally, her body was thrown into a well and reported as a "suicide" .

Tumenjirgal , a Mongolian man, received various violence and then was order to crawl between the daughter-in-law's legs.

Cholmun , a young vice secretary of Tuke Corporation, Uxin Banner, was ripped completely naked and tortured for five days and nights. In another case at Tuke Corporation, Uxin Banner, an official called Dongrub received twelve different kinds of violence until she vomited blood. Dongrub was then further forced to have sex with donkeys and pigs, while the perpetrators verbally abused her, saying, "Mongols are animals."

### 3. Ulaganchab League's Case

In early 1970s, approx. 57,000 Mongols and 2.7 million Han Chinese lived in Ulanqab League.

In Ulanqab League, 1,686 Mongols lost their lives, and 8,628 suffered wounds. 4,650 were left with disabilities.

In Chaqar Right Rear Banner, 200 Mongols were killed. At Saihan-tala Production Battalion of Ulagan-Qada Corporation in the banner, 18 people were killed and 33 people were injured in 18 days under the commands of the "Liberation Army Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop" and "Peasants & Farmers' Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop" consisting of ethnic Hans. A Mongol was killed every day on average. The members of "Liberation Army Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop" and "Peasants & Farmers' Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop" responsible for the atrocity were all ethnic Hans from outside Inner Mongolia. Ethnic Han intellectual youths and other Han Chinese

wanderers (known as Mangliu) also actively took part in the act.

### (1) Atrocities

Biligtu, a member of the Political Planning Committee of Ulanqab League, had his teeth forcibly pulled out with pliers and his nose and tongue severed by a Han Chinese mob. Biligtu lost his life to sepsis.

In Bayan Production Battalion of the Soot Corporation in Chaqar Right Front Banner, 146 Mongols lived in 37 households. Of the 146 Mongols, 88 were branded as the "members of Inner Mongolian People's Revolutionary Party," and 17 were murdered. In the same Banner, all Mongols aged 20 or above among 155 Mongols of 34 households living in Saihan-usu Corporation were named as "ethnic separationists," and ten of them were killed.

After killing a Mongolian security manager in Chog Corporation, Durbed Banner, the Han Chinese mob hid his body, announced that he "defected to Mongolian People's Republic," and caught his family to torture. Later, the body of the murdered Mongol was found in the snow, eaten by stray dogs.

Boljug-a , a Mongolian staff working at a post office in Durbed Banner, was arrested on the charge of being "a member of the separationist Inner Mongolian People's Revolutionary Party." A stone weighing 35 kg was thrown at him, while he was hanged from a beam of a house. He was then electroshocked until he lost his mind. In February 1970, Liu Yubai and You Xuezhong, ethnic Hans who repeatedly assaulted him, took him out to "a hospital" but came back emptyhanded, claiming that Boljug-a went missing.

When Boljug-a's mother visited from as far as Hurriy-e Banner in the eastern Inner Mongolia just to see his son, the mother was also taken to the criticism strife meeting by ethnic Hans, where she was violently assaulted.

In Durbed Banner, there was a case of a couple arrested by the perpetrators, and their child, left alone, burned itself to death while trying to kindle a stove. In another case, a young man was arrested, and a disabled elderly looked after by the youth was frozen to death.

### (2) Sexual Abuses

Ru Yi , the superintendent of a communist school in

Ulanqab League, had his genitals tied to a rope and pulled until the genitals were completely ripped off.

Han Xiuying, a female secretary in Jining Welding Rod Factory, was ripped naked and had her pubic hair pulled out with pliers.

In Bayan-obug-a Corporation, Dorbod Banner, corporation secretary Norbujamsu was severely wounded by a knife attack by Pan Xiuyu, an ethnic Han postal worker. The perpetrator then rubbed heaps of salt into the wound and then burned him with hot iron. After the murder of Norbujamsu, the Han perpetrators repeatedly raped his wife, Dorjisoo, until they killed her by penetrating her genitals with a red hot iron bar. Because no one looked after their 5-month-old baby, the baby was frozen to death.

In another case at Bayan-obug-a Corporation, Dorbod Banner, a young Mongolian couple working as secretary of the corporation was cut all over the bodies with knife and then rubbed salt into their wounds. After the husband was killed, the Han Chinese perpetrators raped the wife and burned her genitals. After the wife passed away, her baby continued to suck her breast without knowing its mother's death.

In Zhuozi County, as many as 13,000 ethnic Mongols were branded as the "members of Inner Mongolian People's Revolutionary Party," and 95 of them were killed. The perpetrators came up with over 170 types of brutal abuses, and many Mongolian women were raped. The wife of a secretary of Ma Lianba Battalion was repeatedly gangraped by forty men. In Liu Guanjiào Battalion, a young Mongolian woman was also raped.

After the murder by ethnic Han perpetrators of Namsarai, the chief of Liangcheng County People's Congress, his wife followed the husband by throwing herself in a well. The couple was survived by a 16-year-old daughter called Duu-dagula. She was one of the members of "Widows' Petition Group" who visited Huhhot to file appeals after May 1969. Han Chinese, however, accused her for being in the "group of widows while she was a daughter," denying her human rights.

### **(3) Forced Relocation**

Forced relocation typically took place during the night, in which soldiers of the People's Liberation

Army suddenly made visits to Mongolian households and ordered them to get on trucks to be taken to the headquarters of the People's Corporation. At the headquarters of the People's Corporation, relocation was suddenly announced and then immediately carried out. The displaced Mongols were not allowed to take anything other than essential houseware. They had to give up all their livestock, house, furniture, and other assets. The financial damage suffered by ethnic Mongols reached 420,000 won in Ulanqab League alone. In Chaqar Right Rear Banner alone, 75 Mongolian households living close to the border of Mongolian People's Republic became the subject of forced relocation to inland. Ethnic Han households took over their pasture and settled there.

In Dalai Production Battalion of Bayan-obug-a Corporation, Dorbod Banner, there were 23 Mongolian households. 21 of them were forced to migrate in September 1969. After their removal, 57 Han households moved in.

### **4. Bayan-nagur League's Case**

As of early 1970s in the late stage of the revolution, approx. 39,000 ethnic Mongols and 1.18 million ethnic Hans lived in Bayan-nagur League. Within the league, 8,415 people were condemned as the "members of Inner Mongolian People's Revolutionary Party," and 363 people were murdered for the charge. 3,608 suffered severe injury. Even newborn Mongolian babies were named as the members of "antirevolutionary Inner Mongolian People's Revolutionary Party."

#### **(1) Atrocities**

When a Mongolian couple called the Damba was killed in Sangiin-dalai Corporation in Urad Middle and Rear Union Banner, a region close to the border, they were survived by four children. One of the children was drowned, another one was frozen to death, and another one lost its life to mental illness. The only surviving child was taken by relatives. Yehe Bulag Production Battalion of Bayan Corporation in the same banner had 60 households, but all of them except for 15 ethnic Han households were placed under stringent military control as "untrustworthy Mongols".

Wu Qingyun from the same banner had his tongue

severed, because Wu was an ethnic Mongol from Liaoning Province in northeast China.

Jodba, the director of unified front of the league government, was driven nails on his head alive. Because the nails reached cranial nerves, he used medications to prolong his life without being able to receive surgery.

## (2) Sexual Abuses

A Mongolian man in Chog Banner was tortured, while his wife and daughter were raped by ethnic Han mobs. The man was eventually killed. In the same banner, Delger-batu (デレゲルバト) of Ulji (ウリジ) Corporation was locked up for over ten months and was repeatedly tortured. During the lockup, his household assets were looted, and his wife and daughter were repeatedly raped by Zhang Ailiang, an ethnic Han. The wife died before long.

## 5. Jirim League' s Case

In Jirim League, a total of 48,500 people were condemned as the “members of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party,” of which 3,900 were murdered. 14,000 people were severely injured.

Commander Zhao Yuwen of the People' s Liberation Army stationed in Jirim League made a following speech at a Communist Party' s convention:

“There are many enemies in Jirim League. Mongols alone account for 700,000. Jirim League has a very complex social situation. Ulaganhu' s influence is strong. Jirim League is a basecamp of spies and traitors.”

Commander Zhao Yuwen also mobilized a massive number of ethnic Han peasants from regions populated with Han Chinese and told them, “Genghis Khan is a moron, but Yue Fei was a real hero. Like Yue Fei in Song Dynasty, let' s destroy Tatars.” “Tatars” is a derogatory term Han Chinese use against Mongols.

Commander Zhao Yuwen persisted that Jirim League is haven to “Wu/Shi/Yun Party Traitors' Group” and tortured many. Wu in “Wu/Shi/Yun Party Traitors' Group” stands for Ulaganhu, “Shi” stands for Shi Guanghua, and “Yun” stands for Yun Shubi. Yun Shubi is the daughter of Ulaganhu, and Shi Guanghua was her husband. Commander Zhao said, “Jirim League is the most reactionary of all and is an outpost of Mongols rebelling against the great homeland and

the Communist Party.”

Commander Zhao arrested 11 members of Jirim League Government Committee, which comprised of 14 members, and two of them were murdered. He imprisoned Shi Guanghua and Yun Shubi couple and secretary Sain-bayar for many months and abused them in every possible way.

## (1) Atrocities

Helped by the mobilization prompted by Commander Zhao Yuwen of the People' s Liberation Army, the Mongolian society suffered extreme damages. Li Guozhen and Du Cheng, ethnic Hans from the Jirim League Committee on Armed Forces, brandished whips on Mongols imprisoned in the “Study Group,” while verbally abusing them by saying “Revolution is about defeating enemies, not about holding banquets and eating food.” Of the 81 ethnic Mongols working at courts, prosecutors' office, and public security commission of the league government, 57 people were condemned as “members of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party committing crimes against the homeland and the people.”

The Mongols branded as the “members of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party” suffered atrocities such as: “burned with stove,” “electrified,” “flayed alive,” “branded with letters on face,” “driven nails on the head,” “ripped naked and thrown outside to get frozen during winter” , and so on.

In Horqin Left Middle Banner, 190 out of 201 Mongolian officials who were in the position of section chief or above were condemned as the “members of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party.” Among 26 Mongolian staff at the transportation center of the banner, 23 were named as the “members of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party.” Han Zhen, an ethnic Mongol in Monta Corporation was accused of “preparing posts to tie horses when Ulaganhu revolts against the homeland” because he planted a lot of trees. The food he kept at home was also condemned as the “food for Ulaganhu' s rebel forces.”

Even those who have deceased before the Cultural Revolution were named as the “members of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party.” For example, in Horchin Left Middle Banner, the grave of Booshoshingg-a, a Mongol, was destroyed by a Han

Chinese mob, and his body was dragged out of the grave to be humiliated.

In Jiruhe Ranch of Horchin Left Middle Banner, Commander Zhao Yuwen directly took command to condemn 170 people out of 1,700 staff as the “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party,” of which 31 were killed.

At a newspaper company called Jirim Journal, three Mongols were murdered.

Mongolian officers in Jirim Military Region were also purged. Political commissioner Agdam, vice-commander Huhe-hada, and chief of staff Badaranggui were among the 29 people who were murdered.

## (2) Sexual Abuses

Commander Zhao Yuwen and soldiers of the People’s Liberation Army abused women in the following manner. Mongolian women raped by them included girls in their teens. In one case, a baby clung to its mother and rejected to be removed after she was raped and then killed. Violence like “gangrape”, “burning genitals with iron”, and “swelling genitals with inflator” took place.

## (3) Banning of Mother Tongue

Commander Zhao Yuwen of the People’s Liberation Army ordered Mongols not to “speak the language of donkey.” “Donkey” is a typical derogatory term used among Han Chinese.

Commander Zhao Yuwen also commented one day, “We have gouged out 50,000 Mongols in Jirim League, but it’s still not enough.” Under this command, the massacre in Jirem League continued for several years.

## 6. Hulun-buir League

In the league, 47,500 people were persecuted, of which 14,329 were imprisoned and 2,307 people were massacred.

### (1) Atrocities

Shops in Hulun-buir League had the following sign:

“Hey, you! You are the member of Inner Mongolian Party. Go get yourself registered. You, the member of Inner Mongolian Party, get registered, registered, registered!”

Entrance to buses also had a sign saying “Inner Mongolian Party members must be registered

immediately.” In a barbershop in Manjuur, there was a scribble saying “You must be a member of Inner Mongolian Party!” In this manner, ethnic Mongols were tortured mentally and psychologically.

An ethnic Han leader in Morin-dabag-a Banner instructed his people to “Work hard just for two weeks to eradicate Dagur.” Dagur are an ethnic minority related to ethnic Mongols in a special manner. Of the 22 committee members of the banner’s political commission, 12 Dagur were all named as the members of “Unification Party responsible for trying to sever the country.” Also, of the 190 ethnic Dagur officials in 17 corporations within the banner, 85 of them were condemned as the members of “Unification Party.” It needs not say that the existence of “Unification Party” is completely groundless. Ethnic Hans widely accused them, saying “You Tatars are planning to surrender to the nation of Mongolian revisionists, drink milk and slaughter Han Chinese like us.”

Along Ergun-e River in the league, approximately 3,000 ethnic Russians lived. Many of them have been married with ethnic Hans and other ethnicities, but over 90% of them were counted as the members of “unpatriotic antirevolutionary group.” Not only were they bullied for being “large-nosed” or “half-blooded,” they were also prohibited from using Russian language and wearing native costumes.

Orchuns, a small ethnic group with a population of about 1,015 lived in the mountains of Yehe-Hinggan-Dabag-a. Because they also had a special tie with Mongols, 192 people, or nearly 30% of the entire population, were condemned as the “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party.” Ethnic Han perpetrators tied them to cars and beat them up while deriding them, saying “You are animals, this is your end.” They also encouraged each other by saying “Kill a Tatar and you are a good guy, kill ten Tatars and you are a hero.”

Evenk Autonomous Banner near Hailar District is a settlement of ethnic Evenkis. Evenki People are historically close to Mongols and speaks Mongolian language. In this banner, all Evenk officials were condemned as the members of nonexistent “Unification Party.” Secretary Tumen-bayar and banner chief Unen-mandula were among the 20 officials who were murdered.

## (2) Banning of Mother Tongue

Soldiers of the Liberation Army stationed in Morin-dabag-a Banner, Hulun-buir League, prohibited Mongols and Dagurs from using their mother tongues, saying “You shouldn’t speak the language of donkey, language of animal.”

## 7. Hinggan League

In Horchin Right Front Banner, over ten thousand people were persecuted, of which over 500 people were killed. In the course of lynch, violent means like “burning to death with stove”, “electrocuting”, “pouring boiling water all over the body”, and “inflating the body from anus” were employed.

Sexual abuses like gangraping Mongolian women and burning their breasts were also commonplace. On the bodies of people named as “antirevolutionary elements” or “ethnic separationists,” three letters (内人党) signifying “Inner Mongolian People’s Revolutionary Party” were imprinted with burning incense. There were also harrowing cases like below:

An elementary school teacher of Haoren (Haoren) Corporation in the banner was murdered by the “People’s Liberation Army Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop.” The grieving father of the teacher brought his son’s head and bloody clothes to the officials of the People’s Liberation Army but was just ignored. For ethnic Han soldiers, slaughtering Mongols was just part of the “strategy to sweep people’s enemies.” No sympathy or pity was shown.

The atrocity did not stop at just the massacre of Mongols. White flags, saying “Obstinate followers of Ulaganhu,” were raised on the graves of the slaughtered Mongols. This is a traditional means, unique to the Han Chinese society, to insult the dead.

In Ulagan-modu People’s Corporation, Haoren, 48 people were killed. Among the population in their thirties in Guangming Production Battalion, seventy Mongols were branded as the members of “Inner Mongolian Party” and were suppressed.

Of the 66 Communist Party branches in Horchin Right Middle Banner, 44 branches were branded as the “branches of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party.” In the banner, 1,647 people were persecuted, and 1,331 of such victims were the members of Communist Party.

In Jalaid Banner, nine out of eleven family members

of 62-year-old Mergense, who was praised as a “model worker,” were condemned as the “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party” and assaulted for two months. In the worst instance, they were tortured with over ten types of torturing methods for day and night for five consecutive days. Mergense also directly received violence and was left with disabilities.

## 8. Juu-ud (Chifeng) League’s Case

In Juu-ud League, almost all Mongols were named as the “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party.” The fact that no Mongols who were not either “antirevolutionary elements” or “separationists” existed in the league, when they tried to elect a Mongolian representative for the 9th Communist Party National Convention held in the spring of 1969, demonstrates the horrendous situation surrounding Mongols in the league at the time.

### (1) Atrocity

In Bayan-qagan Corporation of Bagarin Right Banner, approximately 3,000 Mongols lived, of which 364 people were named as the “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party.” The ethnic Han population spread words like “Inner Mongolian People’s Revolutionary Party exclusively consists of Mongols. They are trying to behead Han Chinese like us.” Along with the false claims, they deployed the massacre campaign.

In another case in Bagarin Right Banner, Secretary Rabjai of Yehe-nagur Corporation had four nails driven into his head and then publicly criticized for twelve days.

### (2) Sexual Crimes

Huchutu, who worked at the veterinarian center in Bayan-agula Corporation, Bagarin Right Banner, was buried alive. His 18-year-old daughter was gangraped by Han Chinese. Sechen-gowa, a woman in Bayan-qagan Corporation, was six-month pregnant but was exposed to the criticism strife until she miscarried her twin children. Mongolian women were also forced to call themselves as “jennet.” All women arrested for being the members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party were ripped naked and tortured.

### (3) Banning of Mother Tongue

Ethnic Hans in Bayan-qagan Corporation, Bagarin

Right Banner, deprived Mongols of their right to speak in their mother tongue by accusing them, “Mongolian speakers are obstinate ethnic separatists,” and instructing them to “Speak Chinese instead of Mongolian language.”

### **9. Alasha District’ s Case**

Mongols in Alasha District, the westernmost region of Inner Mongolia, were partly incorporated into Gansu Province and Ningxia Hui Autonomous Region at that time. It was a result of the policy adopted by the Chinese government in their attempt to separate the Mongolian communities in small pieces to curtail their power.

Alasha District was home to Torgud Mongols, one of the ancient Mongolian tribes. Therefore, during the Cultural Revolution, they were accused of trying to “create schism in the homeland” by founding “Torgud Party.” “Torgud Party” was considered as a variant of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party. Torgud Mongols had a population of about 2,000, of which about 200 people were slaughtered.

#### **(1) Atrocities**

Ejen-e Banner in Alasha District is located at the westernmost area of Inner Mongolia. Banner chief Erdeni-gerel of Ejen-e Banner was arrested along with chief Cang Deming of the banner’ s government office, director Sain-boyan of the people’ s court, president Seren-odu of the women’ s federation, etc. They were named as the “Torgud Party bosses.” Banner chief Erdeni-gerel was imprisoned for seven years, and his execution was scheduled at one point.

#### **(2) Forced Relocation**

In 1973, the government of Gansu Province forced Mongols in Ejen-e Banner to move inland. The family of banner chief Erdeni-gerel was also among the displaced.

### **10. Huhhot and Bogutu’ s Case**

#### **(1) Atrocities**

There were about 200 Mongolian officers in the 5th Division of the Squadron in the Inner Mongolia Military Region, but almost all of them were purged by 1971.

Director Bilig-bagatur of the inner Mongolia Public

Security Agency was purged, while vice director Yun Shiyang was ousted. Tenghege of the political department of the territory’ s public security agency was arrested in February 1968 and was tortured for a long time. Perpetrators tried to get information on other Mongols from him. Because Tenghege refused the demand by ethnic Han perpetrators, he was killed on May 21, 1970.

Hafungga-a is one of the founders of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party, whose mission is to achieve the true independence of ethnic Mongols. After the establishment of the People’ s Republic of China, he served as the vice-chairman of Inner Mongolian government. He was tortured for a long time as the “ringleader of the Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” before finally succumbed to death on November 29, 1970. Similarly, Temur-bagan-a, a leader of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party, died in January 1969 due to violence. He was the director of the supreme court of the territory before the arrest.

Director Urtu of the territory’ s civil administration agency was also another prominent figure striving for the independence of ethnic Mongols since 1940s. He was arrested on December 12, 1968, and was killed on December 19 of the same year.

Vice chief secretary Garbusengge of the territory’ s government was abducted on December 18, 1968 by Zang Haixian and Wu Chunfang, tortured for a long time, and was killed on January 5, 1969. Despite the atrocity, Wu Chunfang was appointed as a director of Wuhai City’ s department after the Cultural Revolution. Ethnic Mongols complained about the appointment to President Hua Guofeng, but their plea was completely ignored.

In Tumed Left Banner neighboring Huhhot, 11,433 people allegedly been involved in “Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” were assaulted, of which 331 were murdered, and 1,852 people were left with physical disabilities.

In Tumed Right Banner, 5,329 people were assaulted, of which 241 people were killed, and 655 people were left with disabilities.

Huhhot Railway Bureau (railway agency) had 446 Mongolian staff, of which 444 were condemned as the “members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party,” 13 were killed, and 347 suffered

severe injuries. Five women miscarried due to torture, and four children were murdered.

Sodu, a worker at Huhe-hota Railway Bureau Saiqantal-a Zone (locomotive depot), was arrested along with his wife. Ethnic Han perpetrators pulled out a fetus from the pregnant wife with a thin wire, while saying "The child will end up being a member of Inner Mongolian People's Revolutionary Party, so it's better to dispose it earlier."

Li Guodao of "Inner Mongolia Geological Survey Team" based in Huhe-hota issued a slogan, "Round up Mongols," and promoted violence. All eight Mongols in the team were purged. One of such Mongols called Bao Guixian was a direct descendant of Genghis Khan. Ethnic Han perpetrators tortured and taunted him, saying "You, the descendants of Genghis Khan, dog of Ulaganhu, thank us for sending you to Genghis Khan on the other side of the world." A Mongolian man called Bian Fucheng had his seven ribs and thoracic spine broken before finally had his testicles crushed by his perpetrators. Even after these assaults, the Han torturers continued violence while repeating, "You the members of Inner Mongolian People's Revolutionary Party must be gunned down. This is the proletarian autocracy."

In Shira-muren Joo Corporation in Darqan-muuminggan Banner, Baotou, about 1,800 ethnic Mongols lived, of which 49 were murdered, and over 50 people suffered severe injuries. In Mandula Corporation of the same Darqan-muuminggan Banner bordering Mongolian People's Republic, 15 people were murdered. 6 of them were forced to hang themselves. Among the dead, 4 were Tibetan Buddhism monks. The names of the victims are Dandar-a, Nim-a, Harjim, Nasun-jalagal, Sebjei (woman), Ondor, Barq-a, Badm-a, Soyultu, Narbu, Agun, Genden, Shilqu-jamsu, ChangFeng, and Babu. Among the victims, Soyultu was only three years old. After his mother, Nabchima, escaped from the hands of Han Chinese mob trying to rape her, Soyolt was left alone, suffered frostbites, and then died of hunger. In this corporation, 63 Mongolian households were further forced to migrate inland and were replaced by ethnic Han farmers. It was part of the policy to prevent Mongols from defecting to the "revisionist Mongolian People's Republic" or to the Soviet Union. Also, settlements by Han Chinese would be more

advantageous in terms of defense if the armed forces of "the revisionist state" invades China. The purge in Mandula Corporation took place under the lead of secretary Guo, a Han Chinese. After the Cultural Revolution, secretary Guo enjoyed the protection of the Communist Party and was promoted to the director of Wuchuan County Water Resources Bureau. In the 4th Production Battalion of Bayan-obug-a Corporation, Darhan' mu' minggan Banner, there was a case of a 7-year-old Mongolian child left alone and frozen to death because its parents were arrested.

## (2) Sexual Crimes

On September 7, 1968, Wang Sanxiao, a Han Chinese from Halabaisin Production Battalion of Zhongtan Corporation in Togtoh County, a suburb of Huhhot, was appointed as the leader of "Committee to Gouge Out and Purge the Members of Inner Mongolian People's Revolutionary Party." He raped 12-year-old Lolma, a Mongolian girl in Darhan' mu' minggan Banner. Then, he soon raped Oyuntongalak, a 15-year-old girl.

During the Cultural Revolution, 49 Mongols out of 1,800 Mongolian residents in Shalmren Jo Corporation were killed, while over 50 people were left with severe disabilities. Female Han intellectuals in this corporation forced Mongols to drink water contaminated with their menstrual blood.

Linchindolji, a woman from the 3rd Production Platoon of Bayanobo Corporation, Darhan' mu' minggan Banner, succumbed to death after Han Chinese men battered her genitals with pickaxe. Yang Qiuyuan and his Han Chinese men in the same corporation detained Mongols and ripped them completely naked. Then, they tied ropes to men's genitals, had the ropes pulled by women while forcing them to sing a song called "Golden Sun in Beijing." After the closure of the Cultural Revolution was declared, Yang Qiuyuan escaped punishment under the protection of the officers of People's Liberation Army.

Lan Mishuan, an ethnic Han in Bayanchagan Battalion of Bayanhowa Corporation, Darqan-muuminggan Banner, killed a Mongol to take the wife and made her pregnant. The grieving wife lost her mental stability.

Han Xiuying, a woman in Jining, had her pubic hair



ripped out with pliers by Han Chinese.

In Dengkou Production Battalion of Guyang County, Baotou, 1,860 Mongols were condemned as the “members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party,” of which 83 were killed. The Han Chinese mobs detained men and women together, drew female genitals on men’s faces and male genitals on women’s faces, and taunted it as the “union of the male and female members of Inner Mongolian Party.” They also put women’s underwear, stained with menstrual blood, on men’s head.

### **(3) Banning of Mother Tongue**

The Han Chinese population in Juning Zone of Huhe-hote Railway Bureau discriminated Mongols in employment, claiming “We must not let Mongols drive locomotives, or they will steal the train and bring it to the revisionist Mongolian People’s Republic.”

In Huhe-hote Railway Bureau, Mongolian workers speaking in Mongolian language were reviled, “Stop using that dirty language.” In the screening procedure for employees aspiring to be promoted to officials and at recruitment exams, the organization deliberately made the level of Chinese language harder to block Mongolian candidates.

There were 27 officials who were either Mongols or Dagurs in Inner Mongolia Education Bureau. All but one of them were arrested and tortured, while the perpetrators abused them, saying “Stop speaking gibberish.”

### **(4) Forced Relocation**

In Darqan-muuminggan Banner, military control of the households was introduced in 1970, under which 360 Mongolian households near the border were ordered to relocate. 144 households were forced to move out to inland in just one night. Abandoned livestock were left locked up. Later on, about 400 intellectual youths moved in and put them out to pasture. There was also a plan to send Han Chinese population in Wuchuan County to settle in, but the plan did not take place. Even Mongols married to Han Chinese spouses were forced to migrate inland, while the Han spouses were left in their original lands.

In Mandula Corporation, Darqan-muuminggan Banner, 218 Mongols in 63 households were ordered to relocate and were replaced by the Han Chinese

farmers, settling in their homeland. In that instance, a woman called Nabchim-a escaped from being raped, but her 3-year-old child, Soyultu, was left alone and died of hunger.

### **Inner Mongolian People’s Revolutionary Party:**

Inner Mongolian People’s Revolutionary Party, founded in Jiang Jiakou City in October 1925 under the auspices of Mongolian People’s Republic and Comintern (Communist International), was a political party whose goal was to realize ethnic Mongolian self-determination and independence. Leading figures of the party included Bai Yunti (aka. Serengdongrub) and Merse (aka. Guo Daofu) from eastern Inner Mongolia, who were actively involved in the foundation of the party. The inaugural meeting also had the participation of Ulanhu (then Yun Ze), then a student of Mongol-Tibet Career College in Beiping (now Beijing), as well as leaders of mass movement (Duguilang) from across Inner Mongolia fighting against the migration of Han Chinese settlers. Following its foundation, the party actively sent talented Mongolian youths to the Soviet Union and Mongolian People’s Republic in accordance with the Comintern policies and worked to establish its own armed forces at the same time.

Once Japan occupied the northeast China, then Manchuria, the majority of the members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party spread across the eastern Inner Mongolia went underground at the instruction of the Comintern under the disguises of Manchurian officials, etc. Upon the defeat of Japan in August 1945, the party declared its revival and widely deployed signature campaigns and other activities to represent the will of the ethnic Mongols in their aspiration for the unification with Mongolian People’s Republic. However, after Inner Mongolia was destined to remain within the Chinese territory under the “status quo” policy of “Yalta Agreement,” Inner Mongolian People’s Revolutionary Party sought to strike up a relationship with the Communist Party of China led by ethnic Hans. As the Mongolian self-determination movement was gradually watered down and modified as “part of the Chinese Revolution” by the Communist Party of China, they were only left to choose dissolution at the establishment of the Inner Mongolia Autonomous Government in May 1947

[Husel, 2002:57-75; 2003:34-55; Atwood, 2002; Yoshida, 2001:93-126; 2002:31-54; Altandelekei, 1999:256 – 263; Altandelekei, 2008:4-9].

Since 1967, about 20 years after its dissolution, the Chinese government used the momentum of the Cultural Revolution to revive the “evaluation” of the Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party’ s history of “ethnic separationist activities” and “cooperation with Japanese” , which they pressed on in the past. Mongols named as the members of the party suffered brutal violence and purge for a long period.

**Han Chinese Representatives:** According to Hao Weimin, the main forces to gouge out and purge the members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party were Workers’ Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop (Workers’ Advertisement Troop) and People’ s Liberation Army Mao Zedong Philosophy Advertisement Troop (Army’ s Advertisement Troop) sent out by the Chinese government. Hao argues that the Han Chinese members of the Workers’ Advertisement Troop and Army’ s Advertisement Troop were supported by “simple class sentiments.” Therefore, their unrestrained use of violence created the “atmosphere of terror” which dominated the autonomous region [Hao Weimin, 1991:311].

### **3. Genocidal activities committed under the direct command of the communist regime’ s representative are as follows:**

Activities in the following leagues (regions): Huhehota, Tumed Banner, Jirim League, Yeke-joo League, Juu-ud League, and Shilingol League

**Period:** According to Hao Weimin, the momentum of the purge of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party reached its peak between December 1968 and April 1969. That said, the purge against the Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party was already in place before the period.

Genocidal instance under the disguise of fake projects: Hao Weimin looks into the truth of “206

Incident” and argues that Chinese government claimed to have “discovered” the incident on February 6, 1963 and utilized it, naming it after the date of discovery. According to the “discovery,” there was a letter sent from Jining in the south of the territory addressed to Mongolian People’ s Republic, which stated that the “1st Congress of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” consisting of 22 representatives was held on November 26, 1961, followed by the 2nd congress held on February 3, 1962 with the participation of 43 representatives. The Communist Party further claimed that the number of “underground” members of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party reached 2,346. Upon the discovery of “206 Incident,” the public security authority of the Chinese government tried its best to solve the mystery but failed to find out the author of the letter. In the beginning, officials in the public security authorities agreed that the letter was “no more than a plot by an individual to sow discord.” However, this “plot to sow discord” was utilized once again as a pretext of purge and massacre after the Inner Mongolia Commission submitted a proposal titled as “Opinions on the Disposal concerning Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party” on July 20, 1968 [Hao Weimin, 1991:310-311]. Mongols involved in the “206 Incident” and government officials involved in the investigation of the incident are aware that the incident was a self-made plot by the government [Yang 2009b:110-112].

### **4. After the Genocide, the Chinese government laid the blame on the Mongols to escape its historical responsibility. The grounds to support this statement are as follows:**

Soon after the Cultural Revolution, the Communist Party of China implemented a nationwide rearrangement of the regime. In the “Resolution on Several Historical Issues of the Party since the Founding of the People’ s Republic of China” adopted at the “6th Plenary Session of the 11th Central Committee” held in June 1981, the party announced that the revolution was a movement “erroneously invoked by the leaders and were

exploited by antirevolutionary groups<sup>4</sup>. The announcement concluded that the tremendous damage the nation suffered during the revolutionary movement was caused by “antirevolutionary groups led by Lin Biao<sup>5</sup> and Jiang Qing<sup>6</sup>.” In 2004, the Central Advertisement Department announced “Notice on Reaffirming the Strict Implementation of Relevant Publication Regulations,<sup>7</sup>” in which it states “publication and announcement of still disputed issues must be handled with precautions to seriously take social repercussions into account.” The announcement further stipulates that “contents that may be detrimental to ethnic solidarity must not be published.” In other words, the statement seems to arbitrarily admit that the Cultural Revolution was detrimental to the “ethnic solidarity” but prohibit people from writing about it. Therefore, it suggests that research works on the Cultural Revolution within China must be in line with the governmental policies. It goes without saying that once a study tries to dig deep into the revolution, it inevitably touches issues surrounding the political system of the Communist Party of China. Therefore, studies on the Cultural Revolution carry a lot of taboos. Particularly in regions resided with ethnic minorities like Inner Mongolia,<sup>8</sup> study and publication of books on the revolution may entail physical danger because of the “ethnic issue” embedded in them.

Some researches on the revolution taking place in large cities across China are permitted for publication, as the Chinese government tolerates them. Also, books discussing the revolution have been published in countries like Japan, US, Taiwan, Hong Kong, and Macao. Most influential studies published in China include Wang Nianyi’s “The Age of Great Turmoil – A Decade of History of Cultural Revolution” (1988, 2005) and Xi Xuan and Jin Chunming’s “Brief History of the Cultural Revolution” (1996), both of which have been translated into Japanese. In Hong Kong, Yan Jiaqi and Gao Gaozuo published “A Decade of History of

the Cultural Revolution (1st and 2nd volumes) (1986). These works predominantly deal with the Cultural Revolutionary movements in Beijing, Shanghai, Guangzhou, and other metropolises, but references to the revolution initiated in Inner Mongolia, Tibet, and other regions inhabited by ethnic minority groups are very limited. Territories of ethnic minorities are regarded not only by the Chinese government but also among the Han Chinese general public as “inherent territories of China.” Despite this fact, the general Han Chinese population is apathetic and indifferent to atrocities and suppressions against ethnic minorities like the Cultural Revolution, while the government is eager to hide the fact. This might be the major reason that makes it difficult to publish studies and books on the realities of revolution in the territories of ethnic minorities. The motivation behind their attempt to continuously cover up the atrocities is essentially the same as the motivation behind the atrocities.

In Japan, researches on the Chinese Cultural Revolution took place when the revolution was rampaging across China. In the beginning of the revolution, the Japanese academics were split into those who praised the movement and those who criticized it, but as the realities of the revolution gradually emerged, the majority turned critical of the revolution. Recent prominent works include Mineo Nakajima’s “Beijing in Blaze (北京烈烈)” (1981, 1st & 2nd volumes), Susumu Yabuki’s “Cultural Revolution” (1989), Noboru Maruyama’s “The Road to the Cultural Revolution” (2001), and so on.

**Even today, studies on the revolution are banned to deprive people of the freedom of speech and academic freedom and to hide the truth.**

Because the realities of the revolution in Inner Mongolia is a taboo in China, researches and publications are subject to rigorous censorship. In 1994, Professor Yuan Hongbing of the Beijing University Law School wrote a novel based on the

---

4 The original script states that the “Cultural Revolution” was erroneously invoked by the leaders and were exploited by antirevolutionary groups, which led to a civil war severely damaging the nation and people of various ethnicities.

5 He was appointed during the Cultural Revolution as the replacement of Liu Shaoqi, the ousted successor of Mao Zedong, but attempted to assassinate Mao and conspire a coup d’etat. Later, he was killed in a plane crash on his way to defection. The incident is known as “9.13 Incident.”

6 Mao Zedong’s wife. During the Cultural Revolution, she yielded power as the deputy director of the Central Cultural Revolution Group.

7 This notice includes the gist of two official documents, “Notice on the Careful Handling of Specialized Books and Theses concerning the History of Cultural Revolution” in 1986, which set up a tolerance limit of studies on the Cultural Revolution, and “Some Rules on the Issues concerning the Publication of Books on ‘Cultural Revolution’ by the Central Advertisement Department and Newspaper Publishers” in 1988.

8 While it is Inner Mongolia Autonomous Region in Chinese administration, Mongols generally call it as “Southern Mongolia.”

revolution carried out in Inner Mongolia, “Freedom in the Sunset,”<sup>9</sup> but was secretly arrested before the publication. Because of the supportive stance towards students in the Tiananmen Square Incident in 1989, he was imprisoned on the charge of “attempting to overturn socialism system.” Professor Yuan is a Han Chinese raised in Inner Mongolia and experienced the entire Cultural Revolution, which began as he entered junior high school and ended when graduating university.

The first publication dealing with the revolution in Inner Mongolia is “Kang Sheng and False Accusation of ‘Inner Mongolian Party’” by Tumen and Zhu Dongli (1995, 1996). It was initially published in Chinese, but two versions of Mongol translation were published later to make the volume popular not only among Mongols but also the Han Chinese population. The author, General Tumen, is an ethnic Mongol from Qarchin Region (present Liaoning Province) of Inner Mongolia, who joined the People’s Liberation Army of China, was promoted to the colonel, and then to the general in 1988, while also being a law scholar. General Tumen interviewed over 300 people, including the survivors of the atrocities and senior officials who instructing the purge. His book is based on official documents by governmental authorities published as “Documents / Files”<sup>10</sup> during the revolution, as well as his own journals. There are two major reasons behind the successful publication of the book. First, as demonstrated in the book title, it specifically attributes “errors” of “massacres of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party” made in Inner Mongolia to Kang Sheng,<sup>11</sup> a member of the “antirevolutionary group led by Lin Biao and Jiang Qing,” instead of the central authority of the Communist Party led by Mao Zedong. The other reason is that the book does not make any

reference to the Communist Party’s attempt to solve “ethnic issues” through “ethnic eradication” as the true purpose of the revolution in Inner Mongolia characterized by massacres of Mongols. While these two points are subject to criticism, “Those who live in the contemporary China cannot break free from the shackles put by the Communist Party. They already suggest the points of criticisms in their works, and readers readily know that” (Yang Haiying, 2009).

Next example is “Record of Damage in the Incident of ‘Gouging Out and Purging Members of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party’ in Inner Mongolia (Inner Mongolia Purge Record)” published underground by Altandelekei in 1999. The title has become an important reference in the study of the revolution in Inner Mongolia. Mr. Altandelekei is one of the Mongolian officials ousted as a “member of Inner Mongolian People’s Revolutionary Party” during the revolution, who served upon the end of the revolution as the director of “Petition Office,” a governmental agency managing petitions from the victims of the revolution in Inner Mongolia. Based on primary sources like “petition letters” filed by Mongols claiming for damages and the government’s official documents, the paper depicted the history of massacre faced by ethnic Mongols by introducing typical cases collected from almost entire Inner Mongolia. According to the account of the author concerning the work, Mr. Altandelekei intentionally collected and kept materials since the earliest days of the revolution. The book also provides in-depth analysis of “Mongolian students’ movement” in 1981<sup>12</sup> and points out that the Chinese government’s policy on ethnic minorities has not changed at all since the revolution. The book stresses how Mongolian autonomy is lost through the revolution executed in Inner Mongolia, which triggered the massacre of

---

9 Mr. Yuan Hongbing is a Chinese Han raised in Inner Mongolia. He witnessed the brutal murder by Han Chinese perpetrators of parents of his classmate from junior high school on charge of being “antirevolutionary elements.” According to Mr. Yuan, he started writing this book since age 19. He says that it is his mission to let the world know about the massacres and other inhumane crimes committed by the Chinese Communist Party against Mongols. Since 1980s, a number of novels featuring the Cultural Revolution in China have been published as a genre known as “literature of the wounded” and are gaining attention. Recent publications include “Purgatory” by Darkhan featuring the Cultural Revolution in Inner Mongolia and “Earth Declaration – a Great Allegory of the Grassland” by Ligden, which was translated into Japanese.

10 “Documents (文件)” are official documents published by governmental agencies, while “Files (档案)” refer to personal statements of residents.

11 He was the head of the intelligence agency of the central government of the Communist Party and was one of Mao’s most trusted men at the time.

12 In 1981, the central government of the Communist Party issued the 28th official document instructing the mass relocation of Han Chinese farmers to Inner Mongolia, which triggered the student protest across Inner Mongolia. Immunity from prosecution of General Teng Haiqing, who was responsible for ordering the massacre of Mongols during the Cultural Revolution but then promoted to an influential post, was also the major cause of protest.

Mongols by general Han Chinese population, who were mobilized by those in power. Furthermore, Teng Haiqing and other Han Chinese officials in the Communist Party who led the massacre remained immune from justice. On the contrary, they were restored to important positions in the government under its protection. According to the book, the Communist Party government's continuously discriminatory policy towards Mongols led to the rise of the Mongolian students' movement in 1981. The paper is straightforward in arguing that "Mongols lost their space of living due to the influx of Han Chinese farmers in Inner Mongolia, and the abolition of Mongolian alphabets and destruction of its culture is driving the ethnic Mongols to the verge of extinction" [Altandelekei 1999]. Because these arguments on this issue were completely beyond the tolerated extent of the Communist Party of China, the publication of the book was banned. Nevertheless, Mongolian readers in Inner Mongolia extensively share the copies through mutual reference. These days, its contents are available online. Professor Yang Haiying of Shizuoka University praises Mr. Altandelekei's "Inner Mongolia Purge Record" as "the product of research efforts on the massacre of Mongols at the highest level so far" (Yang Haiying, 2010).

"Storm of the Inner Mongolian Revolution (an Oral History of a Rebel Supreme Comrade)" by Gao Shuhua and Cheng Zhijun was published in Hong Kong in 2007. The two authors were both leaders of "Rebel Red Guards"<sup>13</sup> of Inner Mongolia Normal University during the revolution. From 1973 to 1976, Gao Shuhua was appointed as a vice secretary of Tumed Left Banner.<sup>14</sup> Cheng Zhijun was a journalist of "Inner Mongolia Journal," a newspaper company of Inner Mongolia, between 1967 and 1971. The book is based on Gao Shuhua's posthumous writings, which Cheng Zhijun edited and added with comments on Gao's commission. In the book, the authors take a

position that Mao Zedong used youthful "Red Guards" to purge his political enemies and then shifted all blames to "Red Guards" about the use of violence to purge them, pointing out that the last victims of the revolution were myriad youths, including the authors. Gao Shuhua confesses that, while he was doubtful about "the purge of Inner Mongolian People's Revolutionary Party" and was not supportive of the violent measures taken against Mongols, he did not have the guts to oppose (Gao Shuhua and Cheng Zhijun, 2007). Gao considered that the revolution was a fruit of bureaucratic autocracy of the Chinese Communist Party with Mao Zedong at the helm, and the entire Chinese population was left at the mercy of Mao Zedong's machinations (Gao Shuhua and Cheng Zhijun, 2007). Gao's thoughts are based on the viewpoint that the ethnic Mongol population is part of Chinese people and that the predicaments suffered by Mongols consist the suffering of the entire Chinese population.

Qizhi (aka. Wudi or Woody) is a private researcher in China specialized in Sibe people. Despite the severe restrictions the Chinese government imposes, he continues to look into the realities of the revolution in Inner Mongolia. Between 1968 and 1971 when the revolutionary movements were at its height in Inner Mongolia, Qizhi was sent to Tumed Left Banner, the area of focus of this paper, as an "intellectual youths"<sup>15</sup> to engage in the revolutionary operations. While his research works are naturally banned from presentation or publication in China, "The Revolutionary Massacre," a book co-authored with Song Yongyi, a researcher based in the US, has been translated into Japanese under the title of "Mao Zedong's Revolutionary Massacre" (Song Yongyi and Shuji Matsuda, 2006). In his article titled as "Circumstances around the Great Massacre of 'Inner Mongolian Party' - an Unprecedented Calamity Hitting Ethnic Mongols" in the book, Qizhi points

---

13 "Red Guards" refer to youths and students in urban areas who executed the overthrow of officials named as "capitalist authorities" and "shapeshifting monsters" in response to Mao Zedong's calls. Eventually, students supporting officials condemned as "capitalist authorities" emerged, and the group was split into rebels and conservatives in confusion, but both called themselves as Red Guards.

14 Tumed Left Banner. "Banners" are administrative units introduced during Qing Dynasty and are equivalent to counties in other provinces in China. It forms part of Huhhot area, the capital of the autonomous region. Tumed Left Banner and Tumed Right Banner are jointly referred to as Tumed Banner in general. It is the area of focus of this paper, as discussed in more detail later.

15 The youths mobilized to overthrow Mao Zedong's political enemies during the Cultural Revolution later became jobless in the urban areas. To address this serious issue and to prevent them from becoming a political threat, the government sent urban youths to rural agricultural areas under the pretext of support. While they went by the euphemism of "intellectual youth," most of them were junior high school graduates and high school dropouts.

out that the revolution executed in Inner Mongolia was characterized by the “ethnic issue” (Wudi, 2006) and that the people ultimately responsible for the massacre of Mongols is Mao Zedong and his central government of the Chinese Communist Party. According to him, Mao Zedong is the ringleader and should be held responsible as a primary perpetrator (Wudi, 2006). The clarity in this statement concerning the essential element of the revolution in Inner Mongolia is notable.

In 2010, “A Record of the Revolution in Inner Mongolia - Ethnic Schism and the Purge” by Qizhi was published by a publisher in Hong Kong. The book depicts how the revolution unfolded in Inner Mongolia by citing newspapers and wallposters published during the revolution, internal documents of governmental agencies, and personal interviews. In the book, he points out that, among various challenges within Inner Mongolia, the “existing” conflict of interest (Qizhi, 2010) between ethnic minorities and Han Chinese aggravated in terms of severity because of the revolution. According to him, the revolution nurtured the rebellious thoughts fanned by extremist thoughts and the most barbaric means, which allowed the idea of ethnic democracy to become one of the major trends in ethnic minorities’ territories (ditto). The thoughts took an explosive momentum, he points out, in the form of Mongolian students’ movement in 1981. The book concludes by citing Ulaganhu’ s speech to support the argument that “the ethnic Hans and ethnic minorities are inseparable” (ditto) and points out the risk of advocating for the separation and independence of ethnic Mongols because of the fear of another massacre it may incite (ditto).

The above are researches published in and/or outside China on the Cultural Revolution executed in Inner Mongolia. These works are important demonstrative researches in understanding the realities of the Chinese Cultural Revolution in Inner Mongolia and are valuable references. The works suggest how Mao Zedong’ s divinization was made possible by the autocratic system of the Communist Party’ s regime, which in turn enabled the execution of the Cultural Revolution, a movement of violence rendering tremendous damage on entire China. The researches further imply that even after the revolution, the central government of the Communist Party of

China has not revised its policies towards territories of ethnic minorities and still adheres to the same policies since the revolution.

##### **5. Specific number of victims of atrocities, death tolls, and number of victims of violence left with disabilities are as follows:**

According to the modest official statement of the Chinese government, 346,000 people were arrested, of which 27,900 were killed, and 120,000 were left with disabilities. The ethnic Mongols, whose population was 1.4 million at the time, consider the “purge” as the genocide led by the government [Yang, 2008:419-453; 2009 a:1-5].

“History of Inner Mongolia” edited and published by Hao Weimin and Haranud Odonbilig from Inner Mongolia University Press in 1991 is designed to showcase the “amazing development of Inner Mongolia” thanks to the implementation of the “Reform and Liberation” policy. The book provides data on the number of Mongolian victims. According to the book, “From urban areas to agricultural villages, pastures, and forestry areas, Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party and its variants were considered to be ubiquitously present. On this assumption, as many as 346,000 officials and common people were falsely charged and persecuted. The death toll reached 16,222, but if you include other incidents of false accusation, more than 27,900 people were killed in total” [Hao Weimin, 1991: 313-314]. Here, “other incidents of false accusation” mainly refer to the campaign called “Dig Ulaganhu's black thread, eliminate Ulaganhu's malignant tumor” prior to the launch of the purge of Inner Mongolian People’ s Revolutionary Party. When the “antirevolutionary group led by Lin Biao and Jian Qing” was tried in court later in 1980s for all crimes committed under the pretext of the Cultural Revolution, the expression of “27,900 people in total” was removed from official statements and replaced with “death toll at 16,222” in the indictment and also on the government’ s official documents. Both numbers were manipulated and significantly reduced, but the Chinese government decided that a smaller number is more reasonable.

Backgrounds Giving Rise to the Revolution: Against the backdrop of international situations of the

time, the revolutionary movement in China actually started from Inner Mongolia. In 1950s, the Chinese government strategically divided the nation into three warfronts in preparation for possible counterattack on the continent by Kuomintang and capitalists' invasion, in which Inner Mongolia was included in the "third warfront" . However, as the relationship between China and the Soviet Union soured in 1960s, Inner Mongolia became the frontline in the fight against "revisionists." At the time, Ulaganhu was an extremely powerful figure in Inner Mongolia, serving as the chair of the territory, party secretary, district commander, and the second secretary of north China. For the Communist Party' s central government, Ulaganhu and other Mongols were regarded as not trustworthy after all, as Inner Mongolia became the "frontline against revisionists." In deploying a nationwide revolutionary movement, it was necessary for the government to secure the borders by ousting ethnic Mongol authorities and replacing them with more trustworthy figures. This was why the revolutionary movement started from Inner Mongolia and why Ulaganhu was the first official to be removed from his office among those in power in other provinces and Inner Mongolia.

The revolutionary movement in Inner Mongolia can be roughly divided into two stages. The first stage took place from late 1966 to early 1968, in which the government waged a campaign against "Ulaganhu' s group of antiparty traitors." The second stage began when "Inner Mongolia Revolutionary Committee," established as the new authority of the region on November 1, 1967, launched a campaign to "gouge out the Ulaganhu' s reactionary supporters to detoxify and purge." From early 1968, the movement to "gouge out and purge" officially started, in which the massacre at a massive scale took place.

The "gouge out and purge" movement was executed throughout Inner Mongolia at the command of General Teng Haiqing with his military playing the central role. As described by General Teng Haiqing' s secretary Li Dechen at the time, the movement reached every corner of Inner Mongolia "under the principle of decisiveness" and "like digging into the

inner circle of the flock of sheep" . As a result of the revolutionary movement driven by violence and massacres, approximately 346,000 out of less than 1.5 million ethnic Mongol population at the time were condemned as members of "Ulaganhu' s group of antiparty traitors" or "Inner Mongolian Party." 27,900 were killed in the movement.<sup>16</sup>

## 6. List of references (collections of information, academic papers, books, etc.)

1. Yang Haiying, "Grassland without Tombs – Cultural Revolution in Inner Mongolia; the Memory of Massacre" (1st & 2nd volumes), Iwanami Shoten Publishers, 2009, Tokyo.
2. Yang Haiying, editor, "Basic Data on the Mongolian Genocide (2) – Purge of Inner Mongolian People' s Revolutionary Party," Fukyosha Publishing Inc., 2010.
3. Yang Haiying, editor, "Basic Data on the Mongolian Genocide (3) – Down with Ulaganhu," Fukyosha Publishing Inc., 2011.
4. Yang Haiying, editor, "Basic Data on the Mongolian Genocide (4) – Theory of Self-determination Named as Poisonous Weed," Fukyosha Publishing Inc., 2012.
5. Yang Haiying, editor, "Basic Data on the Mongolian Genocide (5) – Victims' Reports (1)," Fukyosha Publishing Inc., 2013.
6. Buyantu, "Contemporary History of China from Inner Mongolia' s Viewpoint," Shukousha, 2015.
7. Borjigin Husel, "A Discussion on the Political Situation in Inner Mongolia on the Eve of Cultural Revolution – with the Movement against 'Ethnic Separationist Elements' in Inner Mongolia University as the Central Theme," Showa Women' s University, Gakuen Special Edition on Center for General Education № 811 (24) – (37) (May 2008), Tokyo.
8. Borjigin Husel, "Penetration of Chinese Communist Party in Inner Mongolia – a Review of Process towards '4/3 Conference' ," Showa Women' s University, Gakuen Special Edition on Center for General Education № 787 (May 2006), Tokyo.

<sup>16</sup> Gao Shuhua, the leader of the rebel faction at the time, assumed in his oral memoir that at least 500,000 people were tortured and 50,000 were killed.

9. Borjigin Husel, "Transition of Land Policy in Inner Mongolia (1946 – 1949) – with the Development of 'Land Reform' as the Central Theme," Showa Women' s University, Gakuen № 791(24) – (43) (Sep 2006), Tokyo.
10. Borjigin Husel, "Discussions on Chinese Communist Party' s Policy for Inner Mongolia (1926 – 1936)," Showa Women' s University, Gakuen № 797 (20) – (31) (Mar 2007), Tokyo.
11. Borjigin Husel, "Religious Policies of Chinese Communist Party for Inner Mongolia (1946 – 48 年)," Showa Women' s University, Gakuen № 793 (56) – (66) (Nov 2006), Tokyo.
12. Altandelekei, author and editor, "Record of Calamity in Inner Mongolia," unpublished.
13. Cao Yongnian et al., editor, "General History of Inner Mongolia," Inner Mongolia University Press, 2009, Huhehot.
14. Hao Weimin, editor, "History of Inner Mongolia," Inner Mongolia University Press, Huhehot, 1991.
15. Hao Weimin, editor, "History of Inner Mongolia Revolution," People' s Publishing House, Beijing, 2009.
16. Gao Shuhua and Cheng Zhijun, "Storm of the Inner Mongolian Revolution – an Oral History of a Rebel Supreme Comrade," Mirror Media Group, 2007, Hong Kong.
17. Hao Weimin et al., editor, "A Brief History of Inner Mongolia," Inner Mongolia University Press, 1992, Huhehot.



1 - ר' רפאל לנמקין ( Raphael Lemkin ) , ר' רחל אהרן לנדא , ר' יצחק ז'אנבין , ר' יצחק בן צוויג ( Genocide ) : מאמרים

...ר' יצחק ז'אנבין , ר' רחל אהרן לנדא , ר' יצחק בן צוויג

ולא לומר כי אין זה אלא "התאבדות" (Genocide) כפי שנקראו הדברים במונחים המודרניים. אלא כי מדובר באירועים שהיו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל. אירועי השואה היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל.

האירועים היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל. אירועי השואה היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל.

האירועים היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל. אירועי השואה היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל.

האירועים היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל. אירועי השואה היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל.

האירועים היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל.

...ר' יצחק ז'אנבין , ר' רחל אהרן לנדא , ר' יצחק בן צוויג

האירועים היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל. אירועי השואה היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל.

האירועים היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל.

האירועים היו תוצאה של אידואולוגיה קיצונית, שראתה ביהודים "אויב" ו"פולחן" עליו נבנתה מדינת ישראל.

3 . אריאל שרון, 60 שנותי, 2002, ירושלים: הוצאת ידיעות נועם, עמ' 202.   
 2 . אריאל שרון, 60 שנותי, 2002, ירושלים: הוצאת ידיעות נועם, עמ' 202.   
 3 . אריאל שרון, 60 שנותי, 2002, ירושלים: הוצאת ידיעות נועם, עמ' 202.

למרות זאת, יש להבחין בין שני סוגים של חשיבות. חשיבות ראשונית היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות ראשונית היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות ראשונית היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי.

**החשיבות של האחר והאחריות**

החשיבות של האחר והאחריות היא שני מושגים שיש להם יסוד אנושי.

החשיבות של האחר והאחריות היא שני מושגים שיש להם יסוד אנושי. החשיבות של האחר היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות ראשונית היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי.

החשיבות של האחר והאחריות היא שני מושגים שיש להם יסוד אנושי. החשיבות של האחר היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות ראשונית היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי.

**החשיבות של האחר והאחריות**

החשיבות של האחר והאחריות היא שני מושגים שיש להם יסוד אנושי. החשיבות של האחר היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות ראשונית היא זו של האדם עצמו, שיש לה בהכרח יסוד אנושי. חשיבות שנייה היא זו של האחר, שיש לה בהכרח יסוד אנושי.

לדגל ארץ ישראל... «  
...  
...»

...  
...  
...»

...  
...  
...»

Ⓢ **התאחדות הציונים הכלליים**

...  
...  
...»

**התאחדות הציונים הכלליים**

...  
...»



4 רפובליקה ליהודית פרו דימוקרטיה ורפורמות 1978-1979. תל אביב: הוצאת כתר, 1979.

5 רפובליקה ליהודית פרו דימוקרטיה ורפורמות 1978-1979. תל אביב: הוצאת כתר, 1979.

6 רפובליקה ליהודית פרו דימוקרטיה ורפורמות 1978-1979. תל אביב: הוצאת כתר, 1979.

לדעתו, הלימה של המדינה לשינויים ולתנאים החדשים, נובעת מהתאמתה לשינויים. אולם, המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן. המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן. המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן.

**2.2.1.2 המדינה והשינויים**

המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן. המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן. המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן.

**2.2.1.3 המדינה והשינויים**

המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן. המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן. המדינה אינה יכולה להתאים את עצמה לשינויים באופן מיידי, ולכן יש צורך בהתאמה לאורך זמן.

**2.2.1.4 המדינה והשינויים**



הכרזה

ההוצאה לאור נמשכה לאורך כל שנותיו, והוא נחשב לאחד המייסדים והמנהלים של ההוצאה לאור. הוא נשאר בתפקידו עד לפטירתו ב-1978. ההוצאה לאור הפכה לאחד מהמוסדות החשובים ביותר בישראל, והיא אחראית על פיתוחו והתפתחותו. ההוצאה לאור הציגה 10 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת".

### ההוצאה לאור והתפתחותה

ההוצאה לאור החלה להתפרסם בשנת 1948, והיא נחשבת לאחת מהמוסדות החשובים ביותר בישראל. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת". ההוצאה לאור הפכה לאחד מהמוסדות החשובים ביותר בישראל, והיא אחראית על פיתוחו והתפתחותו. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת". ההוצאה לאור הפכה לאחד מהמוסדות החשובים ביותר בישראל, והיא אחראית על פיתוחו והתפתחותו. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת".

### ההוצאה לאור והתפתחותה

ההוצאה לאור החלה להתפרסם בשנת 1948, והיא נחשבת לאחת מהמוסדות החשובים ביותר בישראל. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת". ההוצאה לאור הפכה לאחד מהמוסדות החשובים ביותר בישראל, והיא אחראית על פיתוחו והתפתחותו. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת". ההוצאה לאור הפכה לאחד מהמוסדות החשובים ביותר בישראל, והיא אחראית על פיתוחו והתפתחותו. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת".

### ההוצאה לאור והתפתחותה

ההוצאה לאור החלה להתפרסם בשנת 1948, והיא נחשבת לאחת מהמוסדות החשובים ביותר בישראל. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת". ההוצאה לאור הפכה לאחד מהמוסדות החשובים ביותר בישראל, והיא אחראית על פיתוחו והתפתחותו. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת". ההוצאה לאור הפכה לאחד מהמוסדות החשובים ביותר בישראל, והיא אחראית על פיתוחו והתפתחותו. ההוצאה לאור הציגה 17 כותרות, בהן "המחשבה הפועלת" ו"המחשבה הפועלת".







Ⓐ **רֵאשִׁיתוֹת מִבְּרֵית הַמִּלְחָמָה**

...הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 2307, הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 47500 וְהַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 14329.

Ⓑ **רֵאשִׁיתוֹת מִבְּרֵית הַמִּלְחָמָה 6.**

...הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 5 וְהַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700, הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700, הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700.

Ⓒ **רֵאשִׁיתוֹת מִבְּרֵית הַמִּלְחָמָה 6.**

...הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 5 וְהַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700, הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700, הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700.

Ⓓ **רֵאשִׁיתוֹת מִבְּרֵית הַמִּלְחָמָה 6.**

...הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 5 וְהַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700, הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700, הַמִּלְחָמָה לְשָׁנָה 1700.











29  
לפי כרטיסיהם « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה »

לפי כרטיסיהם « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה »

לפי כרטיסיהם « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה »

לפי כרטיסיהם « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה »

לפי כרטיסיהם « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה » למה « לה זמירותם ולתורה »





12. انچه هفتاد و نه درصد از آبخیزها و رودخانه‌های کشور، در استان خراسان جنوبی قرار دارد (بهار، 1389).  
 13. «بررسی ارض‌شناسی و زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی»، وزارت صنایع و معادن، تهران، 1385.  
 14. «بررسی ارض‌شناسی و زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی»، وزارت صنایع و معادن، تهران، 1385.  
 15. «بررسی ارض‌شناسی و زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی»، وزارت صنایع و معادن، تهران، 1385.

«... بررسی‌ها در زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی در طی دهه 70 و 80 خورشیدی و در پی اجرای طرح توسعه استان خراسان جنوبی و در راستای بررسی وضعیت زمین‌شناسی و ارض‌شناسی این استان، در سال 1381» (بهار، 1389) که در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت.

«... بررسی‌ها در زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی در طی دهه 70 و 80 خورشیدی و در پی اجرای طرح توسعه استان خراسان جنوبی و در راستای بررسی وضعیت زمین‌شناسی و ارض‌شناسی این استان، در سال 1381» (بهار، 1389) که در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت.

«... بررسی‌ها در زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی در طی دهه 70 و 80 خورشیدی و در پی اجرای طرح توسعه استان خراسان جنوبی و در راستای بررسی وضعیت زمین‌شناسی و ارض‌شناسی این استان، در سال 1381» (بهار، 1389) که در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت.

«... بررسی‌ها در زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی در طی دهه 70 و 80 خورشیدی و در پی اجرای طرح توسعه استان خراسان جنوبی و در راستای بررسی وضعیت زمین‌شناسی و ارض‌شناسی این استان، در سال 1381» (بهار، 1389) که در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت.

«... بررسی‌ها در زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی در طی دهه 70 و 80 خورشیدی و در پی اجرای طرح توسعه استان خراسان جنوبی و در راستای بررسی وضعیت زمین‌شناسی و ارض‌شناسی این استان، در سال 1381» (بهار، 1389) که در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت.

«... بررسی‌ها در زمین‌شناسی استان خراسان جنوبی در طی دهه 70 و 80 خورشیدی و در پی اجرای طرح توسعه استان خراسان جنوبی و در راستای بررسی وضعیت زمین‌شناسی و ارض‌شناسی این استان، در سال 1381» (بهار، 1389) که در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت. همچنین در ادامه این مطالعه، در فصل 5 مورد بحث قرار خواهد گرفت.





17. 郝維民主編『内蒙古近代簡史』内蒙古大学出版社、1992年、Huhchoia。
16. 高樹華、程鉄軍 合著『内蒙文革風雷——一位造反派領袖的口述史』明鏡出版社、2007年、香港。
15. 郝維民 編『内蒙古革命史』人民出版社、北京、2009年。
14. 郝維民 編『内蒙古自治区史』内蒙古大学出版社、Huhchoi、1991年。
13. 曹永年 主編『内蒙古通史』内モンゴル大学出版社、2009年、Huhchoia。
12. 阿拉騰徳力海編著『内蒙古控肃灾难实录』禁书（出版社がなし）。  
11) 東京。
11. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党の内モンゴルに対する宗教政策（1946年～48年）」、昭和女子大学、学園・№793 (56) ～ (66) (2006・東京)。
10. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党の対内モンゴル政策（1926年～36年）の考察」、昭和女子大学、学園 №797 (20) ～ (31) (2007・3) 昭和女子大学、学園 №791 (24) ～ (43) (2006・9) 東京。
9. ボルジギン・フスレ 著「内モンゴルにおける土地政策の変遷について（1946年～49年）——『土地改革』の展開を中心に——」、昭和女子大学、学園・総合教育センター特集 №787 (2006・5) 東京。
8. ボルジギン・フスレ 著「中国共産党勢力の内モンゴルへの浸透——『四三会議』にいたるまでのプロセスについての再検討——」、昭和女子大学、学園・総合教育センター特集 №811 (24) ～ (37) (2008・5) 東京。
7. ボルジギン・フスレ 著「内モンゴルにおける文化大革命直前の政治状況についての一考察——内モンゴル大学における『民族ボヤント』著「内モンゴルから見た中国現代史」、集広舎、2015年。
6. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (5) -被害者報告書 (1)』風響社、2013年。
5. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (4) -毒草とされた民族自決の理論』風響社、2012年。
4. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (3) -打倒ウランフー（烏蘭夫）』風響社、2011年。
3. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (2) -内モンゴル人民革命党肃清事件』風響社、2010年。
2. 楊海英 編『モンゴル人ジェノサイドに関する基礎資料 (1) -内モンゴル人民革命党肃清事件』風響社、2010年。
1. 楊海英 著者「墓標なき草原——内モンゴルにいける文化大革命・虐殺の記録」(上、下) 岩波書店、2009年、東京。

«  
»

«  
»

«  
»

«  
»



# クリルタイ結成宣言

ジンギスカンの子孫である我々モンゴル人は、自分たちの祖国を失ってから、何百年もの間他民族の支配下に置かれてきました。しかし、20世紀後半から、ゴビ砂漠以北のモンゴル人たちは、世界のほかの民族と同様、自分たちの国家を持ち、自由と民族、そして自国民の生活向上に向けて前進しています。

しかし、ゴビ砂漠以南のモンゴル人たちは、いまだに自らの祖国を独立できず、他民族の支配に置かれたままです。そして、第二次世界大戦後、当時の国際情勢や列強諸国の圧力により、この地域は中国共産党政権の抑圧体制に組み込まれてきました。そして現在に至る約七十年間にわたり、この地域にモンゴル人に対して、残酷な弾圧と虐殺が繰り返されています。私たちは、この「南モンゴル」の実情を、国際社会に訴えます。

南モンゴル人は、集会、結社、自由、政党の組織、言論などあらゆる自由を奪われ、民族固有の領土である草原は環境汚染にさらされています。また文化大革命時、内モンゴル人民党とみなされた人々が大量に虐殺されました。漢民族の大量流入により、南モンゴル人の経済基盤は破壊され、モンゴル人の伝統である遊牧と自然との共生した生活を維持することも困難な状況です。さらに、漢民族への同化政策により、モンゴル人は、言語、文化、歴史などの民族的アイデンティティを奪われ、無数の知識人、僧侶が虐殺され、伝統的な寺院は破壊されてしまいました。

南モンゴル人たちは、これまで非暴力的な手段である、陳情、言論、抗議運動などを通じて、国内外で中国共産党政権に人権問題や環境破壊の改善を求めてきました。しかし、同政権は、ますます暴力的な弾圧を強め、南モンゴル人の正当な要請に耳を貸そうとしません。

私たち南モンゴルの自由と人権を求める諸団体は、ここに、国際連帯組織「クリルタイ（世界南モンゴル会議）」の結成を宣言します。私たちは諸団体の意見を相違を乗り越え、中国共産党の南モンゴルに対する弾圧に抗議し、彼らの支配下からの決別と、民族自決権の確立を目指すために共同して行動し、南モンゴルで抑圧と戦っているすべての人々に自由と幸福が訪れ、民族自決が実現するまで、私たちは闘い続けることを誓います。

2016年11月10日

クリルタイ（世界南モンゴル会議）結成大会参加者一同

〒 215-0021

神奈川県川崎市麻生区上麻生 5丁目 6-18

泰平ビル柿生 406 号室 南モンゴルクリルタイ 日本支部

[info@southmongolia.org](mailto:info@southmongolia.org)

[southmongolia.org](http://southmongolia.org)



2021年11月25日発行 発行者：クリルタイ日本支部

